〈プロローグ〉

　魔王が死んで既に二週間。魔王が死んだ事により起きた大きな混乱も何とか収束した。そして今、そんな魔王の墓に一人の男性の悪魔が立ち尽くす。青いメッシュが入った黒髪を短く切りそろえた悪魔だ。その顔立ちは消して悪くは無いが瞳は細くどこか狐や蛇を思わせる。名前はヴァイという。しかし、その顔に凡そ表情と呼ばれる者は無くどこか瞳も虚ろである。

「魔王様……どうして……」

　そうポツリと呟くヴァイは腰を屈みその石碑に手を伸ばす。その瞬間、石碑に幾何学的な文字により構成された円形の模様が浮かび上がる。そして、墓が重たい音をたて後ろにスライドする。それにより現われたのは地中に通じる穴と階段だった。

　ヴァイは一瞬戸惑うもすぐに意を決しその穴の中に入る。穴の中はヒンヤリと涼しく壁には明かりがついている。

「あの人らしいですね」

　ヴァイはそんな魔王の趣味を思い出しフッと笑う。それから、どれだけ下ったか分からなくなるまで下ると階段は無くなり代わりに一本道が見える。ヴァイはその道を進むと、最奥に石を切断し作られた机が存在した。その上には数十枚の紙の束がおかれていた。ヴァイはその紙の束の一枚目には大きく文字が書かれている

「魔王……選挙。これはいったい」

　ヴァイはその紙の束に目を通しそして理解した。これが、魔王ビブリオ・が自分あてに作られた遺書であることを。

　ヴァイはその紙の束の内容を全て読み終えるとすぐに踵を返し来た道を引き返す。そして、そのまま魔界の行政機関タルタロスの本拠地である〈魔王城〉に向かう。その間、ヴァイは魔術を使い七人の悪魔に連絡を取る。

　そして、数分後ヴァイはとある扉を開く。

「遅くなりました！〈〉ヴァイ。我が君の最後の命によりはせ参じました」

　ヴァイの目の前に設置している円形の机。しかし、その机には誰も座っていない。代わりにその机の上には七つの動物が彫られた石板が浮遊していた。

〈〉、ビブリオ･サタンが作った魔界の行政機関〈タルタロス〉の最高幹部にして今は亡きビブリオ･サタンが自ら認め仲間に迎え入れた存在。時代が違えば一人一人が王となり国を率いることができる程の力を持った文字通り化け物のような存在。

「やっと、来たわ。こんな、大変な時期に会議をしようとか考える馬鹿が」

　サソリが描かれた石板から男にも女にも聞こえる声がする。

〈七罪幹部〉の一人〈色欲〉の称号を持つ大悪魔ジェルミンである。

「それについては頭を下げるしか出来ません。しかし、本当に大切な事なのをご理解下さい」

『ふーん。大事な用ねー。で、何よ。さっき、チラッと我が君の最後の命令って言ってたけど？』

「そうですね。前置きはここまでにして早速本題に入りましょう。皆様にはこちらを見て欲しいのです」

　そう言いヴァイが出したには今し方魔王の墓で見つけた例の紙の束を前に出す。そして、ヴァイが手をかざし魔術を使う。これで、他の者達にも同じ書類が届いた事だろう。

　数分後、サソリの刻印が施された石版から声が聞こえる。

『ちょっと！　何よ！　これ！　説明しないさいよ！　ヴァイ!』

「説明もなにもそこに書かれていることが全てです。そこに書かれている者が魔王様の最後に意思。いわば遺言でございます」

　ただ、そう言うヴァイもジェルミンの言葉が分からない訳ではない。

　前魔王、ビブリオ・サタン。彼が最後に望んだのは自分がその人生全てをかけて作った魔界の行政機関タルタロスで働く悪魔トップ七十二人を主軸においた魔界全土を巻き込んだ壮大な選挙バトルなのだから。

　まさか自分の死後、自分が作り上げた組織が内部分裂も起こしかねない催し物を計画しているなんて一体誰が考えるだろう。

　しかし、どんな命令であれそれを主が望むならそれを実行に移すのがヴァイの指名である。

「確かに、ジェルミン様の気持ちも分からなくはありません。しかし、どうでしょう？　前魔王ビブリオ・サタン様が死に人々は不安を抱えています。次代の魔王にどんな者を立てたところで魔王ビブリオ・サタン程ではないと一度お思えば今までの一つに纏まっていた魔界が分裂する可能性もございます。それなら、いっそ民衆一人一人に選んで貰った方がまだ反感は買わないと思いますが」

　ヴァイの言葉に〈七罪幹部〉はしばらく黙っていたが数秒後獅子の彫られた石版から声がする。

「確かにヴァイの言うとおりかも知れない」

　その言葉を皮切りに他の幹部達もその言葉に迎合していく。元々、魔王に絶対の忠誠心を抱いるもの達だ。そんな彼らが魔王様の最後の言葉に否と答える道理はない。

「ありがとうございます」

　ヴァイは頭を下げ内心ガッツポーズを取る。これで、計画の第一段階は完了した。ヴァイにはこの魔王選挙を開催する事ともう二つ魔王の遺言がある。

　一つは、魔王ビブリオ・サタンを殺した人物を決して魔王にさせない事。そして、もう一つは、魔王ビブリオ・サタンの実の娘を守りぬく事である。

第一章

前魔王ビブリオ・サタンが死に魔王選挙の開催が発表されて数日後。魔王城に存在する荘厳な紅の扉にもたれかかるようにして一人悪魔がいた。銀を溶かしたと思うほど美しい髪後ろに長した女の悪魔。その顔はまるで精巧な人形のように整っているがどこか冷たさを感じる。名をグラ。

「遅い」

グラがそう言うと一人の悪魔が近づいてくる。漆黒の髪を短く切り左右に群青色のメッシュを入れた男の悪魔。瞳は細くどこか狐や蛇を思わせる悪魔ヴァイが現われる。

「失礼しました」

　ヴァイの謝罪にグラは言う。

「別に良い。それよりもここって」

「えー、言わずと知れた我が君のご息女、セシリア・サタン嬢の部屋でございます」

　グラの言葉にヴァイが答える。そう実を言うとヴァイには出馬権がない。理由はヴァイ、そして同時にグラが正確に言うとタルタロスの幹部ではないからだ。

〈〉タルタロスの七人の最高幹部〈〉と同じく魔王自らが選んだ直属の部下。その権力は魔王の名の下に〈〉と同じ権力を持つが。その立ち居位置はあくまでも魔王の直属の部下でしかないのである。

そんな、ヴァイが恐らくタルタロスに属していて尚且つ魔王選挙にでるであろう悪魔魔王にさせないというの至難の業である。そこで考えたのが自分の意思通りに動き尚且つ選挙出馬権のある人物を矢面に立たせるとう作戦だ。そこで、白羽の矢が立ったのがこの目の前の部屋に引きこもっている魔王の実娘の娘。セシリア・サタンである。

　しかも、これでそのセシリア・サタンが魔王になればそうそう魔王を殺した人物も手を出せず守り切る事が出来る。まさに一席二丁の作戦といえる。

「けど、お嬢様は外に出ない」

「えー、そうなんですよね」

　ヴァイは小さくため息をつく。セシリアは前魔王ビブリオが死んでから部屋に閉じこもっている。無理もない。母を早くに亡くし沢山の愛情を注いでくれた最愛の父親すらも突然死んだのだ。齢十六の少女が受け止められる大きすぎる。

「ただ、出てこないからと言っていつまでも放置していいわけではありません！　グラさん！　頼みます。この扉を破壊してください」

「いいの？　そんなことして。お嬢様、怒らない？」

「怒られるかもしれませんが、それならそれで好都合。人に好かれるならまず最初は悪感情を抱かれた方が好かれやすいものです」

「りょーかい。分かった」

　グラは、腰からナイフを取り出す。そして、その刃に魔力を貯める。すると、刃は銀色に光る。グラはそのナイフを扉に向かって横文字に振る。すると、一拍遅れ扉に切込みが入る。そして前に倒れた。当たりに粉塵が舞う。

「な、何！？」

　部屋の中から声が響く。粉塵をかき分けヴァイは、声のする方に向かう。

「ゴホッゴホッ、お久しぶりですね。セシリア嬢」

　ヴァイの目の前には一人の少女がいた。悪魔にしては珍しい金色の髪は揺るくウェーブがかかり両の瞳は紅に染まっている。その身は赤いドレスに身を包んでいる。そう、彼女こそビブリオ・サタンの実娘セシリア・サタンである。

「えっと、確か……お父さんの」

「はい魔王、直属幹部〈〉の一人ヴァイです」

それに、続くようにヴァイの隣で膝をつき頭を垂れグラも名乗る。

「同じく〈〉グラ」

唐突な二人の登場にセシリアは驚きながらも自分の意思をきちんと表示する。

「あの、とりあえず。私の部屋の扉を直してくださいね」

◇◇◇

「さて気を取り直して、セシリア嬢。今日は一つ頼みごとしたくてはせ参じました」

「は、はぁ」

　セシリアは行儀良く椅子に座る。その目の前にはヴァイが立っている。

　あれから、数十分。壊した扉を元通りとは言わなくとも一応扉として機能する所まで直したグラとヴァイは仕切り直しというかのようにセシリアの前に立つ。

「えっと、それで私に頼み事というのは？」

　セシリアは、目の前のグラに要件を聞く。その目線は、チラチラと上を向いたり下を向いたりと落ち着きがない。無理もない。いきなり自分の部屋に文字通り強行手段で父親の幹部が入ってきたのだ逆に落ち着けという方が酷だろう。

　ヴァイはセシリアを落ち着かせる為に穏やかにゆっくりと話す。

「そんなに、警戒しなくても大丈夫ですよ。私共もそこまで難しいことを頼むわけではありません。それに、嫌ならはっきり嫌と断る選択しが貴女にはあります」

　それを聞きセシリアは少し安心したのだろう。ふぅーと息を吐く。

「それで、頼みたいことと言うのは今回の魔王選挙にセシリア嬢も参加し魔王になって貰いたいのです」

「すいません！　無理です！」

　次の瞬間、グラとヴァイは部屋の外に追い出されていた。

「瞬間移動？　お嬢様の魔力？」

　突然の出来事に、グラは頭を捻る。

「いえ、我が君がセシリア嬢を守るために部屋に取り付けた魔術が発動したのでしょう。確か、セシリア嬢の精神に関与して発動するタイプでしたから」

　魔術とは、魔刻印を決められた法則に従い書き連れることで起こすことの出来る現象である。といっても、起こせる現象は小さな火球を出したり、今し方ヴァイ達が味わったように数メートルを強制的に移動させられたりという程度である。

　だが、その程度の効果も何度も起こると分かっていればこの場合は強力だ。なんせ、セシリアが少しでもヴァイ達を拒絶すれば話す前に問答無用で追い出されてしまうのだから。

「どうする？　ヴァイ。また入る？」

　そう言いグラはナイフを取り出す。しかし、それにヴァイはノーを突きつける。

「いえ、辞めておきましょう。今回、無理矢理入ったのは今のセシリア嬢の状態を見たかったというのと何が何でもファーストコンタクトを取りたかったからです。これ以上やると

本当に修復不可能なほど嫌われてしまいます」

「じゃぁ、どうする？」

「入れないなら、出せばいいのですよ」

そう言い、ヴァイは先ほど自らの手で直した扉に手をかける。

「セシリア嬢。今から、貴方の部屋に内蔵されている術式に魔力を流します。早く出ないと、暴走した術式の暴発に巻き込まれますよ」

　部屋から、ドタバタと慌てるようにしてこちら側に近づく足音が聞こえる。しかし、ピタリとその足音が止まる。部屋からセシリアの声が聞こえる。

「う、嘘です。そうやって私が自らこの部屋から出るようにしむけているだけです！」

　確かに、一度構築した魔術の術式に魔力を無理やり流せば術式は暴走し暴発する。だがそれをするためには直接術式に触れなければいけない。そして、セシリアの部屋に施された罠魔術の場所は部屋の天井。間違っても、扉には設置されていない。もしこの状況で術式を暴発させるなら大前提として罠魔術の設置場所を知っておかなければならに。

「そもそも、ヴァイさんたちは私を魔王に祭り上げたいのでしょう。だったら、私を傷つけることなんてするわけありません！」

　セシリアのその的確な反論に内心ヴァイは感心した。魔界では割とローカルな技術である魔術に対する知識と、相手の真意を瞬時に読み取りそれを生かした相手にぐうの音も言わせない弁術。

　ヴァイはセシリアの中に確かに魔王の血が流れていることを確信した。その証拠に多くの者たちがこの状況に陥れば手を引いていただろう。そう、相手がヴァイでなければ。

「なるほど。そう来ましたか。しかし、セシリア嬢。あまり、私を見くびらない方が良いかと」

　そういうと、ヴァイは扉に向かって魔力を流す。その魔力は壁を伝い的確に天井に設置された罠魔術に魔力が流れた。すると、円形の術式が回転していき点滅する。術式の暴走の兆しである。

「ど、どうして！」

　セシリアは焦る。目の前で起こっていることが信じられないのだ。

「この私が、部屋に入っていないならともかく入ったにも関わらず術式がどこにあるか看破していなかったと思いますか？　不思議に思いませんでしたか？　どうして、少なくとも貴方よりは力のある私たちがこうもあっさり罠にかかり部屋から追い出されたのか？」

「ま、まさか──……」

「えー全てブラフ、わざとですよ。それに、確かに私たちはセシリア嬢貴方の存在は必要です。けどね、究極的には貴方がいなくても私のプランには問題ないんですよ。ただいないより居た方が良いというだけで」

　ヴァイはさらに魔力を流す。すると、術式はさらに回転し煙を出す。もう、暴発一歩手前である。

ちなみに、あの一瞬で術式を見破ったというのは嘘である。実をいうと、セシリアの部屋に施してある術式は昔前魔王に頼まれてヴァイ自身が考案、設置した物なのである。つまり、ヴァイのこの脅しは言うなれば茶番。だが、その茶番を悟らせないところはさすが参謀といったところだろう。

「あと十秒で出てきてください。十、九、八」

「わかりましたから！　もうやめてください！」

　扉が開き中からセシリアが飛び出してくる。恐らくセシリアも無我夢中で出てきたのだろう。出てきた瞬間やってしまった、という表情を作り、すぐに扉をしめようとする。だが、そこをヴァイは逃さない。

「グラさん。セシリア嬢を捕まえてください」

「うん、分かった」

　グラは、どこからともなくロープを取り出すと、さながらカーボーイのようにセシリアスの体に縄を巻き付け捕獲するのだった。そして、そのままセシリアはその場に座らせられる。その目の前にはヴァイが立っている。

「さっ！　セシリア嬢。昨日の話の続をしましょう。私たちの要件は変わりません。貴女に魔王になって貰いたいのです」

　その言葉にセシリアはピクリと反応するとすぐに

「それは無理です！」

　そう言い、拳をヴァイに突き出す。ヴァイはその突き出された拳をあたかも知っていたかのように簡単に避ける。だが、それによって出来た隙を突きセシリアはヴァイの元を離れ部屋に入ろうとする。だがそれも、ヴァイにはわかっていた。

「グラさん。セシリアさんがそっちに行きます。捕まえてください」

「あの私一応、魔界のお姫様ですよね。そして、ヴァイさんもグラさんも私のお父さんの部下」

「そうですね。まぁ、今は我が君が亡くなったので厳密には誰の下にもつかないフリーな悪魔ですが」

「それでも、普通こういう扱いをうけるのってやっぱり可笑しいですよね！」

「と、言われまてもを一人も持っていないセシリア嬢にいわれましても」

　痛いところをつかれたセシリアは顔を顰める。

　悪魔の地位は、自分の持っている僕の数によって比例する。現在ヴァイの持っている僕の数は百。セシリアの数は零。つまり、現状いくら魔王の娘であり魔界の姫であるセシリアにどんな不敬な態度を取ってもそれは仕方の無い事なのである。そう、つまり魔界は超実力主義。弱い奴、待ってない奴が悪いのである。

「さ、ご自分の今の立ち位置を認識したところでセシリア嬢。私達の願いを叶えてはくれませんか？　それに、この願いは貴女の為でもあるのです。それは、貴女自身がよく分かっているでしょう」

　それを聞き、セシリアの顔色が明らかに悪くなった。前述の通り悪魔の地位は、自分の持っている僕の数によって比例する。それは、裏を返せば僕の数が少ない者には地位はひくいということである。勿論、魔界にも僕が一人や二人しかいない者もいる。だがそういう者達は大抵強力な者の下につくことである程度の地位を得ている。

　だが今のセシリアの僕は零。今まで、後ろ盾でもあった魔王である父も死亡。文句なく魔界に住む悪魔の最底辺だろう。今は、まだ父であるビブリオサタンの影響が強いため問題無いが政権が移行すればどういう末路を辿るかは明白の理である

恐らく、それはセシリアも分かったていたのだろう。このままでは、魔界に自分の居場所が無くなることぐらい。しかし、それでも

「無理です。私が魔王になんて……」

　セシリアは動かない。そのまま、自分の体に腕を回し言う。

「……見えないんです。私が、魔王になる未来が。選挙に出て、自分には何も力が無い無価値な存在だって分かることが……凄く怖い」

　セシリアは聡い。故に、知っているのだろう。今の自分には自分自身で手に入れた物が何一つ無い事に。魔界の姫という地位も、自分の部屋も、着ている服も、日々の食事でさえ全て偉大なる父がいたからこそ手に入った物ばかり。つまり、父が亡くなった今のセシリアには何も無い空っぽな存在。だが、それを知っていると、改めて突きつけられるとではまた違う。

　ヴァイは恐れるセシリアをジッと見つめる。ヴァイもセシリアの気持ちが分からない訳ではないし、自分のやっていることがどれほど残酷なことかも分かっている。何たってヴァイのやっていることは自分の勝手なエゴと理想と期待を最愛の父親を亡くしたばかりの少女に押しつけているだけなのだから。だが、それでも

「セシリア嬢！」

　ヴァイは、セシリアの頬を掴むと自分の額に押し当てる。

「自分の価値を自分で決めつけないでください！　確かに、貴女はこれまで自分の力で何かを手に入れてこなかったかもしれません。空っぽな存在かもしれない。けれど、そんな空っぽな存在に魔王になって欲しいと思う者がここに少なくとも二人いるのですから」

　セシリアは、息をのむ。この数日。セシリアの耳に入ってきた言葉はセシリアにたいする同情の声だった。故に、初めてだったのだ。セシリアに欲しい言葉をかけられたのが。

「あの、じゃぁヴァイさんは私が出馬すれば本当に魔王になれると思いますか？」

「えー。成れますとも。というか、何が何でもさせますよ。その為に、参謀である私がいるんですから。と、そういえば、まだ私セシリア嬢。貴女から答えを聞いていませんでしたね。改めて、私たちの望み叶えてくれませんか？」

　ヴァイは、そう言い手を差し出す。セシリアは、立ち上がるその瞬間セシリアを縛っていた縄がほどける

「はい！」

　そう言い、ヴァイの手をセシリアは掴むのだった。

♢♢♢

　翌日。場所はセシリアの部屋。

「あの、それで今から何が始まるんですか？」

　セシリアは、何故か自分の部屋に置かれていた学校で使われる机に向かいながら疑問の声を上げる。そして、目の前には黒板が用意されておりヴァイが立っている。因みに、グラは別件で今日はいない。

「現状整理です。作戦を立てる為にまず必要になってくるのは情報です。という事でまずは魔王選挙について、セシリア嬢。知っていることを全て話してください」

「えっ！　えっと……新たな魔王を決めるための儀式……ですよね」

「えー、それで間違いはありません。では、魔王選挙が具体的にどのような事をするかは分かりますか？」

「えっと……」

　そこで、セシリアは言葉を詰まらせる。どうやら、セシリアの魔王選挙に対する知識はここまでらしい。

「もう結構です。セシリア嬢の知識量は分かりました」

「すいません。無知で」

「恥じる事はありません。無知なら、これから知ればいいんです」

　そう言い、ヴァイは黒板に魔力を流す。すると、黒板に文字が浮かび上がる。

「では、まず魔王選挙の出馬する権利とシステムについて話しましょう。まず、魔王選挙はタルタロスの上級幹部以上が出馬権を持っています」

「あの、それじゃあ私は出れないんじゃ」

　セシリアは手を上げて疑問を投げる。確かにセシリアはタルタロスに称号は無い。つまり、魔王選挙には出れない。普通の少女悪魔なら。

「そこは、大丈夫でございます。セシリア嬢、貴女は魔王の娘。魔界の地位では十分にタルタロスの上級幹部以上でございます」

　そう言うと、黒板に魔界、そしてタルタロスの序列が分かるやすく書かれていた。確かに、そこではセシリアの地位の序列はかなり高い方に位置づけらていた。

「さぁ、疑問が無くなったところで続けますよ。〈魔王選挙〉は三つの段階で構成されています。私たちの目下の目標は一週間後から始まる第一フェイズの突破です。そうですね……条件は、僕の数が五十万人集まれば可能かと」

「ご、五十万人！　無理です！　そんなこと！」

　前も言ったが、セシリアの僕は零。ここから、五十万人を増やすなど魔法を使っても無理だ。そう、普通なら。

「無理ではありません。勿論、日常の中で五十万人を集めるのは無理ですが魔王選挙を使えば可能でございます。なんたって魔王選挙は僕を賭けます」

「僕を……ですか？」

「えぇ」

　そう言い、再度魔力を送ると黒板の文字が変わる。その黒板には魔王選挙のルールと、資質と書かれていた。

「魔王選挙は出馬している候補者二人がランダムに選ばれた競技のルールに乗っ取って対決をし勝った候補者が負けた候補者から僕を自分の物に出来ます。つまり、セシリア嬢が自分より多く僕を持った候補者に勝てばそこで一気に盛り返せるという訳です」

「け、けどそれって凄く難しくないですか。相手は、つまり超強いってことですよね！」

　悪魔は僕の数に比例して地位が上がる。それと同じく、悪魔の強さもまた僕の数に比例して強くなるのだ。つまり、僕が零のセシリアは他の候補者に比べて圧倒的に弱者なのである。。

　頭を抱えるセシリア。その口からは、やっぱり無理だったんだ、という声が零れている。ヴァイは、そんなセシリアの頭をぴしりと叩く。

「そうやって、すぐにマイナス面に思考のハンドルを切らないでください。そもそも、魔王選挙競技に直接対決というのは存在しません」

「そうなんですか？」

「えー。魔王選挙の第一フェイズで試されるのは、、でございます。つまり、競技もそれに即した物でございます。どうです、直接的バトルでは無いと分かれば少しは正気も沸いて着ませんか？」

「う……うーん。少しは」

　それを聞き、ニコリとヴァイは破顔する。そして、

「それは良かった。では、やる気が出たところで次のステップに参りましょう」

「次のステップ？」

「はい。というか、選挙に出るための最後の準備です。選挙公約をセシリア嬢には作って貰います」

「選挙公約……また、いきなりですね」

「いきなりですよ。今言いましたから。しかし、これも大切なこと。ただ、そこまで難しく考えなくても結構です。結局、どんな公約も魔王になれば正当化されます。気楽に、こういう魔界にしたいぐらいで考えてください」

　ヴァイの言葉にセシリアは頭を捻る。当たり前だ。翌日まで魔王になる気すら無かったのだから。だがヴァイはそこに対して何も言わない。なぜなら、これはセシリア自身が超えるべき最初の試練だと考えているからだ。といっても、最大限のバックアップはする。

「といっても流石にすぐには無理なのでいくつか例を見せましょう」

　そう言い、ヴぁイは黒板に魔力を入れると文字が変わる。

「例えば、〈七罪幹部〉の一人、強欲のドラム様は人間世界などの他世界に進出より経済を活性化することを公約に掲げています。他にも、色欲のジェルミン様は魔界の女性進出の活性を公約に掲げています」

　ヴァイは今回の選挙で最も強敵となるであろう七人の幹部の内の二人の公約を話す。ス分、セシリアはうなっていると

「あのヴァイさん。父は、ビブリオ･サタンはどんな公約をたてたのですか？」

と聞く。

「我が主ですか？」

　その、予想外の質問にヴァイは思わず聞き返す。

「そう。父も魔界の何かを変えたくて成ったたんですよね」

「……そうですね。我が主が公約に上げたのは戦争の無い魔界でしたからね。知っての通り、我が君の時代は魔界はいくつかに分裂して戦争の絶えない時代でしたからね。だから、我が君は、公約……基、信念を持って活動をしていました」

「戦争を無くす……争いを」

　ヴァイは、セシリアの悩みながらも何かを掴んだ姿に自分の出る幕はないと悟り

「明日また聞きにますので、それまでに出来てください」

　といい部屋を後にする。ヴァイはセシリアの部屋から離れて数分。パチン指をならすと天井の影からヌッと何かが現れる。それは、鴉のような姿をしているが瞳は無くその代わりに頭の中心に渦巻き状の紋様が浮かんでいた。魔界に住む魔鳥〈〉である。〈〉はバサバサと翼を動かしヴァイの肩に止まった。

「グラさんの守備はどうですか？」

　〈〉は知能が高く魔獣にしては珍しく人語を話す事が出来る。また、生まれ持った能力として持ち主の声をそのまま他者に聞かせる能力があり魔界では遠方の相手に言葉を届ける通信機としての役割に用いられている。

ヴァイはグラに頼んでいた事の進捗を聞こうとしたのだ。しかし、返ってきたのはグラの言葉では無く

『俺二指図スルンジャネー！』

というしわがれた声だった。それと共に、ヴァイの頭を突く。

「痛い痛い！　何するんですか！」

　ヴァイは拳を振るうがそれをひょろりと〈〉は避けるのだった。

『フン！　コノ俺ヲ顎デ使オウトシタ罰ダ。イイカ！　俺ハ魔王サタン直属ノ〈〉ガガラ様ダ！　オ前ミタイナ三流悪魔二イイヨウニ使ワレグッ！　コラ離セ！』

　ガガラと名乗った〈〉は油断をし高度を下げた為にヴァイに捕まってしまう。

「はいはい。あんまり、自分の事を選ばれた存在とか言わない方がいいですよ。嘘っぽくなりますから」

そう言うと、未だ腕の中でバタバタと暴れ回るガガラの顔の模様を押す。すると、ガガラの動きがピタリと止まる。そして、パカリと口を開ける。そして、その口から流れてきたのはグラの声だった。

『あーあー、聞こえる？　こっちは順調。言われてたとおりの仕掛けは施してある。ただ、もう一つの方はまだ。以上』

　そこで、ガガラはすぐに気を取り戻すとバタバタと体を動かしヴァイの腕から抜け出す。

『コラー！　何する！』

「何って、貴女の仕事を私がお手伝いしただけですが？」

「黙レ！　コノコノ！」

　とガガラは、ヴァイを突く。〈〉はその顔の紋様を押されると、録音した声を再生するのだが、ガガラ曰く体に不快感を憶える為嫌らしい。ガガラは、ヴァイの頭を突くとその場を離れる

『モウ、オ前ナンカニ力貸サナイカラナ！』

　そう言うと、ガガラは起用に窓を開け飛び立った。

「また、必要になったら呼びますよー」

と、ヴァイは飛び立つガガラに言うのだった。

「さて、私も明日の準備をしましょう」

　そう言いい、ヴァイは城下町にでるのだった.

♢♢♢

翌日。ヴァイは、昨日と同じくセシリアの部屋に向かうのだった。その心中には一抹の不安があった。理由は、セシリアが選挙公約をキチンと考えているかだ。もし、考えていなかったら、そんな考えが脳裏をよぎるが首を振りすぐにその考えを振り払う。

「いけませんね。こんなことでは。参謀はまず自分の主を信じなければ」

　ヴァイは扉の前で深呼吸をする。そして扉を開けるのだった。

「おはようございます。セシリア嬢。何か、良い選挙公約は思いつきましたかッ！　セシリア嬢！」

　ヴァイは部屋を開けた瞬間目を見開き絶句した。なぜなら、部屋の床にセシリアが倒れていたからだ。ヴァイはすぐに駆け寄る。

「セシリア嬢！　セシリア嬢！」

　ッヴァイが数度セシリアを揺する。すると、セシリアは徐に目を開ける。

「あっ、ヴァイさん……おはようございます」

　その言葉に、ヴァイはほぉーっと安堵の息を吐く。

「良かった。何があったんです？　もしや、誰かに！」

「ち、違います！　その……あの後ずっと考えていたら寝るのを忘れていて……それで、出来たら力が抜けて‥……」

　それを聞き、ヴァイははぁーと息を吹く。

「何だただの徹夜ですか。それで、出来たんですね」

「あっ、はい」

　そう言い、セシリアはヴァイの腕から立ち上がると机の上に置いていた一枚の紙を差し出す。そして、それと同時にグラリとその場に倒れる。

「おっと」

ヴァイは、セシリアを間一髪で受け止める。セシリアは寝息を立てる。ヴァイは、やれやれと言ったようにセシリアをソファーに寝かしつけると毛布をかける。そして差し出された、紙に目を通す。目を見開く。

「これは……ふふ。やはり、親子ですね。まさか、ここまで突飛な事を選挙公約に上げるとは。しかし、これなら」

　ヴァイは多少悪いと思いながら、いましがた眠りについたセシリアを起こす。

「セシリア嬢。起きてください。すいませんがもう一仕事して貰います」

「うっ……すいません。後……五分」

「もまてません」

そう言い、ヴァイはセシリアの頭を触る。すると、数分後

「はぐっ！」

　と声を上げセシリアはセシリアはソファーから飛び降りた。

「目が覚めましたか？」

「な、何ですか！　今の、頭にフラッシュが！」

「少々私の魔力を使いました。私の魔力は、他人の頭脳に干渉する物なので。さっ、いきますよ」

　そう言うと、ヴァイはセシリアの手を引き部屋を後にする。

「あの行くってどこに！」

「貴女の、選挙公約を大々的に発表出来る所です」

　そう言い、ヴァイに連れられる形でセシリアはある場所に連れて行かれた。そこは、大きな舞台と大量の観客席が備えられているタルタロ屈指の劇場た。そして、その劇場の舞台では七十二人の悪魔達が一人一人自らの選挙公約を上げている。そう今ここでは魔王選挙が始まる前に自らが〈魔王選挙〉に出馬するという意思表明をする〈戦前集会〉を行なっているのだ。

　そして現在セシリアとヴァは先にいたグラと合流し舞台裏にいる。

「あの、ヴァイさん。それで、今から何を」

「だから、言ったでしょう。今から貴女にはここで自分が〈魔王選挙〉に出ると宣言して貰います。七十三、いえ違いますね。零番目の魔王候補者として」

「えっ……えーーーー！！　き、聞いてませんよ！」

「言ってませんからね。それに、言ったら貴女ついてきました？」

「そ、それはー……」

　答えはノーである。魔王になることは決めてたがいきなり、こんなことになると知っていれば恐らくあそこまで頑張って公約は考えなかったろう。

「安心してください。演出、根回し全てすんでいます」

その言葉にグラもこくりと頷き

「バッチリ」

と答えた。

「私に、拒否権は無いんですね」

「はい、ありませんよ。少なくとも私よりも僕が少ない今の状態では」

　その悪魔としてのド正論にセシリアは押し黙る。そんな、セシリアの背中にヴァイはポンと手を置く

「ですので。私の策を突っぱねるぐらい僕を集めてきてください。この場を使って」

「ヴァイさんはずるいです……でも納得しました。分かりました！　やります」

「その意気です。では、そこの術式に立ってください。後は、こちらでやりますから」

　セシリアは言われたとおり、術式の上に立つ。すると、次の瞬間セシリアの姿はヴァイ達の前から消えた。

「お嬢様、大丈夫？」

「それは分かりません。ただ私たちの出来る事はしました。後はセシリア嬢しだいです」

「ヴァイ、以外にシビア」

「君主にあえて厳しい道を選ばせるのも、参謀の役目なのです」

　そう言い、二人は舞台を見守った。

♢♢♢

　セシリアの視界がクリアになる。そこで見たのは

「えっ？　えーー！」

　舞台を、上から見下ろした景色だった。

セシリアがこの状態に陥った理由は二つ。一つは乗った人物を同じ術式のところに転移する能力。これにより、セシリアは舞台裏から舞台の中央に一瞬で移動したのだ。もう一つは舞台に設置された術式でその上に乗った人物を真っ直ぐ上に跳ね上げる能力。

　この、二つの術式の能力でセシリアは突如として上空から舞い降りたように演出する事が出来る。しかも、セシリアが転移した瞬間を見せないように真っ白な煙りをだす術式も同時に発動したため、よりセシリアの登場は派手になっただろう。

　勿論、これもヴァイの作戦で昨日グラが忍び込みセットしたものだった。理由は、少しでも他の物にセシリアという存在を印象づけるためである。

　が、そんなこと全く聞いていないセシリアは無我夢中で足をバタバタしなんとか着地する。

『おーっと！　なんだこれは！　いきなり煙が吹き出したと思えば突如として人影がこれは……なんといきなりセシリア嬢が現れた』

　司会の悪魔が言う。勿論この司会の悪魔は知っている。というか、この舞台のスタッフの悪魔は全てヴァイの手により買収されておりこうなることも全て知っている。そして、こうなった後の展開も全て作られている。

　セシリアは、当たりを見渡す。数百、数千、数万の視線がセシリアを見つめる。その無言の威圧にゴクリとセシリアは唾を飲み込む。と、そこで司会の悪魔がセシリアに話をかける。

『さて、ここに来たと言うことはセシリア様貴女も今回の魔王選挙に参加するんですよね！』

と、マイクをむけつつ司会の悪魔は周りに気づかれないように耳打ちをする。

「ヴァイ様に全て現状は聞いています。僕に話を合わせてください」

その言葉にこくりとセシリアは頷くと、先ほどの司会の質問に答える。

『は、はい。私は今回の魔王選挙に出馬します』

　その言葉に会場にいる他の出馬者やそれ以外の悪魔達がざわめく。中には親の七光りなのではと言う物もいたが、そこを司会の悪魔があたかも最初からセシリアが出場することは決まっていたかのように言い上手く丸め込む。

　その間にセシリアは今更自分が多くの者達の目の前にるという事を自覚し緊張に襲われる。しかも、たちの悪いことにセシリアの場合目の前だけでは無く後ろにも敵がいる。はっきり言ってかなりアウェーな状況だ。セシリアは体が熱くなり何度も息を吸う。

　そんな、セシリアに場を一応納めた司会の悪魔がセシリアに話を振る。

『さて、ではセシリア様に魔王選挙に出馬する事を示す、自らの選挙公約を発表して貰いましょう！』

「えっ⁈」

緊張で周りが見えていなかったセシリアはテンパる。頭が真っ白になる。頭では、分かっている。しかし、体が中々動かない。言葉が喉に突っかかり出てこない。そのうち、苦しきなりセシリアは瞳に涙を浮かべる。

『わ、私……の、こ、公約は、』

　と、その時突然セシリアの頭に突然フラッシュがたかれたような感覚に襲われる。それは、数分前、セシリアがまだ眠気眼だった時ヴァイが眠気を覚ませるために魔力を送った時と同じ感覚。しかし、その時と違うことが一つ。それは、フラッシュと共に言うべき言葉が

頭に駆け巡ること。

『私の、公約は……』

セシリアは、拳を握り同時に喉に力を入れる、そして──

『私の公約は、魔王のいない魔界を作ることです！　魔王のいない魔界それは、誰に言われる訳でもなく、自らが自らの魔王となり己の道を切り開く事の出来る魔界。私が、作る魔界はそんな魔界です！』

　セシリアは、自らの言うべきこと。思いの丈を吐き出した。しかし、セシリアの言葉に対して他の者達は全く反応が無かった。だが、それも仕方がない。なぜなら、誰もセシリアのいう魔界を想像できないからだ。

そもそも選挙公約とは票を集めるために候補者がそうで無い物に自分に票を入れれば有益な事が起こるとアピールするための物である。勿論、ヴァイのように強要のある人物ならセシリアのこの公約がどれだけ魔界にそして悪魔に有益か分かるだろうが、悲しいかなここにいる者達の多くはそこ教養は高くない。

　セシリアは周りの冷たい瞳に蹴落とされ今にも倒れそうになる。しかし、そこをなんとかこらえる。こらえられている理由はヴァイの自分で自分の価値を決めるなとい言葉があったからだ。

　会場は、嫌な静寂に包まれる。司会の悪魔もどうしようかと手をこまねいている。すると

「面白い！　そこまでそういうなら見せて貰おうじゃ無いか！　その魔王のいない魔界といのがどれほどの価値があるか！　この魔王選挙を通して！」

　会場にそんな、声が響く。その声は一羽の〈魔啼鴉〉から出された貴台の参謀の声だと築いた物は誰もいない。しかし、この言葉に乗る物はいた。

「誰か分からないけど。確かにそぉーねぇー。見せて貰おうじゃ無い」

　立候補者の中から、一人の男とも女とも取れる悪魔が現れる。タルタロス、最高幹部〈七罪幹部〉の一人ジェルミンである。

「セシリアちゃん。貴女にいいことを教えてあげる。貴女がどんな理想を掲げようと勝手よ。ただし、その理想を叶えるためにはここにいる七十二人の悪魔を一人残らず屈服させるだけの力が必要なの。貴女にその力と覚悟がおあり？」

その瞬間、ジェルミンを含める全ての立候補者達がギラギラと瞳を輝かせセシリアを見つめる。その、威圧感たるやそんじょそこらの悪魔では昏倒してしまうだろう。勿論セシリアも怖い。出来る事なら逃げ出したいとすら思う。だが、その恐怖心をセシリアは押さえ込み言う。

「はい！」

「ふふ、ならかかってくる事ね。お嬢さん」

　そう言い、ジェルミンはにやりと笑った。

　　　　　　　　　　♢♢♢

「あー！！　どうして！　あんな事言ってしまったんでしょう！」

　あの後、〈前線集会〉はつつがなく終わった。そして、セシリアは、〈前線集会が〉終わるや否や自分の部屋に戻りベットに顔を蹲り足をバタバタしている。

「かっこよかったですよ。多くのタルタロスの幹部達の前で啖呵をを切るところなんて。つい映像に残してしまいました」

　そういい、術式の書いた紙を開く。すると、そのシーンが空中に再生される。それを見たセシリアは顔を赤くしその紙を取ろうとするがするりと避けられてしまう。

「や、やめてください！」

「けど、お嬢様本当にかっこよかった。魔王様みたいだった」

と、グラは無表情だが親指を立てて言う。

「グラさんまで～。違うんです。あのときは、公約を言う前に頭に文字が浮かんで、そしたら、なんか言えそうになって……雰囲気に流されてー……」

　とそこで、ヴァイは何か合点が言ったようにポンと手を叩く。

「あーなるほど。だから……」

「ヴァイさん。何か分かったんですか？」

「いえ、実を言うと頭に文字が浮かぶという現象、それを私が自分の魔力でやったんです。本来、捕虜を操って内側から敵を瓦解するために使う物なのですが。なるほど、これを使われた相手は脳何の快楽物質も出るんですね。新発見です」

「ちょ、それ！　どういうことですかー！」

　セシリアは、ヴァイに組み付く。ヴァイは説明した。ヴァイの生まれ持っての魔力〈〉は他者に自分の思考を植えつけや、思考を読んだりする能力である。それを、使いヴァイはセシリアに眠気覚ましの時にセシリアの脳内にセシリアの考えた選挙公約を文として植え付けたのだ。言葉が出なくなったときの保険として。だが、ヴァイも言葉と一緒に快楽物質も出るとは思っていなかったらしい。

「ま、まぁしかし、セシリア嬢。私の魔力のせいだったとしてもあの言葉は嘘ではないのでしょう？」

「も、勿論です！　必ず勝ちます！」

　それを聞き、ヴァイはくすりと笑う。

セシリア僕の数･零　協力者･二人

　第二章

セシリアが、飛び入りで決意表明をした日から月日が流れ今日ついに、魔王選挙の第一試合が始まる。場所は、ヒードニズムの闘技場。吹き抜けの巨大な円形をした建物は本来は戦闘を望む者同士が戦い、その戦いを見た者たちが娯楽を感じる場所には今はところせましと、悪魔達が集まっている。

　そんな中多くの悪魔たちをかき分けフィールドに近づこうとする二人組がいた。セシリアとヴァイである。

「ふー、何とか間に合いましたね。お怪我はありませんか？　セシリア嬢」

「はい、なんとか」

　本来ならセシリアもヴァイも魔王選挙が始まる前に行なう予定だった途中しょうも無いチンピラに絡まれそれをいなしているウチに遅れてしまったのである。

「本来ならこんな事は起きないのでが……これも魔王選挙の弊害かも知れませんね」

　魔界の治安維持委を行なう魔界警察もそのトップである〈七罪幹部〉〈憤怒〉の悪魔。その他にも重要なスポットにいる悪魔がこぞって魔王選挙に出馬し本来の仕事がストップすれば必然治安も悪くなるというものだろう。

　と、そんな息も絶え絶えな二人に一人の悪魔が近づいてくる。グラだ。

「二人とも遅かった。どうした？」

「いえ、アクシデントに見舞われまして。それより選挙のほうはどうなっていますか？」

　その言葉にグラが顎をしゃくる。それに伴い二人とも視線を移動させる。

　そこでは二人の悪魔が自分の僕の数をかけて戦闘を行なっていた。

一人は僕の数、一万二千百人と全体では二十三位のアイミーンという悪魔だった。

「アイミーン様ですか、これは最初から大物が来ましたね」

「あの、どういうお方なんですか？」

　セシリアは、ヴァイの言葉に反応し聞き返す。

「魔王選挙が始まる前のタルタロスでは七罪幹部の一人、怠惰の悪魔であるフェール様の下でその知識の多さを使い悪魔の教育に多く携わったかたです」

　七罪幹部、怠惰の称号をもつ悪魔フェールとその僕達の魔界での役割は娯楽とメディアの統制である。今、多くの悪魔達がいろいろな魔界やタルタロスの事を知ることのできるのは、怠惰の七罪幹部とその元に集った者達が情報のインフラを整えたからだ。確かに、そんな偉業にアイミーンが一役買ったと思えばあれだけの僕を持ってることにも納得できる。

　しかし、そんなアイミーンはどうやら運はなかったらしい。なぜなら、その相手は僕の数十万二千三百。全体の順位三位。〈七罪幹部〉のジュルミンだったのだから。

　そして、その戦闘も殆ど一方的なものだった。アイミーンは自分の固有の魔力である業火を出現させそれをジェルミンに放つがその業火はジェルミンに交わさせるがその吐息でかき消さる。そして、ポンとアイミーンの肩にジェルミンが触れた瞬間、アイミーンの体から血が吹き出しその場に倒れた。試合終了である。

ヴァイは下あごに手をやり、難しい顔を作り、ポツリという。

「まさか、ここまでとは」

　勿論ヴァイもジェルミンの実力を軽んじていたつもりは無い。だが、それでもここまで圧倒的な差があるとは思っていなかったのだ。

　と、そんなヴァイ達に今し方、選挙を終わらせたジェルミンが近づいている。

「あらー。誰かと思えばいきなり〈戦前集会〉に現れて魔王のいない魔界を作りたいとか大口をたたいたセシリアちゃんじゃない。お久しぶり」

　その声を聴いた瞬間、ビクリとセシリアは肩を動かす。

「お、お久しぶりです。ジェルミン様」

「やーねー。そんな緊張しなくも良いのよー」

　その口ぶりは友好的だがその瞳は全く笑っていない。

　「まぁ、お互い頑張りましょう。魔界の未来の為に」

そう言い、セシリアの肩にポンと触れたジェルミンはその場を去る。ジェルミンの姿が見えなくなった後セシリアはバタリとその場にへたり込む。

「セシリア嬢、大丈夫ですか？」

「す、すいません。急に力が」

　そう言い、触れる得るセシリアにヴァイは手を伸ばし立ち上がらせる。

「そうですね。気持ちは分かりますただ、始まったばかりです」

　そう言い、ヴァイは小さくガッツポーズを作りいう。その言葉一つ一つがセシリアの気持ちを軽くさせる。

「そうですね。頑張ります」

　そう言い、セシリア達は観客席に移動する。まだ自分達の選挙内容が発表されるまで時間があるからだ。その間にセシリアとヴァイは事前に渡された選挙相手が書かれた票を見る。因みにグラは少しでも他の選挙相手の実力などを調べる為にあの後すぐ分かれた為いない。

「さて、まずはセシリア嬢。貴女の最初の対戦相手について何か知っていることはありますか？」

「……すいません。分かりません」

「まぁ、そうだろうとは思っていました」

　そう言い、ヴァイはいつものように黒板に魔力を流す。

「とりあえず、これが次のセシリア嬢の対戦相手の一般的な情報です。名前をベリトラ様。現在、二十八位のお方です。所属は、強欲の七罪幹部フール様の元で魔界の経済を回していたお方です」

　七罪幹部、強欲の称号を持つ悪魔フール･ドラム。そして、その僕である悪魔達は魔界の経済を司る。いくつもの国に分かれていた魔界を一つにまとめたタルタロスが経済的に

ここまで発展をしたのは彼らの手腕の賜と言えるだろう。

「経済……ですか。という事は、魔王選挙の試練でを競う試練だと不利ですね」

「えー。あちらには、多くのコネクションがありますがこちらには、それがありませんから」

　商売で重要な物の一つは、いかにその商品を多くの物に知ってもらうか。そして、その商品が信頼に値するかである。無名の商人と誰もが知っている商会が同じ物を売ったとしてどちらが多く売り上げを出せるかなど日を見るより明らかである。

「しかし、だからといってまだ気を落とすことはありません。選挙内容もまだ決まっていませんしね」

「そうですね。あの、ヴァイさん。そうなると、私は今からどんな対策をすれば良いんですか？」

「決まっています。セシリア嬢が最も対策しなければいけないのはこれです」

数十分後セシリアの選挙内容の発表となった。

　今、セシリアは闘技場の真ん中にいる。そして目の前には初老人の悪魔がいる。

選挙円滑にすすめる選挙管理委員の悪魔がアナウンスをする。

『皆様―！　お待たせしました！　これより第一回魔王選挙三回戦をはじめまーす！　まずは、現在二十八位！　かかげる魔界は、活性化した魔界！　ベリトラ様―！　僕の数一万三百三十二人！』

　そう言う空中に光るタイルが現れベリトラの基本的な情報が映し出される。ハッピィ･レディーはそこで地上に足をつけると、腕を今度はセシリアに向ける。

『そして、そんなベリトラ様のお相手は、現在七十三位！　飛び入りで参加を発表した期待の新星！　セシリア･サタン様！　現在の僕の数は二百！　ここで大きく全身できるか！』

　そう言うと、空中に浮かぶ光るタイルの内容が書き換わりセシリアの事が書かれる。整理あの僕はグラとヴァイが僕を一時的貸しているものである。

ハッピィー･レディーは進行を続ける。

『そして、お二人がこの選挙で競ってもらうのはこちら！』

　そういい、光るタイルに今回の試練の内容は〈金策〉そしてその下には〈フェアカウフェン〉と書かれていた。

『おーっと！　これは中々セシリア様にはつらい選挙になりそうだ！　〈フェアカウフェン〉その内要は至ってシンプル！　こちらが用意した大金を元手に各々商売をしてもらいより多くの金額を出した者が勝者となる選挙です！　勝てば負けた側から三分の一の僕をゲットすることができます！　さてその金額はこちら！』

　そう言い、光るタイトルに金額が表示される。

『金額は六十六万六千百三十ヴィス！　期間は明日から数えて三日！　それまでにお二人とも頑張ってください！』

♢♢♢

「どどどどどどどうしましょーーーー！！」

　部屋に帰るなりセシリアは鎧を脱ぐとベッド顔を埋め嘆いている。

「何をそんなに、嘆いておられるのですか？」

「そんなの決まっているじゃ無いですか！　私の勝率が絶望的だからですよ！　相手はお金を稼ぐプロそんな人にどうやって勝てば良いんですか！」

　そう言い、セシリアは再度ベッドに顔を埋めるのだった。それを見たグラは言う。

「確かに、お嬢様が勝つのは現実的じゃない。どうするグラ？　貰ったお金とここにある物を担保にお金を借りる？」

　グラはそう言い、帰って来るなりセシリアの部屋に置いてあった本を熟読するヴァイに話を振る。

　セシリアは、それを聞くとパタンと本を閉じると顔を上げる。

「いえ、それは辞めた方が良いでしょう。いずれ魔界を統べる魔王が借金を背負っているというのは民に良い印象を与えません。それに、恐らくですがセシリア様を担保にしてもベリトラ様が稼ぐ金額以上の金額はどこの金融機関も貸してくれません」

　それを聞き、セシリアは更に顔を青くする。そんな、セシリアの反応を見てヴァイは、持っていた本をポンとセシリアの頭にのせる。

「しかし、だからといって諦める事は無いのですよ。正攻法で勝てないなら奇策を用いるまで。絶望的なピンチかもしれませんが、決して勝てない不可能な勝負ではありません。これからですよ、セシリア嬢」

　そう言うと、セシリアは一枚の紙をグラに渡し言う。

「グラさん。すみませんが配下の方々を使い少々お使いを頼まれてくれませんか？」

　グラは、差し出された紙を一通り読むと

「分かった」

と一言言うとセシリアの部屋の窓から飛び降りる。落下する間にグラはピィーと笛を鳴らす。すると、白いローブを着た百人ほどの集団がグラの後ろに現れる。グラの直属の僕たちである。グラが僕と自分達しか分からないジュスチャーで指示を出す。すると次の瞬間にはグラもその僕達も消えていた。

　そのあまりにも悪魔離れした動きに、セシリアが目を丸くしているとヴァイが声をかける。

「ぼーとしていないでいきますよ。セシリア嬢」

「えっ！　どこにですか！」

　セシリアの驚く声にヴァイはにやりと笑う。

「魔界探索にです」

「魔界探索……」

「はい、三日かけて魔界の郊外を移動します。さぁ、準備してください」

　ヴァイの言葉に促されるまま、セシリアは準備を進めさせられる。そして外に出て見ると全身が骨でできた馬。が引く漆黒の馬車が止まっていた。

「あの、ヴァイさん。それで本当の狙いは何なんですか？　まさか、本当に魔界探索をするわけじゃないですよね」

　馬車の揺られること数十分。タルタロスが魔界の首都サタンを抜けた当たりでセシリアはヴァイに問いかける。

「そうですね。まぁ、ここまで来れば大丈夫でしょう」

　ヴァイは、馬車の窓から首を伸ばし周りを確認すると、席に座り直し言う。

「セシリア嬢がお察しの通り、別に我々は本当に魔界探索をするわけではありません。我々が今から行なうのは商売です」

「商……ですか？」

「えー、セシリア嬢。貴女も知ってのとおり魔界は首都であるサタンを中心とした半径千キロのエリアを抜けると気候が街や都市によって変わるのはご存じですよね」

「はい」

　魔界は、広大な面積を有しているがその実、悪魔達が住める場所は限られている。その理由が先ほどヴァイが言ったようにその土地、土地で気候がらりとが違うからだ。隣の都市は年中常夏のように熱いのにその隣の都市は年中極寒なんてことはザラである。

　セシリアの父ビブリオ･サタンが魔界を統一する前、魔界が何分割にも別れ戦争を繰り返していた大きな理由の一つがこの土地ごとに違いすぎる気候だ。

「確か、厳しい気候の土地で生まれた多くの悪魔達が豊かな土地を手に入れようとして起こったんですよね」

「えー。それも理由の一端ではあります。しかし、この違いすぎる土地は悪魔達に争いも生みましたが恵みも生みました。それが、都市ごとに違う多種多様な名産品です。そして、私たちが今回の選挙で勝つにはそれを利用します」

　そう言い、ヴァイはにやりと笑う。

　ヴァイの作戦はこうだ。まず、もとでの資金を使いその都市の名産品や美術品を安くで買い占める。そして、それを気候が違う都市で高く売る。そして、またそこでも新たにその土地の名産品を買い、それをまた気候の違う土地の都市に高くで売るという事を繰り返す作戦でいる。

「けど、それって無理じゃ無いですか？　許可書を持っていない私たちでは勝手に物を売ったり他のお店に物を卸したりできませんよ？」

　魔界での売買は、今回の選挙相手でもあるタルタロス〈強欲〉の悪魔達が管理をしている。そして、法律として商品を売るにはその都市独自の許可書の取得が必須であるのだが、それを発行するに丸三日はかかってしまう。勿論、大きな商会がバックについていれば優先的に発行してくれるかもしれないがそんな物を当然だがセシリアもヴァイも持ち合わせていない。

　しかし、そんなセシリアの疑問にヴァイは一言

「何も問題はありません」

　と一言、ニンマリと口の端をつり上げて返すのだった。と、そこで馬車が止まった。

「セシリア嬢、どうやらついたようですね」

　そう言い、ヴァイは馬車から降りる。セシリアもすかさず馬車から降りる。そして、

「わー」

　と感嘆の声を上げた。なぜなら、目の前に広がる景色があまりにも美しかったから。まず目の前には、深い青い海が広がっている。しかし、セシリアの前だけはパッカリと海が分かれており、白い砂浜が道を作っている。そしてその先には大きな水の球体に囲まれた町並みが見え空中を水の塊に覆われた帆船がゆうゆうと飛んでいる。と、後ろから馬車の御者と話をつけたヴァイが現れる。

「セイレーヌは初めてですか」

「は、はい。その、私……自分の部屋からあまり出たこと無かったが無かったので」

「そういえばそうでしたね。でしたら、きっと驚きますよ。ここは。さぁ入りましょう」

　セイレーヌは年中熱帯的な気候と海に面しているため、多くの海の幸と海でとれる宝石が特産の都市である。

　海が割れてできた道を通り二人は街の中に入る。街は活気に満ちあふれ人でごった返していた。セシリアはヴァイから離れないように必死について行く。ほどなくして、二人はボートに乗った。理由は、セイレーンの道路は全てが水路のためだ。

　ヴァイは、セシリアの腕を掴みボートに乗るとこの都市の名前にもなっている、古くからこの土地に住む魚の下半身と濡れた翼を持つ悪魔セイレーンのボート引きに一言

「裏まで」

　といいお金を渡した。ボート引きのセイレーンは、最初こそ嫌そうに顔を顰めたがヴァイが通常よりも多く金額を払うとすぐに承諾した。

　そんな、やりとりにセシリアは何かを感じたのだろう

「何をしてるんですか？」

　と質問を投げる。しかし、ヴァイは嫌に爽やかな笑顔で

「いえ、なにも」

と答える。

　ボートに揺られほどなくして、セイレーヌの町並みが変化して言った。最初の町並みは日の光が当たり人も多かったのにたいして、今の町並みは日の光は当たらず人通りも少なくなっていた。そこを通る人も明らかに人相が悪かったり、顔を隠したりと怪しい格好をした者たちが多い。しかも、明らかに露天も増えている。空気も重くジメジメしている。

　さすがのセシリアもこれは明らかに変だとおもったのだろう。隣にいるヴァイに声をかける。

「あのヴァイさん。道をまちがえていませんか？　明らかに怪しい気配がするのですが」

「えぇ、そうでしょうね。だって、ここ闇市ですし」

　ヴァイは、いつもの事ながら対して悪びれもせずにそういった。そして、そんな反応にセシリアが許容出来るわけも無く

「な、ななんてところにつれてくるんですかー！」

と不安定なボードの上で勢いよく立ち上がった為バランスを崩す。

「危ないですよ」

ヴァイはそう言うとセシリアの腕を掴み掴み落ちないように支える。

「落ち着いてください。そんなに暴れては落ちてしまいますよ。それに、そこまで心配しなくても、セシリア嬢が心配しているような事はおきません」

　と、ヴァイはセシリアをなだめながら椅子に座らせる。しかし、セシリアの興奮は収まらず未だフーフーと荒い息を上げる。

「けど、闇市って危なくて違法ですよね」

「確かに、違法なのは間違いないですが危険というのとは少し誤解があります。闇市には闇市のルールーがあります。それさえ、犯さなければ危険はありません」

「ルールーですか？」

「えぇ。そもそも闇市が違法なところは、そこで開いている店が許可書を取得していないところと売っている物が全て正規のルートで入手していないところにあります。逆に言えばそこ以外は普通の市場とそう変わりません」

　そう言ったところで、ボートは真っ暗なトンネルの中に入りそして停泊した。

「どうやらついたようですね。さぁ、いきますよ」

　そう言い、セシリアの腕を掴み安全にボートから降りる。当たりは暗闇に包まれて露店に取り付けられているランプの明かりのみが目印となっている。

「あの、これからどこに？」

　セシリアはヴァイの裾を掴みながら言う。

「恐らく、そろそろ来ると思うのですが」

そう言い、ヴァイが当たりを見渡すと奥から人影が現れる。

「お持ちして降りました。ヴァイ様」

　その人物は白いローブに身を包んでいた。セシリアはその姿に見覚えがあり声をあげる。

「あなたは、グラさんの」

「はい、グラ様の僕の一人でございます。グラ様の指示の元、既に許可はとっております。案内します。こちらです」

　そう言い、グラの僕は露店が建ち並ぶ通りに進んでいき、その後ろをセシリアとグラがついていく。

「あの、許可というのは？」

「このような闇市には元締めといわれるアウトローな集団が存在しております。そして、入るにはその元締めからの許可が必要なのです。勿論、簡単に許可はおりません。ただし、グラさん経由だとすんなりはれるのですよ」

　ヴァイがサタンから出る前にグラに頼んでいた仕事の一つはこれである。グラのとしての使命は魔界の秩序を脅かす存在を闇から抹消することである。故に、グラに目をつけられたくない魔界のアウトロー集団は基本的にグラには頭が上がらず、グラの頼みなら余程、道理が取っていない頼みでなければほぼ二つ返事で承諾するのである。

　セシリアは、普段来ることの無い闇市という非日常の空間に落ち着かないのか終始当たりを見渡す。その仕草は、誰がどう見ても初心者であり闇市で店を開く多くの者達がセシリアを良い鴨として下卑た視線を送る。その、視線にいち早く気づいたヴァイはセシリアに耳打ちをする。

「セシリア嬢、あまりそう周りを見渡さないほうがよろしいかと。ある一定の身は保障されているとはいえ、ここは表の法律が通用する場所だはありません」

「は、はい！」

　そう言い、セシリアは真っ直ぐ睨むように前を向く。が、それはそれでぎこちなく見る者が見れば絶好の鴨である。そんな、セシリアの行動にヴァイは苦笑いを浮かべ、セシリアの代わりに周りを警戒する。

「ヴァイ様、ここら一体の露店が表の店では中々手に入らないセイレーヌの名産品が売っている場所でございます。ただし、粗悪品や偽物もございますので買うときは十分に気をつけた方がよろしいかと」

　と、グラの僕がくるりとヴァイ達の方を向くと説明する。

「なるほど、ありがとうございます。後はこちらで物は見繕います。貴女は周辺の警護をお願いします。セシリア嬢は私が見ておくので」

「御意」

　グラの僕はそう言うとすぐにヴァイ達の後ろに下がる。

「さて、セシリア嬢。初めての場所に緊張しているのは分かりますがそろそろ私の服を掴むのを辞めていただけませんか？」

「あっ！　はい！」

　そう言い、セシリアは勢いよく手を離す。

「さて、セシリア嬢。これからセシリア嬢にはここで次の都市で売る商品を見つけて貰います」

「……商品ですか」

「はい、しかし先ほどグラさんの僕が言ったように勿論ここには偽物もございます。なので、セシリア嬢には本物のみをみつけてもらいます」

　それを、聞きセシリアは闇市に行くと知った時と同様、いなそれよりも更に顔を青くさせる。

「あの、それってものすごく責任重大なんじゃ」

「えぇ、そうですね。ここで、粗悪品や偽物を買ってしまうと私の作戦は失敗となります」

「む、無理です！　そんな責任重大なこと！　ヴァイさんがやって下さいよー！」

　セシリアは、ブンブンと両腕を振りながら言う。しかし、ヴァイはその腕を掴むとセシリアの瞳を覗き込むようにして言う。

「それこそ無理ですね。私には美術品の基本的な知識は持っておりますが、美術品の本物、偽物を見抜く審美眼を持っていませんので。しかし、セシリア嬢。貴女様は違います。幼少期より、あらゆる美しい物を本物を見てきた貴女様ならきっと、目の前の大量の物から本物を見つけることなどたやすいはずです」

　その熱意におされ最終的にセシリアは力なく

「……分かりました」

と言うのだった。しかし、そう答えたからと言ってセシリアの違法なところで違法な物を買うという罪悪感は消えるわけも無く気分は沈んだまま近くの露店に足を運んだ。

「いらっしゃい」

　その露店の店主の婆さんはにやりと笑いながらセシリアを招く。

「嬢ちゃん、見ない顔だね？　ここら辺は、初めてかい？」

「あ、はい。あ、あの、セイレーヌの名産はありますか？」

セシリアの言葉に店主は怪しく笑い言う。

「あるよ。あるともさ。うちは表じゃ中々手に入らない、セレーヌの名産ガラス細工が売りさね。どれも、本物。さぁ、買った」

　店主の婆さんは、自分の店に置いてある商品を並べながら言う。確かに、店には透き通るほどに綺麗な色のついたガラスの器やグラスが並べられていた。

　セシリアは、それらのガラス細工を覗き込む。全てが本物と思えば本物に見え、偽物と思えば偽物に見えてしまう。

（駄目です。見れば見るほど全部偽物にも本物にも見えて、分からなく無っていきます）

　セシリアは、チラリと自分の後ろにいるヴァイを見る。ヴァイは、ただジッとセシリアの方を見ていた。その瞳にはセシリアの持っている審美眼を信じて疑わない強い意志が見て取れた。

　そして、そのヴァイ期待にセシリアは素直に答えたいと思いもう一度露店に並ぶガラス細工を睨むように凝視する。

（そうだ、諦めちゃ駄目だ。自分で自分に価値を決めちゃ駄目だ！　思い出せ！　確かセイレーヌガラス細工は……）

　セシリアは、その朧気な記憶を頼りにゆっくりと露店に置いてあったガラス細工を手に取る。そして、それら全てを露店の光に当てる。それから、数分後。

「あの、これとこれを下さい」

　セシリアは露店に置いてある物の中でも最もくすんだガラス細工を指をさして言う。そして、それを見た露店の店主の婆さんはたいそう驚き言う。

「お、お嬢ちゃん！　本当にこれでいいのかい？　これよりも、もっと美しい物はあるぞ？」

「それでも、私はこれが良いんです」

「し、かし」

　と、そこで今まで傍観していたヴァイが割って入る。

「良いじゃ無いですか店主。我が君が欲しいと言っているのです。それとも、これを売ったらなにかまずいことでもあるのですか？　こんな、一番価値の無さそうな物がなくなったら？」

　ヴァイが追求すれば追求するほど露店の店主は脂汗を流し、顔をしかめる。そして

「わ、分かったよ。もっていきな」

最終的にそれを売ったのだった。その後も、セシリアは露店を除くとその品々にあった鑑定方法を行なっていく。

「いやー、さすがでしたね。セシリア嬢。偽物がはびこる中よくこんなにも本物を見つける事ができるとは」

「えっ、けどこれが全て本物とはまだきまっては」

「いえいえ、全て本物ですよ。店主達の顔をみれば分かります」

と、ヴァイはニコリと微笑みながら言う。それとは、反対に闇市の店主達はやられたと言ったように皆肩を落としていた。だが、それも無理も無い。闇市で売られている物は約九割が偽物である。しかし、必ず一割は本物が売られている。その、大きな理由は買った者が後々偽物と分かり『騙された』と言い押しかけてきても、本物を見せながら『うちにはちゃんと本物が売られている。ただ今回はたまたま、偽物が混じっていただけだ』といういいわけが出来るからだ。そういえば、買った本人も非合法なでところで買ったという負い目があるため強く言えず売った方は責任を逃れるという寸法だ。

　ただし、今回はその一割の本物を的確に持って行かれたのだから店側としては大損だろう。

　まぁ、勿論そんなことヴァイはセシリアには教えない。教えればセシリアがどんな行動を取るか分からないからだ。もしかしたら、露店の店主達のことを思い買った品々を返す可能性もあれば、偽物を売るのは犯罪だと言いここの事を代々的に警邏隊に言う可能性すらある。前者ならセシリアが見ていないところで買い直せば良いだけのため問題では無いのだが後者だった場合、表社会と裏の社会の絶妙なバランスでなり立っている魔界の秩序が壊れかねない。

「さぁ、セシリア嬢。行きましょう。私たちには時間が無いので。それに……」

「それに、何ですか？」

「いえ、何でも」

　そう言い、セシリアとヴァイは闇市を動き出す。その間ヴァイは終始、当たりを見渡す。そして、ほどなくして闇市から出るとここに来たときに乗ったボートとは違うボートの停泊地にたまたま止まっていたボートに乗る。

「セイレーヌの出口まで」

ボート引くセイレーンは無言でこくりと頷く。闇市は使われなくなった巨大な水中トンネルの中に形成されているため気づかなかったが日は沈み空には幾億もの星々が輝いていた。

　セシリアは、思わずその美しさに目を奪われていると急にボートが止まる。

「あれ、もうついたんですか？」

セシリアは、周りを見渡すがついた様子はなく水路の真ん中である。ヴァイはセシリアにそっと近づく。

「セシリア嬢、ちょっと失礼」

ヴァイはそう言いセシリアの体をお姫様抱っこの容量で持ち上げる。次の瞬間、空高くから人が落ちてくる。その衝撃で、ボートは傾き水しぶきが上がる。ヴァイはボートが傾くと同時にその場を跳びボートから脱出する。が、上手く着地できずヴァイは地面に激突する。

「怪我はありませんか？　セシリア嬢？」

「は、はい。ヴァイさんが下になってくれましたので」

「それは、良かったです。それでは、降りてください」

「あっ！　すいませ！　重かったですよね！」

「いえ、そうではなく危ない！」

ヴァイは言葉からワンテンポ遅れてセシリに一本の矢が飛んでくる。その矢は一直線にセシリアに向かってくるが当たることは無かった。なぜなら、ヴァイの言葉を聞いたセシリアが瞬時にその場から離れたからだ。

「はぁ、はぁ、何ですか……これ」

　セシリアは、体中に冷や汗をかき言う。

「分かりません。ただ、一つ言えるのは私達は誰かに狙われているようです」

と、そこで夜の暗闇からぞろぞろと四人の男達が現れる。みな、覆面で顔を隠しその手には剣や弓矢などを持っている。ヴァイとセシリアはゆっくりと後ろに下がろうとするがそこで、いきなり隣の水路から水柱が立つ。そして、数秒遅れて後ろから重たい音が響く。チラリと見るとそこにも一人の覆面を身につけた大柄の男がいた。来た場所から、先ほどボートを傾ける要因を作ったのもこの男が空から現れたからだろう。前後には敵。隣は水路。モウ片方は壁。セシリアとヴァイは完全に退路を塞がれ絶対絶命という状態に陥った。ヴァイは、セシリアを守ろうと前に出る。当たりに緊張の糸が走りシンと空気が凍る。数秒後そんな静寂な空気を壊したのセシリアだった。セシリアは、混みア上げてくる恐怖を必死に押さえ込み言葉を紡ぐ。

「あ、あの。話し合いませんか？　何が狙いか分かりませんけど、こんなことしたって何にもなりませんよ。私が殺したって、僕は手に入りませんよ！　私零なんです！」

襲撃者である男達は答えない。しかし、尚もセシリアは続ける。

「も、もしかしてお金ですか？　それだったら、今は持ってません！　けど、もうすぐ手に入るんです！　もし、お金が必要なら私達を手伝ってくれませんか？　報酬ははらうので！」

襲撃者の男達に反応は無い。セシリアは徐々に目に涙を浮べながらも、尚も次の言葉を投げかけようとしたところでヴァイが手で制止を促す。

「そこまでです。セシリア嬢。どうやら、彼らには話すという選択肢はないようです」

「で、でも！　それじゃ、どうすれば」

「決まってます。会話が成り立たないならやることは一つです」

そう言うと、ヴァイは一枚の紙を取り出す。その紙にはセシリアの部屋に描かれていた物とと同じ転移の術式が書かれている。ヴァイがその術式に触れるとその手は術式の中に入り込みそして中から一本の剣を取りだした。

　その剣を見るや襲撃者達はより一層警戒を強める。その反応を見たヴァイはニヤリと笑い強く握るその瞬間、剣の刀身が発光し当たりを強く照らし出す。その光は敵、味方とわず夜の暗さに慣れた者達の目をことごとく使い物にならなくさせる。

　ヴァイは光が止んだ段階で目を開けると、すぐにセシリアの腕を引きその場を離脱する。

「ま、待ちやがれ」

ヴァイ達の後ろにいた大男の悪魔は、ヴァとセシリアの足音を頼りに道を塞ごうとするが目が見えないため避けるのは用意だった。

　そのまま夜の道を二人は走っていく。

「大丈夫ですか？　セシリア嬢」

「まだ、目が上手く見えません」

「それは、じきに良くなります。と、セシリア嬢、少し失礼します」

　ヴァイは未だ、目が見えないセシリアを担ぎあげると、その場から勢いよく跳び上がり壁をこえる。

「はぁはぁ、ここまで来ればとりあえず安心かと」

　ヴァイは広い通路に出ると、その場にセシリアをお下ろし自らも膝をつく。セシリアは、ようやく目に走る痛みが止みゆっくりと目を開ける。そこには、尋常じゃ無い汗をかき、荒く息をするヴァイがいた。

「ヴァ、ヴァイさん、大丈夫ですか？」

「しばらく、動けそうにないです。はぁ、はぁ、なにぶん体はひ弱なほうでして。」

ヴァイは本来セシリアを抱えて走ったり、壁を登ったりなどのアクロバティックな動きはできない。では、なぜ今までは不可能な事が出来ていたかというと、ヴァイは自分の身につけている服などに身体測定の魔術を付与し任意でその魔術を発動させているのだ。ただし、乱発しつずける今のように体に多大な負荷がかかり動けなくなる。

「セシリア嬢、商品は持っていますか？」

「は、はい」

そう言い、セシリアは自分の持っている袋をヴァイに見せる。

「それは、良かった。ならそれを持って早く逃げて下さい。ここを離れ乗ってきた馬車に乗ればさしもの彼ら達も追っ手はこないでしょう」

その言葉にセシリアはすぐに氾濫する。

「だ、駄目です！　それじゃあ、ヴァイさんが逃げられなくなってしまいます。それ以前にあの人達に捕まる可能性だ……まさか」

　そこで、セシリアは何かに気づき瞳を丸くする。その表情を見たヴァイはふっと笑う。

「どうやら、気づかれたようですね。そうです、セシリア嬢。私を置いていってください。私を見つければ彼らは、私からセシリア嬢の情報を吐かせようと私を尋問するでしょう。その分時間を稼げるでしょう。その間に」

「勝手なこと言わないで下さい！」

　セシリアはそう叫ぶと、未だ動けないヴァイをその細い体でからう。

「セシリア嬢！　何を」

「ヴァイさんが、何度も私にしてくれたことです」

　そう言い、一歩一歩とセシリアは人目を気にすること無く前に進む。しかし、そのスピードは亀のように遅い。

「セシリア嬢、やめて下さい！　下ろしてください！　このままでは、二人とも共倒れに」

「なりませ！　ヴァイさん言ったじゃ無いですか。何がなんでも私を魔王にさせると。まだ、私、魔王になっていませんよ」

　セシリアは、そう言いまた一歩前に進む。その言葉を聞き、ヴァイは、先ほどよりも柔らかく笑い言う。

「いえ、もう貴女は魔王ですよ。私の中では」

とその時大通りと面している路地から細い腕が現れセシリアの腕を掴む。

「えっ？！」

　セシリアがそんな驚きの声を上げた同時に路地裏に引きずり込まれた。と、数秒してセシリア達がいたところに先ほどの、襲撃者達が通る。

「くそ、どこ行った！」

「探せ！　まだ近くにいるはずだ！」

男達がその場を去った後、物陰から白いローブを着た悪魔が顔を出し当たりを警戒する。

「もう行ったようです。お二人とも、お怪我はありませんでしたでしょうか？」

「貴女は、グラさんの僕のかた」

　そう、セシリア達を路地に引き込んだのは闇市を案内した、グラの僕だったのだ。

「今まで、どこにいたのですか？　私は、当たりを警戒するように行ったはずですが」

　ヴァイは、セシリアの背中に負ぶさりながら言う。その、言及にグラの僕は再度頭を下げる。

「申し訳ございません。セシリア様達を狙う不逞の輩がいないかを探っていたところ殺気を感じすぐに対処に向かったのですが敵も中々に強く。一度退ける事は出来ましたが……お二人の危機に参上するのが遅れました」

　確かに、見るとグラの僕である事を表す白いローブの端々には戦闘についたであろう汚れや血痕が見て取れた。精鋭であるグラの僕とここまで渡り合うのだ敵も相当に強かったのだろう。

「まぁ、良いでしょう。このことは不問にします。しかし、どうしましょうか？」

「あの、これから逃げるんじゃないんですか？」

　セシリアの背中で唸るヴァイにセシリアは疑問の声を投げかける。

「私と、セシリア嬢だけならそうでしたが、今は状況が変わりました。煩わしくなる芽は早めに摘むのが一番です。ただ、時間もないので手っ取り早い策を……貴女、ここら辺の通りも詳しいですか？」

「はい。セイレーヌの通りは全て把握しています」

「さすが、グラさんの部下ですね。それなら……これでいきますかね。お二人ともお耳を」

そう言いヴァイは、セシリア達の耳に作戦を伝える。

　セシリア達を襲った男達は、もう何度目と分からない程に大通りをグルグルと回っていた。

「くそっ！　全然見つからねー！　どこ行った！」

「なぁ、もうこの街を出たんじゃ」

「バカやろう！　そんな早く、どっか行き分けないだろう！　探せ！」

「お、おい！　あれ！」

　襲撃者の一人が指をお指す。その先には、夜でも見える程に美しい金髪の少女がいた。ターゲットのセシリアである。その身を包む服は先ほどと違い白い服だったがそんな事を気にしない男達はすぐさま追いかける！

「でかいした！　追え！」

　セシリアも、男達のことには気づいたのだろう。すぐに走り出す。

「追いかけろ！」

　しかし、すぐにセシリアは路地裏に入る。男達もその路地に入るがそこは二手に分かれていた。

「ちっ！　どっちだ！」

と、そこであの最初にセシリアとヴァイの船を襲った大男がふと後ろを振り向く。すると、そこには先ほど見失ったセシリリアと同じ白い服装に金髪を持った存在が現れる。

「あっ！　いた！　待ち上がれ！」

男達は、すぐに追いかける。が、そのセシリアは先ほども早いスピードで地をかける。

「待ちやがれー！」

襲撃者の一人が弓を構える。

「あ、馬鹿！」

　矢は一直線に、セシリアに向かって飛ぶが追いかけられた存在は地面を軽く蹴り空中で回転しながらその矢をいとも簡単に避ける。そして、近くの人混みに紛れる。

「待ちやがれー！　……くそ！　見失ったか！」

　襲撃者達は苦い顔をする。とそこで、人混みに紛れて自分達の隣を通りすぎる一人の肩を掴む。

「おい。ちょっとアンタ。顔をみせてくれないか？」

　そこで、肩を掴まれたセシリアは人をかき分けるようにして走る。男達は先ほどからずっと走りっぱなしだったこともあり徐々にセシリアとの距離を離される。そして、その間にセシリアは大通りから外れるために近くの路地に入る。

　男達もすぐに路地に入る。が、その路地は袋小路になっており逃げられる場所など無かった。それなのに、そこには誰もいなかった。

「なっ！　なんで、どこにもいない」

　襲撃者達は、壁に仕掛けでもあるのではないかと壁を触るなどして確かめる。しかし、当たり前だがただの袋小路の通路にそんな物があるはずが無い。

　と、そこでコツコツと後ろから足音が聞こえる。男達が足音の聞こえる方を向くとそこには金髪と白いローブを来た存在がいた。

　男達は、一瞬ターゲットが自ら現れた思い襲うとするがすんでのところで辞める。なぜなら、今まで美しかった金髪が徐々に黒くなっていったからだ。

　白いローブの存在、否グラの僕は懐から二本のナイフを取り出しながら言う。

「さすが、我が君主と同じく前魔王ビブリオサタンの懐刀と言われた程のお方。敵を欺き、おとしめる手腕は流石と言えます」

「な、なんだお前！」

　男達は、すぐに戦闘の態勢に入る。

「大丈夫、すぐ終わるから」

　グラの僕がそう言うと、すぐに地をかけ男達に肉薄し、その命を刈り取った。

「どうやら、終わったようですね。いきますよセシリア嬢」

「は、はい」

　そう言い、セシリアとヴァイは男達が入った路地よりも一個奥の路地から出てくる。

「でも、本当にこんない上手くいくんですね」

セシリアはそう言いながらセイレーヌの出口に向かいながら歩く。

「人は、何かを追いかける時こそ意外にも追いかける物をちゃんと見ていないというものです」

「なるほど」

　セシリアは、頷きながら今回のヴァイの作戦を反芻する。今回のヴァイの作戦を端的に言うのであればそこにセシリアがいると錯覚させる作戦である。

　まず、セシリアとグラの僕の格好を出来るだけ近い物にする。今回で言えば、魔術でグラの僕の紙の色を金髪にし、セシリアの服の色を魔術で白くし、フードをつける。そして、まず本物のセシリアがわざと襲撃者の前にその姿を現し敵にセシリア＝金髪で白い服という印象をつける。そして、少し逃げた後に路地に隠れる。その直後すぐにセシリアと同じ特徴を持ったグラの僕が現れわざと追いかけられ姿を隠す。最後に、またセシリアが現れ追いかけられある程度距離があいたところで路地に逃げる。

　そうなれば、現れては消えまた現れるというもどかしい現象に冷静さを欠いた襲撃者は周りが見えなくなり対して、周りを確認すること無く近くの誰もいない路地に飛び込むという訳である。

「まぁ、勿論こんな古典的な作戦そうそう上手くいきませんがね」

「そう、なんですか？」

　セイレーヌの外に止めていた馬車に荷物を置き席に座りセシリアが言う。

「えぇ。今回は、運が良かっただけです。襲撃者の彼らはアマチュアであり、物が見えにくい夜であった。セイレーヌの地形に詳しい方がいた。そして、何よりセシリア嬢と同じ背格好の影武者がいました。このどれもがかけても上手くいきませんでした。おや」

　とそこで、ヴァイはいつの間にか眠っていたセシリアに気づく。

「フフフフ。おやおや、まだ作戦は始まったばかりだというのに。少しは、成長されたと思っていたのですが、まだまだのようですね」

　そう言い、ヴァイはセシリアに自分の上着をかける。

「ま、今はゆっくりとお休み下さい。ここからは、私がやっておきますので」

　と、そこで馬車が止まる。ヴァイは、セシリアが選んだ品々を持ち馬車を降りるのだった。

ヴァイが馬車を降りるとそこには、何の変哲の無い街が広がった。今は、夜と言うことも亡く多くの民家が明かりを落としていつ。ここは、ジーンウルー。ここは周りを深い森や山に囲まれ他よりも日照時間が短く夜が長い。しかしその分、月の光を媒介に光る宝石（月光石）や月の光のみ育つことができるる花(ルナ)などの珍しい動植物が自生している。

　ヴァイは街の大通りを進むとそこには大きなテントが立てられていた。そして、その入り口には多くの屈強な魔族や魔獣などが警戒している。ヴァイは、その光景を見てニヤリと笑い裏口から入る。そこは、薄暗い場所であり当たりをカーテンで囲まれている。ここはこのテントに備え付けられているステージの袖である。

「どうやら、作戦は順調のようですね。グラサさん」

ヴァイの言葉にグラはいつもの無表情な顔を向ける。

「ヴァイ、お疲れ様……お嬢様は？」

　グラは、キョロキョロと当たりを見渡しセシリアがいないことに気づき、抑揚の無い声で言う。

「セシリア嬢は、疲れて馬車で眠ってしまいした。起こすのも酷なのでそのままにしておきました」

「やっぱり、お嬢様に闇市は酷だった」

「それもあるかもしれませんが、少々敵にも襲われましたので」

　それを、聞きグラは一瞬だけ驚くようなそぶりを見せるが冷静になる。

「セイレーヌにも護衛をつけたはず。もしかして、使えなかった？」

セシリアは、徐に腰につけているナイフに触れながら言う。

「いえ、そんなことは無かったですよ。確かに、私もセシリア嬢も襲われましたが相手は三流。そんな、存在に私達が襲われ五体満足でいられたのも貴女の部下が早めにより強大な敵を先に屠ってくれたからです。なので、そのナイフは納めて次にあった時は褒めてください。間違っても、処分しないように」

「……分かった」

　そう言い、セシリアはナイフから手を離す。

「まぁ、このことは後でゆっくり話ましょう。それより、今回はどんな方々が集まっているのですか？」

　そう言い、ヴァイはそっと目の前のカーテンを開け顔を出す。そこには、身なりの良い多くの悪魔達が酒を仰ぎ楽しく談笑をしている。その数ざっと五十といった所だろう。悪魔の地位と強さはその僕の数に比例して向上するが平和な現代ではそれだけが指標では無い。ここに現れた者達はある程度僕を持っているがそれとは別の事で成功を収めた者達である。ヴァイの後ろでグラが説明する。

「大きなところだと、美術収集家のカリオ。魔界美術館のオーナーのミケラ。その他にもここら辺ではお金持ってそうな人達のはあらかた声をかけた。後、四人ぐらい私の部下を紛れ込ませておいた。けど、これで上手くいく？」

「素晴らしい。流石グラさんです。これだけ集まれば容易にノルマは達せされるでしょう。では、そろそろ始めるとしましょう。支払いの方は任せましたよ」

グラはコクリと頷く。ヴァイは堂々と舞台にその姿をさらす。会場の視線が急速にヴァイに集まる。その視線に含まれた意味は様々だ。いきなり現れた、前魔王の懐刀が現れたという事で驚く者。好奇な目線を送る者。ヴァイ達のことを知らないのか頭を捻る者。さまざまだ。しかし、そんな事ヴァイは気にしない。ただただ、自分達の役割をこなす。

「お集まりに皆さん。今日は私達のためにお集まり誠にありがとうございます。私は元魔王ビブリオ･サタン様の下で〈〉虚飾の称号を受け参謀をし、今はセシリア･サタンの下で参謀をしているヴァイでございます」

ヴァイは、優雅に頭をお下げ言う。

「今回、このオークションのホストはあくまでセシリア･サタンでございます。と前置きはここでにしてそろそろオークションを始めるとしましょう。まずはこれから」

そう言いヴァイは机に掘られた転移術式を発動しセシリアが闇市から買ってきた表の市場では中々手に入らないセイレーヌの美術品の一つを転移させる。

　それを、見たオークションに来た者達はその美しさに感嘆の声を上げる。ヴァイは、その反応を観察しながら取り出した美術品の説明をする。

「では、この美術品まずは十万ヴィスから始めましょう」

　そう言い、ヴァイはオークションを始める。

　ここらが今回セシリアを選挙に勝たせるための策のいわば第二フェイズである。セシリアに説明したヴァイの作戦、その土地の品々を買い占めそれを中々手に入ら所に高くで売るとい者には大きな弱点がある。それは、ヴァイやセシリアには買い占めた商品を売るための店が無いのだ。勿論、ないなら作れば良いというがそうもいかない。その理由は主に二つ。一つは、ヴァイもグラも店を出す許可書を持っていないという事。もう一つが、店を出したと言え知名度が無い事。

　一つ目の許可書に関しては、偽造などやりようはあるが二つ目に関してはどうしようも無い。知名度も何も無いポッとでの店、しかも売られている物はここら辺では中々手に入らない品々ばかり。そんな、怪しい店に買い物をしにくる客など来ないことは火を見るより明らかだ。そこで、ヴァイが取った方法がこのオークションという方法だ。まず、グラの僕を使いオークション会場を作って貰いその近くに住む金持ちにここらではめったに手に入らない品々が出るオークションが開かれると情報をリークをする。それにより、金を巻き上げる対象を一般時から金持ちにシフトにしたのだ。

「百万二千ヴィスで落札！」

　そう言い、ヴァイはを成らす。なんと、当初の金額の十倍の値段で売れた。無名な悪魔がホストのオークションが開いた最初の競売としては成功と言って良いだろう。勿論、ここまで上手く言ったことにもからくりはある。

　この客席の中の数人はセシリアの僕であり、オークションを盛り上げるサクラである。オークションに来る者達は自分より少しでも多くの金額を出されるとその上の金額を出したい存在である。ヴァイはその心理を上手く突くために用意したのだ。

因みに、実際に金額を受け取る相手をグラに頼んだのは金額の受け渡し時に金額をチョロ任されない為である。

　その後も、ヴァイは次々と商品をオークションにかけていく。そしてそのほとんだが最初につけた金額の十倍、闇市で購入した金額を差し引いても十分に元は取れた。

　そして、最後の商品が落札された。

「一千万ヴィズ！　他に、ございませんか？」

　ヴァイは、当たりを見渡す。そして

「一千万ヴィズで落札です！」

小槌を振る。

　その後、数分間今回来た者達にお礼などの挨拶をし返らしたところで、ヴァイはそこにストンと腰を下ろす。

「ふぅー……なんとか売れましたね。そちらはどうでしたか？　グラさん」

「うん、大丈夫。ちゃんと払ってもらった」

　グラが両手に支払って貰った金額を手に持ちながら現れる。

「それは、良かったです。では、今後の事なのですが」

　そう言い、ヴァイは近くにあった地図を開き言う。

「私達は、朝にここで商品を買うのでそちらは、ここにで準備をお願いします。オークションの事で声をかけて欲しいのはこちらの方々です」

　そう言い、ヴァイはリストを見せる。

「分かった。けど、こんなに少なくて大丈夫？」

「そこは、心配いりません。今回来て貰った方々にお願いしてここの事を宣伝するように頼んで起きましたので。そこまで、声をかけなくてもかってに人は来るでしょう」

「なるほど。分かった、けど良くあれだけの値段がついたね」

「えぇ、どうやらセシリア嬢が選んだ物は全て本物だったらしいですね」

　実をいうと、ヴァイはセシリアが選んだ商品が全て本物とどうかは半信半疑ではあった。そして、もし偽物だった場合はヴァイは己の魔力を使い客全員に幻術を見せ本もだと思わせて買わせるプランも考えていた。

しかし、目の肥えた富豪の食いつきから全て本物だったというのは嬉しい誤算であった。

「では、グラさん。お願いしますね」

「うん、分かった」

　そう言い、グラはテントを出ようとした時にふと止まり振り返る。

「お嬢様が襲われたっていう敵についてはどうする？　調べる」

「いえ、辞めておきましょう。セシリア嬢を狙う人物はこの状況では容疑者が多すぎます。ただでさえ人数が少ないのです。ここは選挙活動を優先しましょう」

　ここで、いう容疑者というのは魔王選挙に参加している悪魔達の事を指す。魔王選挙に出場する者達の中には相手の選挙活動の妨害などを行なう者がいる。そして、それは魔王選挙のルールーでは禁止させていない。

「……分かった」

　グラはその場を離れる。恐らくこのテントも明日には撤去されるだろう。残りの日数は後二日。そこまでにどれだけの金額をたたき出せるか。

「ここが、踏ん張りどころですね」

　魔界の夜に光がともる。

♢♢♢

「では、セシリア嬢の初勝利に」

「「かんぱーい！！」」

　ここは魔界の首都サタンに存在する酒場、というここら辺ではは珍しい東洋風のお店。そこで今セシリア達は店を貸し切りにし祝勝会をしている。皆が酒を呑み大量の料理を食すなか今回の主役であるセシリアはちょこんと椅子に座りちびちびとジュースを飲んでいる。と、そこにヴァイが現れ椅子に腰掛けた。

「楽しんでますか？　セシリア嬢」

「あ、はい……ただ、そのまだ、実感がわかなくて。本当に私勝たのでしょうか？」

「えぇ、勝ちましたよ。その証拠に、セシリア嬢。貴女の持つ僕の数が増えているでしょう」

　そう言い、ヴァイはセシリアの手の甲を指す。セシリアガ自分の甲を見つめる魔術の術式が現れ数字が現れる。その数、三千六百四十四と表示される。それが、今のセシリアの僕の数である。

「それでも、信じられません」

　セシリアは苦い顔をしながら言う。と、そこで酒場の扉が開く。

「いらっしゃい、すまないねー、お客さん。今日は貸し切りなんだよー」

酒場の女将さんの言葉に店を訪れた悪魔は静かに

「そうか」

と言い、去ろうとしたところでヴァイが声をかける。

「お待ちください。よろしければ一杯飲まれたらどうですか？　ベリトラ様」

そう、酒場に来たのは今回のセシリアの選挙相手ベリトラだった。

「それで、どのような事で今日は参ったのですか？」

ヴァイに促されるようにして、ベリトラはセシリアとヴァイを机で挟んで目の前に座る。

因みに、酒場の雰囲気は一瞬にして祝勝会ムードから戦場にはやがわりしている。少しでも、セシリアに危害を加えるようなそぶりを見せればすぐにその命を狩るという殺気をグラとその僕達はベリトラに送る。

「別に対した事では無い。ただただ、どのようにして三日間という短い時間であれだけの金額を稼ぐ事が出来たのか。それを、教えて欲しいのだ。頼む、この通りだ」

　そう言い、ベリトラは頭を下げる。その行動にセシリアは慌てふためきヴァイの方を向く。

「仕方無いですね。まぁ、別に構いませんよ。恐らく、誰も出来ない事でしょうから」

　そう言い、ヴァイは今回の作戦の概要をベリトラに話す。ベリトラは、ヴァイの作戦を聞き終始驚く。そして、全てを聞き終えると

「確かに、ヴァイ様の言う通りその作戦は我にはマネできないな。まさに、ヴァイ様の頭脳とグラ様の機動力、セシリア様の審美眼これが揃って初めて成立する。もし、その方法で金儲けが出来る人物がケイラの他にいるとしたら、我がボスだけでしょう」

ベリトラのいう我がボスというのは〈七罪幹部〉強欲の称号を持つフールの事だろう。確かに貴台の金の亡者にして、金儲けの天才と言われる彼ならあるいは、出来るかもしれない。

ベリトラは、自分の前に出された酒をグイッと飲み干すと席を立つ。

「祝勝会の邪魔をして悪かった。我はここで」

「これから、どうするのです？　また、次の魔王選挙に出られるのですか？」

「いや。我はもう一度我がボスの僕になり魔王選挙から降りるつもりだ。そもそも、魔王なんていう者は我のガラではないのだ」

そう言い、ベリトラは席を立ち笑福を出ようとしたところでセシリアはガタッと席を立ち言う。

「あの！　ベリトラ様！　貴方はどんな事を思って、どんな魔界を作りたかったんですか？」

ベリトラは、叫ぶセシリアの顔を見る。そして、その真剣な眼差しに決してその質問が戯れの類いでは無い事を読み取る。そｐして、セシリアの方を向き直る。

「セシリア様、今の貴方はこの魔界をどう考えますか？　我は思うのだ。セシリア様。あなた様の父君ビブリオ･サタンが作った今の安寧の世は確かに良い時代だった。だが、安寧は時に停滞です。今の、魔界は上の者は上がり続け下の者はその地位でとどまるしか無くなる。私は、その現状を変えたかったのですよ」

　そう言い、べりトラは笑福を後にしようとすると

「私が、私が！　作ります！　貴方が作りたかった魔界を作れる魔界を！」

　その、誰もが予想だにしなかった発言に場は凍る。ベリトラは吹き出す。

「ふっ、フハハハハハーーー！！　確かに、貴方が作る魔界ならそれができるかもしれんな。魔王のいない魔界。誰もが自分の思う魔界を作れる魔界。そんな、世界が作れれば少しは我の敗北にも意味があるかもしれないな」

　そう言い、ベリトラは、その場を後にする。

「まさか、セシリア嬢があんなことをいうとは少々意外でした」

「あっ！　すいません！　その、勝手にあんなことを言ってしまって……その、何だかとても悲しそうだったので、つい」

　セシリアは、シュンと顔を下げる。ヴァイはそんなセシリアを慰めるように言う。

「構いませんよ。勝った者が負けた者のその意思を継ぐのは権利であり義務です。セシリア嬢、忘れないでください。この選挙にでる者全てが何か夢を持ち、同時にその夢を打ち砕きそして、引き継いだ者たちばかりであることを」

「はい！」

　そう言い、セシリアは机に置いてあったグラスを一気に飲み干す

「セシリア嬢！　それは！」

　そして、顔を真っ赤にしその場に倒れた。

「それは、私のお酒なのですが……先が思いやられますねー」

ヴァイは、そう言いセシリアを担ぎあげるのだった。

セシリア僕の数・三千六百四十四　強力者・二人

三章

「うー頭が痛いですー」

「仕方ありません。昨日、一気にお酒を飲んだのです。そうなるのも無理はありません」

「お嬢さま、薬、飲む？」

　祝勝会を上げてから翌日。祝勝会を上げたからといってもたかだか一勝。魔王選挙はまだ始まったばかりである。

　セシリア、ヴァイ、グラの三人は新たな選挙に参加するためにヒードニズム闘技場に来ている。

「セシリア嬢、せめて選挙内容が発表されるときはもう少しシャキッとしてください」

「わ、分かりました」

　と、そこで選挙管理委員の悪魔が会場に声をかける。

『皆さん！　お待たせしました！　これから、魔王選挙の二回戦五戦目を行います！　と、その前に今の魔王選挙に出馬している方々の順位はこちらになります！』

その瞬間、ヒードニズム闘技場に光るパネルが浮かぶ。そこには四十六組の悪魔の名前と僕の数が表示される。当初から数が減ったのはベオリオンのように僕の数が減り、辞退し自分の元上司の傘下になったからだろう。その証拠に上位七名に名を連ねる〈七罪幹部〉と八位には明確な誤差が見て取れた。

「ふむ。矢張り最初の選挙戦では〈七罪幹部〉は脱落しませんでしたか」

「けど、お嬢様のランクも上がった」

グラのいう通り確かに当初ドベだったセシリアの順には今では四十六人中四十人と確かに順位が上がっていた。

『さぁ！　この順位がこれからどう変化していくのか見ものです！　という事で、まずは二回戦最初の立候補者はまずこの二人ー！　現在順位は四十六人中三十三位！　武闘派悪魔のこの方―！　ハーゲンティー様！　現在僕の数は二万九千三十六！』

　その言葉と共に悪魔ハーゲンティーは観客席から現れる。その顔は闘牛、その体素人が見てもわかるほどに鍛え抜かれていた。ハーゲンティー〈七罪幹部〉憤怒の称号をもつ悪魔、サタニースの部下である。

『そして、そんなハーゲンティ―に買うのは二百という一番少ない僕から駆け上がった逸材！　セシリア･サタン選手！』

「どうやら、出番のようですね。いきますよ。セシリア嬢」

「えっ！」

　ヴァイは、隣で未だに寄って動けないセシリアを抱えると福に仕込んだ身体能力の強化の魔術を行ない観客席から闘技場に出る。

『おおーっと、これはセシリア様も派手な登場だー！』

「セシリア嬢、ソロソロ自分で立って下さい」

「それなら、下ろして下さい」

「おっと、これは失礼」

　セシリアは、顔色を青くしながらも自分の足で立つ。

『現在！　セシリア様の僕の数は三千六百四十四。今回も、少ない僕で勝つのかそれとも魔界の常識により負けてしまうのか！　さて、そんなセシリアとハーゲンティー様の選挙内容はこちらー！』

　そう言い、光のパネルには〈戦闘力〉〈迷宮脱出〉と表示される。

『お二人に競って貰うのは、戦闘力。これから六時間後、魔界の東の端に存在する古代都市アバロンに入って貰い先にゴールした人が勝者となります。勝てば敗者から僕の半分を入手することができます。それでは、皆さん頑張ってください！』

♢♢♢

「古代都市アバロンというのは司会のハッピィさんが言った通り魔界の東の端に存在する、名前の通り古代に存在した都市国家です。まぁ、今は誰も住んでいない亡国ですが」

「亡国……ですか？」

　セシリアは、その聞き慣れない言葉に頭を捻る。確かに生まれた時から魔界が一つに纏まっていたセシリアのような若い悪魔にはあまり聞き慣れない言葉だろう。

「あれ？　けど可笑しくありませんか？　私達の選挙内容って迷宮脱出ですよね。なのに、どうして古代都市？」

　セシリアが頭を捻る。

「お嬢様、あれ」

とそこで、セシリアが馬車の窓を指す。セシリアはその指の差すほうを向きそして、口を開けた固まる。セシリアの瞳には今の魔界の町並みとは違う石で作られた町並みが広がっている。ただし、その広さは魔界の首都サタンの倍以上ありは街の建物一つ、一つが巨人が住んでいたと思うほど巨大。しかも、その建物は決して規則正しく並んでいない。

「これが、古代都市……アバロン」

「またの名を迷宮都市アバロン、私達がこれから戦う選挙の会場でございます」

　程なくして、セシリアの馬車がアバロンの入り口に到着する。そこには、石碑が彫られていた。

「えっと、何か書かれていますね。この先、選挙立候補者とその僕三人の計四人で行ないます。あの、私達三人しかいませんよ。どうするんですか？」

　セシリアの言葉にヴァイは考えを巡らせる。

「しかたありません。あまり、彼には頼りたくないのですが」

　ヴァイは、一つため息をつくと彼の影かヌッとそれが現われる。瞳は無くその変われリ額に渦巻きの紋様がある鴉。〈魔啼鴉〉だ。

「ダカラ、コノ俺、ガガラ様ヲ勝手二呼ビ出スナ！」

ガガラはそういうや否やヴァイを攻撃しようとするが、すんでのところでクルリと旋回する。そして、そのままセシリアの所の前で停止する。

1. 貴方様ハ、セ、セシリア姫」

「えっ、えっと、はい。そうですけど……」

いきなり、自分の名前を呼ばれたセシリアは困惑しながらも肯定する。それを見たガガラは興奮しまくしたてるように言う。

「俺、俺デス！　ビブリオサタン様の直属の〈魔啼鴉〉のガガラです！」

　その言葉を聞きセシリアは一瞬目を丸くするが

「えっと、誰でしたっけ？」

と誤魔化し笑いをしながら言う。それを聞いたガガラはあまりのショックに口を明けたまま固まり地面に落下する、所をギリギリ、ヴァイにつかまる。

「大丈夫ですか？」

「ヴァ、ヴァイ。俺ハ、俺ハモウ無理ダ」

「ハイハイ、まだ、終わってありませんので死なないでください」

ヴァイは、ショックで固まっているガガラを軽くこずく。

「ソレデ、コノ俺様ヲ勝手ニ呼ビ出シテ何ノヨウダ」

　とそこでガガラは自分が呼ばれた場所を見ると自分なりに理解しニヒリながら言う。

「ハハーン、ナルホドナ。ツマリ、コノ俺ノ眼ヲ使ッテ空カラ脱出経路ヲ見ツケルッテ事ダナ」

「いえ、全くそんな要件で呼んだ訳ではありませんよ。そもそも、このアバロンの事は既に上から写真を見て最も効率的なルートは既にここに入っています」

　ヴァイは、トントンとこめかみを叩きながら言う。

「ナッ！　ジャ、ジャアー！　ナンデ、俺様ヲ呼ンダンダヨー！」

ガガラはなまじニヒリながら言ったので恥ずかしくなり早口でヴァイに詰め寄る。

「貴方には、私達が通るルートに罠がないのかを調べてほしいのです」

「フン！　誰ガソンナお前ノ僕ミタイナ事スルカヨ。マッピラゴメンダネ」

　そう言い、ガガラはその場から立ち去ろうとする。しかし、そこで待ったの声が入る。

「あの、お願いします。私達に力を貸して下さい」

セシリアである。ガガラはそのセシリアの言葉に固まる。

「ウッ……ウー……ワ、分カリマシタ」

ガガラはセシリアの言葉に渋々ながら承諾する。

「弱ッ」

「誰ダ！　今、俺ヲ馬鹿ニシタノ！」

　その言葉に、グラはそっぽを向く。

「はいはい。では、話も纏まったということで挑みましょう。第二選挙に」

　それから、数時間。セシリア達はヴァイを先頭にアバロンを進む。その間、アバロンの景色は変わらず石作の巨大な町並みが広がるだけだった。

「なんだか、思っていたよりも危険じゃないんですね」

　セシリアは眼前に広がる殺風景な景色を見ながら言う。

「危険というのは」

　セシリアの漏らした独り言にヴァイが聞き返す。

「あっ、いえ。その今回の選挙のテーマが戦闘力だったので危険な罠や、魔獣がウヨウヨいるのかとおもいまして。その、考えすぎでしたね」

　セシリアははにかむように笑う。

「いえ、そうでもありませんよ。このアバロンは危険が沢山あります。亡国となり都市一つが廃墟となった今は中央に進むにつれ強力な魔獣が住み着いています。それに、ここに住む物はもういませんが今でもそこに住む者達や建物を守るように作られた防衛機能は残っており外からの侵入者排除しよと動いています」

「侵入者……」

「えー私達の」

「オイ！　前カラ、デケーノガ来ルゾ！」

「どうやら、話すよりも見たほうが早いですね。皆さんこっちに」

　ヴァイ達は、そういい、近くの建物の二階に隠れる。すると、数秒後重い地響きが当りに木霊する。その、地響きは着々とセシリア達に近づく。

「ッ！」

　セシリアはそれに驚き声を上げようとするがすかさず口元をヴァイが押さえる。ヴァイは、セシリアのい聞きたいであろう事を予想し小声で答える。

「あれが、先ほど言った古代都市アバロンを守る防衛機能の一つゴーレムです」

　ゴーレムとは、岩石や植物に魔術をかけら簡単な命令を忠実に守る操り人形である。セシリアは自分の口を塞ぐヴァイの手を取り外す。

「あ、あんなのどうするんですか！」

「決まってます。倒すんですよ。この、選挙はそういう選挙です。己の目標に立ち塞がる障害を己の力でねじ伏せる。それが、今回の選挙です。という事でグラさん。お願いします」

「了解」

　そう言うと、グラは朽ち果てた建物の窓から飛び降りる。それをゴーレムも視認したのだろうすぐにグラに向かってその豪腕を突き出す。しかし、グラは空中で回転するとその攻撃をひゅるリとかわす。そして、ゴーレムの首に手をかけると落下の勢いを使い首の後ろに回る。そして、首の後ろにそのナイフを突きつける。その、瞬間ゴーレムはその場で膝をつき倒れる。

「まぁ、安心してください。セシリア嬢。貴方に戦闘力が無くても大丈夫です。なぜなら、貴女様にはこんなにも頼れる存在がいるのですから」

　いまだ、唖然とするセシリアの横でヴァイが誇らしそうに語る。

それから、他の危険が無いかを確認するとヴァイやセシリアも廃屋から出る。

「あ、あんなの聞いてません」

セシリアは未だにあのゴーレムの映像が恐怖として頭にこびりついているのだろう。未だにビクビクしながら当りを見渡している。

「そんなに、警戒しなくともあのレベルのゴーレムもここら辺ではそうそう遭遇することはありませんよ」

ヴァイはそう言い進もうとするがそこでセシリアが恐怖心から顔を青くし質問を投げかける。

「あの、ヴァイさん。先ほどここは中央に進むにつれ強力な魔獣が住み着いてると言ッテいましたがつまり……このまま進めばそれらにも遭遇するんじゃ」

ヴァイは少しでもセシリアを安心させるためにセシリアとは反対に軽く答える。

「そこは、大丈夫ですよ。なぜなら、私達が通るルートは街の中心は通らない大きく弧を描くルート、つまり遠回りをするルートです。多少あのようなゴーレムに立ち会うため絶対に安全とは言えませんがそれでも一番生存率の高いルートと言えるでしょう」

　それども、セシリアの不安が消える事は無い。先の選挙で多少は度胸はついたがそれは相手が話の通じる自分と同じ悪魔だったから。しかし、今回相手にするのは悪魔だけでは無く話の通じないゴーレムや魔獣。しかも、そんな相手と最悪戦闘をしなければいけない。その現実は今まで経験した事のない生物の根源的な恐怖をセシリアに与える。そして、その恐怖を克服する術をセシリアは知らない。

　と、そこで震えるセシリアの手を握る者がいた。グラだ。

「そんなに怖いなら、私の手を握って私から離れれば良い。嫌かもしれにけど、ひょろひょろのヴァイと一緒にいるよりかは安全」

確かに、セシリアが恐怖したゴーレムをたったの一撃で屠ったことからも分かるとおりグラの戦闘力はこの中で軍を抜いてる。

　因みに、ヴァイはひょろひょろと言われて苦笑いを浮べる。実際、本当のため言い返すこともできないのだが。

「分かりました」

　セシリアはその言葉と同時にぎゅっと強くセシリアの手を握る。それから、セシリア達は上空をガガラが見張りその下をヴァイ、その後ろをグラ、セシリアの順で歩く。その後も数時間に一度のペースでゴーレムに出くわしたがそれらも最初に比べれば小さく視認するやいなやグラがすぐに屠る。

　セシリアも、三度目の当りで恐怖になれてきたのか顔色が良くなる。

「あの、グラさん。さっきはありがとうございます」

　セシリアは、戦闘が終わると律儀にもすぐに自分の手を握り、前を歩くグラの隣まで移動するとそうお礼する。が、グラは相変わらずの無表情で

「別にこれしか私はできないから」

と平坦な口調で言う。

「それより、仕方無いとはいえ私が近くでお嬢様は嫌じゃ無い？」

　その思いもしない言葉にセシリアはイ一瞬目を丸くし驚くと聞き返す。

「どうして、そんな事を聞くんですか？」

すると、グラは別に誇張する訳でもなく言う。

「私の体は血で汚れている。血の匂いがつくのは普通は嫌？……だと思う……から」

　最後でグラの言葉が疑問形になったのは暗殺者であるグラが精一杯、普通に近い感性を持ったセシリアの事を考えての事だろう。

「血の匂い……ですか」

「そう、だから」

　と、そこでセシリアはグラの体に顔をくっつける。そして、クンクンとその鼻を動かす。

「な、なに？……お嬢様」

「あ、そのすいません。けど、グラさんからは血の匂いなんてしませんよ」

「？！」

　そのセシリアの言葉にグラはギョッと驚いたような顔をする。それに気づいたセシリアは一瞬首をかしげるがすぐに顔を青ざめてオロオロと慌てる。

「す、すいません！　何か気に障るような事言いましたか？」

「……そういう訳じゃ無い……ただ、その褒められて驚いただけ……私は暗殺者だから、嫌われることはあっても好かれる事は無い」

　そう言うグラの表情は悲しみを取り過ぎて何も期待していなかった。セシリアは、そんなグラの手をとっさに取る。

「そんな事はありませんよ。少なくとも私はグラさんのこと大好きですよ！　だってグラ」さん凄く綺麗ですもん！　それに、凄く頼りになるし。私、グラさんとグラさんの僕の方々がいなかったら第一選挙で負けていました。それ以前にきっと命を落としていました。だから私、グラさんのこと大好きです」

「──ッ！」

　グラは、バッとセシリアの手を離すとその場そっぽを向きその場に座り込む。

「えっ！　グラさん！　だ、大丈夫ですか！」

「だ、大丈夫。ただ、その……褒められて無くて……恥ずかしいだけ」

「そ、そうですか」

　セシリアはその今までのグラからは考えられない反応にどう対処すれば良いのか分からずタジタジになる。

　それを少し離れたところで見ていたヴァイはフッと笑う。

「何、笑ッテンダヨ」

　と、高度を下げたガガラがヴァイの肩に乗りながら言う。

「いえ、別に。ただ、セシリア嬢が我が君に似てきたので。少し、懐かしい気持ちになったのですよ」

　そう言いヴァイに流れるのまだ、前魔王ビブリオ･サタンが生きていた頃の記憶。その記憶ではビブリオ・サタンが仕事を終らせ返ってきたグラを良く「かわいい」や「綺麗」などといいねぎらう映像が流れる。勿論、その記憶のなかでもグラは顔を赤くし照れていた。

「フーン、俺ノゴ主人様ガネ。ナンカ、想像ツカナイケドナー」

「人によって印象の変わる不思議なお方でしたからね。さて、お二人とソロソロ行きますよ！　お忘れかもしれませんが、私達は、ハーゲンティー様よりも早く着かないといけないのですから」

　その、言葉を聞きセシリア達はハッとしたのだろう。すぐにヴァイの元まで走る。その反応を見たガガラが言う。

「本当ニ、ゴ主人様ニ似テ来タカ？　少ナクトモ俺ノ記憶ノ中ノゴ主人様ハ、アソコマデオッチョコチョイジャ無カッタゾ」

「うーん……」

　それから数時間後、一行は歩き続けるが日も沈んだ事により野宿をする事になった。マッチで火を起こし明かりをつけると持ってきた非常食を食べる。

　それから、見張りと休憩をローテーションで行なう事にした。最初は、ガガラとセシリアが休みヴァイとグラが見張りを行なう。

「昼間は、随分楽しそうでしたね」

「別に……そんなことない」

　グラはそっぽを向きながらそう言う。その顔は少し赤くなっているのは松明の熱のせいでは無いだろう。

「ねぇ、ヴァイは今回の選挙お嬢様や私達が無傷でこの選挙に勝つと思う？」

その言葉にヴァイは間髪入れずにに答える。

「勝ちますよ」

ただし、すぐに付け加える。

「ただし、このまま私の作戦が上手くいけばですが」

「上手くいかない要因がある？」

「えぇ。一つ例を挙げるなら、先の選挙戦で私達にあの三流の襲撃者をけしかけた人物や、グラさんの僕に手傷を負わせるほどの手練れをけしかけた人物などです」

あの後,選挙相手だったベリトラに直接問いだしたが答えはノー。ヴァイの思考を読みまた自分の思考を植え付ける魔力〈〉を使ってもヴァイやグラの選挙を妨害した記憶は存在しなかった。

「その他にもハーゲンティー様が意外にも頭を使い私達と同じ作戦をとった場合は単純なスピード勝負。そうなれば、武闘派のハーゲンティー様達に分があります」

　ヴァイの考えではハーゲンティーは目につく建物という建物を壊し真っ直ぐ進むというルートを取ると考えている。そして、それは間違っていない。勿論、前提として守る物を壊され住処を壊され怒り狂うゴーレムや魔獣を退けるだけの力があればだが。

　勿論、ハーゲンティーがこのルートを取るとは限らない。あくまで、これはヴァイの予想である。

「と、たられば話はここまでしましょう。いくら、離したところでしょせんそれはイフの話です」

「たしかっ！」

「ッ！」

　そこで、ヴァイはガガラの首根っこを掴みグラはセシリアの体を抱え込みその場を飛び退く。と同時に轟音と共に近くの建物や壁が瓦礫とかし砂塵が舞う。

「な、何ですか？　もう、時間ですか？」

　その騒がしさにセシリアも目を覚ます。そして、寝る前といはあまりにも違う景色に目を丸くせざるを得ない。

「な……何が置きたですかー！」

「分からない」

　セシリアの疑問にグラは平坦に答える。

「ウガッ！」

そこで、ガガラも起きる。と、そこで、砂塵をかき分けるようにして一人の悪魔が現われる。その、体は筋肉に包まれその顔は闘牛の形になっている。ハーゲンティーである。

「ンンンンン！！　モォーーーーーー！！！」

　ハーゲンティーは、そんな雄叫びを上げると目の前のそれに向かっていく。まさに、竜と食虫植物が合体したような魔獣だった。その体は大きくｊ幾重もの蔓や茎が重なっている。そしてその茎や蔓をい目で追うとそこには血のように真っ赤に毒々し色をした花びらが首から生えた竜のような顔がある。

「ドラグフラワー。また、やっかいな物を呼び出しましたね」

　ドラグフラワー、それはこの古代都市アバロンでも一、ニを争う戦闘力と凶暴性を持った魔獣である。ドラグ花はいくつもある体に生えた蔓や枝をハーゲンティーにけしかける。ハーゲンティーはそれを意外にも避け、避け切れなかった物はガードを真っ直ぐに進みドラグフラワーの顔面まで跳躍し勢いよく殴る。そんな文字通り人外同士のバトルをヴァイ達が傍観していると空から司会のハッピィと同じく鳥の翼と足を持った悪魔。その背中に犬の顔をした悪魔がのり、足には猿の顔を持つ悪魔が現われる。恐らく、ハーゲンティーの僕の悪魔だろう。ハーゲンティーの僕は近くに降り立つと傍観していたヴァイ達に声をかける。

「おい、お前らハーゲンティー様は！ ハーゲンティー様はどこに行った！」

　犬の悪魔が叫ぶ。

「それならそこに。というか何があったのですが？」

そのヴァイの言葉に彼らは若干の沈黙の後、目をそらしながらしどろもどろに言う。

「いやー、そのー。真っ直ぐ目の前の壁を壊しながら進んでたら間違ってあれの体をぶん殴ってしまってー……」

　猿の悪魔はそうしどろもどろい言う。

　それを聞きヴァイはなんとも言えない気持ちになった。ヴァイの考えは的中していたがそれでも予想外のことにどう反応すればいいのか分からなかったのだ。

　そこで、鳥の悪魔が言う。

「おい！　ハーゲンティー様の場所は分かった！　俺たちもいくぞ！　おい、ヴァイ。ということで戦いたくないなら逃げろ」

　そう言い、彼らはハーゲンティーの所に飛び立つ。

　突如、岩石でできた豪腕がセシリア達を襲う。ヴァイは例のごとく自分の服に仕込んだ身体強化の魔術で空高く飛び近くの建物の屋根に立つ。と、数秒遅れてセシリアを抱え込んだグラも立つ。

「どうやら。盛大に、あちらが戦ったせいで強力なゴーレム達も呼び出してしまったようですね」

「ど、どうすれば……へッ！」

　数時間前まで恐怖の象徴だったゴーレム、しかもそれが大量にこちらに押し寄せてくるという恐怖にセシリアは顔を青くする。

　突然、セシリアは浮遊感に襲われる。見ると、今まで自分を抱えていたグラが自分を投げていた。セシリアは放物線を描きヴァイにキャッチされる。

「ヴァイ、ここは私がどうにかする。お嬢様は任せた」

その言葉の意図をヴァイは瞬時に理解する。

「ガガラさん。グラさんについてください。貴方なら離れた私達も見つけられるでしょう」

『……分かったよ。ただし、お嬢様を泣かせたら許さねーぞ』

「えぇ。わかっています。お二人とも、死なないでくださいね」

グラはそう言うと、今立っているの屋根から渡りながらその場を後にする。数秒後、建物がガラガラと崩壊する音が響く。恐らくは、グラがゴーレムの意識を自分向けさせるために建物を壊したのだろう。ゴーレムは、町を破壊する者を優先的に排除するように作られている。因みに、今こうしてヴァイがやっているように建物の屋根を使って移動するという行動もゴーレムに取っては本来は排除対象であるがこの状況では優先度が低いだろう。

　それから、数十分間ヴァイは自分の体力が続く限りセシリアを抱えて走り続ける。

「はぁ、はぁ、ここまで……来ればもう追っても来ないことでしょう」

　ヴァイは、その場で膝を折る。その額には玉のような汗が流れ荒い呼吸を続ける。耳をすませば遠くでは戦闘音が聞こえる。セシリアは、その音が聞こえる方向を心配そうに見つめる。

「はぁ、はぁ、ひどい作戦だと思いますか？」

ヴァイは、近くの建物の壁に背中をつけ座った体制でセシリアに聞く。ヴァイは、セシリアの性格上どうしてあの二人を置いていったのですか、と激情に任せて言うのだろうと予想する。しかし、セシリアの口から出てきたのはヴァイの予想を超える者だった。

「……思います。ただ、あの場ではきっとあの行動が正しこと……だと信じています。だって、ガガラさんも、グラさんも。そして、ヴァイさんも何も言わなかった。だから、私はあの二人を置いていった事を酷いとは思いませんそれに、正攻法で勝てないぐらい私が弱いことはヴァイさんと会って十分に理解しているつもりです。」

　そこまで言うと、セシリアは戦闘をしている所に背を向ける。その表情に最初あった少女特有の弱々しさは無かった。あるのは自らの弱さを受け入れそれでも前に進もうとする凛々しさだった。ヴァイは、それが嬉しくもあると同時に、一人の少女に歳不相応の表情をさせてしまったことに罪悪感を憶える。

と、そこでヴァイはセシリアに腕をつかまれ立たされるとその腕を肩に回された。

「ただし、あの二人を助けることを諦めた訳ではありませんよ。早く、ゴールしてあの二人を助けにいきます。なので、道を教えてください」

「そうですね。早くこの選挙を終わらしましょう。こちらです。少々危険ですが、このまま真っ直ぐ進みましょう。今なら他のゴーレムはいないはずです」

　二人は、そのまま二人三脚のいいようにゆっくり進む。道中多少、ゴーレムやそこに住む魔獣に見つかりそうに成ったこともあったがその都度引き返しもしくはヴァイの知恵で乗り切っていく。

「後どれぐらいですか？」

「そうですね……かなり蛇行してきていますが、あの見張り台の位置から考えて恐らく後

数キロと言った所でしょう」

二人は、体を引きずるようにして一歩また一歩と進んでいく。

だが、ヴァイはこの時点で大きな見落としをしていた。本来なら安全な国内を守るだけでここまでの戦闘を繰り広げられる程の防衛システムが投入されている。ならば、安全では無い国外に向けての防衛システムはどれほどの者か。ましてや、その防衛機能が暴走し国外では無く国内にいる者を無差別に襲う状態になっているなら一体どれほど驚異的な物になるかという本来のヴァイなら想像できる事が極限の疲労状態だった今のヴァイには想像できなかった。

ヴァイはゴールとなっている出口の門の近くでキラリと光る物に気づく。ヴァイはそれが、魔術でスピードを強化された矢だということに気づくのにそう時間がかからなかった。

「危ない！」

　気づいていた時には既にヴァイの体は動いていた。

「グッ！」

　ヴァイはセシリアを押し倒すとセシリアを襲うとする矢全てをその背中で受ける。ヴァイの服に血がジワリと広がる。

押し倒されたセシリアはあまりにも突然な事に状況が飲み込めず目を丸くするだけだった。ヴァイは口から血を流すと、

「ヴァイ……さん」

　ヴァイは、口から血を流しながらもセシリアの問いにニコリと微笑みを返すとその場に力尽き倒れる。

　門に備えつけられている防衛システムは敵を自動で感知するなどの機能がある訳では無く追撃は無かった。

　セシリアは、自分の体に覆い被さるヴァイの体が徐々に冷たくなるのを感じる。セシリアはヴァイの下から抜け出すと少しでも傷を癒やそうと背中に刺さった矢を抜き服を脱がす。そこで、セシリアは奥歯をかみしめる。なぜなら、その傷が素人のセシリアから見ても分かるほどに致命傷だったから。

　かすかに息はあるがそれが止まるのも時間の問題だろう。

「ヴァイさん！　ヴァイさん！　起きて下さい！　ヴァイさん！」

　セシリアは必死に呼びかける。だが、その呼びかけにヴァイは答えない。その意味を理解した瞬間セシリアの視界が真っ黒に染まる。

♢♢♢

グラは建物の屋根を移動する。今回のグラの作戦は、とにかく時間を稼ぐことある。それも、できるだけ多くのゴーレムや魔獣を引きつけてだ。

『オイ！　大丈夫カヨ！　サッキカラズット走リ続ケテルケドヨー！』

ガガラはセシリアから離れてからずっと走り続けるグラを心配そうに言う。

「大丈夫。グラとは違うから」

そう言うとグラは自分に跳んでくるゴーレムの拳を避けるとその拳に乗る。そしてそのまま腕を伝って走り出しゴーレムの首元にあるEMETHのEの文字をかき消す。その瞬間、先ほどまで動いていたゴーレムは魂が抜けたようにその場に崩れる。

「はぁ、はぁ。まだ、終わらないか」

　グラはそこで一度、息を整えるとナイフを持ち直す。そして、全ての神経を近づいてくゴーレムや魔獣に向ける。その、瞬間グラの体は今まで感じたことの無い強烈な威圧感に押しつぶられそうになる。それは、ゴーレムや魔獣達も感じたらしく一斉に動きを止める。そして、数秒突如として魔界が真っ暗な闇に包まれる。そのあまりにも、あり得ない現象にグラは今まで感じたことの無い恐怖を感じる。そして、その闇が晴れるとそこに広がった景色は

「何……これ」

破壊の限りが尽くされた景色だった。ゴーレム達は瓦礫と化しそこに住み着いていた魔獣達は屍と変わっている。まるで強力な爆弾でも落とされたと思うほどの惨状だった。

「これが……お嬢様の魔力……」

グラは、目の前の惨状を見ながらポツリとそうつぶやきナイフを握り返す。その、表情はまるで親の敵を見るように険しい顔をしていた。

セシリア僕の数・三千六百四十四　強力者・二人

四章

「ん……んー……ここは？　私は、何を」

　ヴァイが最初に見たのは、見慣れない天井だった。ヴァイは、状況把握をしようと体を起こす。そると、自分の体にズキズキと鋭い痛みが走る。ヴァイは自分の体を見る。そこには清潔な包帯が巻かれていることに気づく。そこで、ここが病院だということをヴァイは理解する。

「私は一体……確か……魔王選挙で古代都市アバロンに……そうだ！　魔王選挙どうなって！」

　ヴァイは、痛む体を引きずるようにしベットから降りる。ベットから降りたヴァイはフラフラになりながらも歩き出す。そして、病室の扉に手をかけたところで

「ヴァイさん！　大丈夫ですか！」

「グハッ！」

　ヴァイは突然部屋に入ってきた人物とぶつかりその衝撃で床にぶつかり目を回す。

「あれ、ヴァイさんがいない？」

　突然部屋に入ってきた人物、セシリアは目を丸くする。なぜなら、教えて貰った病室にはヴァイがいなかったからだ。

「お嬢さま？」

　遅れて、病室に入ってきたグラは病院の地べたに座り込むセシリアに声をかける。

「た、大変です！　グラさん、ヴァイさんがいません！」

　セシリアは今にも泣きだしそうに瞳に涙をためていう。そして言葉を聞いたグラは一瞬考えるようなそぶりを見せると一言

「……お嬢様、ヴァイならそこ」

　ヴァイの指先を目で追うセシリア。そこで気づく。自分がヴァイを下敷きにしている事に。

「ほ、本当にすいません！」

　ベットの上に腰掛けるヴァイにセシリアは深々と頭を下げる。

「別に、気にしないでください。あれは、ただの不幸な事故だったんのですから。それより、セシリア嬢こそお怪我などは大丈夫だったのですか？」

　ヴァイは今のセシリアの服を見ながらいう。セシリアの服装はヴァイと同じ病院着。ならばここに入院していることは用意に想像がつく。

「あ、はい。私は、ヴァイさんがかばってくれましたので。対した傷はなくて」

「嘘、お嬢様もさっき起きたばかり。本当は、今もベットで寝て無くちゃ駄目」

と、横からグラがいう。

「それは、どういう」

「そ、それは」

セシリアの言葉をグラは遮りセシリアが何故倒れたかをアバロンの選挙の事を絡めて話す。

「ヴァイと離れた後、突然、世界が暗くなって次に世界が明るくなったらアバロンの何もかもが壊れていた。その後、選挙事態が続行不可能ってことになってすぐに助けがきてその時にはヴァイもお嬢様も大きなクレーターの中心に倒れていた」

　そこまで、聞きセシリアは顔を伏せる。ヴァイは、少し考えるそぶりを見せるとグラに質問をいくつか投げかける。

「なるほど、とりあえず選挙の顛末は理解しましたが、結局セシリア嬢と私は一体何が原因でここに運び込まれたのですが？」

「ヴァイは、出血多量。お嬢様は、魔力が枯渇して衰弱状態になったから」

　それを聞きヴァイは自分がセシリアをかばって攻撃を受けた事を思い出す。そして、もう一つ今セシリアが顔を伏している理由も大方理解した。

「なるほど。状況からして、セシリア嬢の魔力が暴走して選挙もろともめちゃくちゃにしたといったところですか」

　それを聞き、びくりと体をセシリアは体を動かす。

「あ、あの、ヴァイさん……すい」

「申し訳ありません」

　セシリアが頭を下げようとすると、それよりも先にヴァイが頭を下げる。そのセシリアの想像を超えたヴァイの行動に驚くことしかできなった。

「どうして、ヴァイさんが私に謝るのですか⁉」

「当然です。私は最初に貴方に言ったはずです。何が何でも魔王にさせると。しかし、それを私は守れなかった。どころか、今回の選挙で貴方を衰弱させるまで魔力を使わせてしまいました。その全てが私の作戦の見通しが甘かった事に起因します。貴方が望むならどんな罰も受けましょう。グラさん」

「分かった」

　グラは、そう言い懐からナイフを取り出す。

「まってください！　私は、そんなこと望みません！　ヴァイさんは、私をいつも助けてくれました！　そんな、ヴァイさんを私は絶対に咎めたり、攻めたりなんてしません！」

「……本当に、甘いわですね。セシリア嬢」

「まったくだわー。まだまだ未熟。いままでこの選挙に勝てたのが奇跡ね本当に」

　ヴァイの言葉に続くようにして、新たな人物の声が部屋の扉から聞こえてくる。その言葉にヴァイ達一同はその声のする方を向く。そこには、魔王選挙第三位にして〈七罪幹部〉の一人〈色欲〉のジェルミンがいた。

　場がシンと静まり変える。グラはすぐに席を立つとセシリアとヴァイの前に立ち迎撃態勢に入る。残る二人もできる限りの警戒を行なう。そんな、三人を見てジェルミンはニヤリと笑い言う。

「やーね。そんなに警戒しなくても別に取って食おうなんてしないわよ。ただ、私はあんた達が寝てる間に起こった事を報告しに来ただけよ。という事で、選挙に出馬してないグラ。アンタには悪いけどこの部屋から出て行ってもらうわよ。ヴァイは……仕方無いからいていいけど」

　ジェルミンも言葉にグラはノーを突きつける。

「断る。私は、貴方の指図を受ける義理は無い。僕の数は少なくても〈七罪幹部〉と〈番外の二罪〉の力関係は同等のはず」

「聞き分けの無い子は嫌いよ。私」

　そう言い、ジェルミンはの視線が他人の体を射貫くように鋭くなる。そこで、ヴァイは不味いと感じたのだろう。

「グラさん。ここはジェルミン様の言うとおりにしてください。ここは、少しでも情報が欲しい所です」

「……分かった。ただし、ジェルミン扉の近くにはいさせて貰う。そして、何かあったら許さない」

「はい、はい。それでいいわよ」

グラはジェルミンに言葉を残し部屋を後にする。

「それで、私達に伝えたいこととわ？」

「要件は主に二つよ。一つは、アンタ達が行なった第二選挙の結果。昨日、結果がでたわ」

「昨日？　随分遅いですね」

「仕方無いでしょう。あんな結果がでるなんて誰も想像しないわよ。聞いた話じゃ選挙管理委員もかなりゴタついたらしわ。で、結果だけど引き分け。票の移動はなしよ」

　それを聞き、セシリアはホッと胸をなで下ろすがヴァイは苦い顔をする。票が減るよりはましだが、三日間選挙に出れなかった遅れ、その間に他の選挙立候補者は票を集め、負けた者は選挙から自主的に選挙から脱落し元々自分の上司だった者、つまり〈七罪幹部〉の僕になる。そうなれば、票の多い者は更に票を増し元々票の少ないセシリアとの票の差は開くばかりである。見方によっては普通に選挙に負けるよりもセシリアは危機的状況といえる。

「そして二つ目。次の選挙内容が決まったわ。内容は〈握手会〉簡単に選挙内容を言うと制限時間までにより多くの悪魔と握手した方が勝ちよ。ま、詳しいことはこれに書いてるから良く読んでおく事ね」

　そう言い、ジェルミンは一枚の紙飛行機をセシリアに投げる。紙飛行機は、セシリアの近くまで来るとひとりでに一枚の紙となる。

「それじゃ、じゃーね」

そう言い、ジェルミンは部屋を後にする。部屋からでた直後「ちょっと！　なに人に足をかけようとしてるのよ！」　などと聞こえた気もするが今はおいておくとしよう。

「終わった？」

「えぇ。そして、これからかなり不味い事が起きると思いますよ」

そのヴァイの言葉はすぐに的中する。セシリアは、ジェルミンに渡された紙に目を通すやいなや顔を青くしヴァイに抱きつく。

「ど、どどどどうしましょー！！　ヴァイさん！　これ！」

「い、痛い痛い痛い！　セシリア嬢痛いです！」

　ヴァイは傷に刺激が襲い涙目になりながら突き出された紙の部分を見る。そして、自分の予想が的中しニヤリと苦笑いをする。そこには、〈選挙相手ジェルミン〉と書いてあった。

♢♢♢

「さて、という事で早速ですが対ジェルミン様の作戦を考えまょう」

　あの後、ヴァイとセシリアは病院を半ば強引に退院するとその足でセシリアの部屋に移動。早速作戦を立てる。

　唯一、ジェルミンとの選挙内容が直接対決では無かった事が救いと言えるだろう。今回の選挙内容は〈握手会〉その内容で競う物は〈魅力〉。

「といってもまずは情報収集です。細かいルールを含めて再確認しましょう」

と言うことで、三人は再度配られた紙に目を通す。

ルール一　制限時間約五時間。その間にこちらが指定したところで握手会を行なう

ルール二　悪魔を呼びこむための宣伝などの行動を選挙前にすることは良いが賄賂または自分の配下の者をサクラとして使う事は許可しない。発覚した瞬間その立候補者を敗者とする。

ルール三　対戦相手である選挙立候補者の直接的攻撃は許可しない。

「ルールだけ見ると、かなり公平？」

「えぇ。かなり公平だといえますよ。対戦相手がジェルミン様でなければ」

ルール二があるため今回の選挙では僕の数が直接的な敗因につながることはない。今回

の選挙で求められるも鍵は二つあるとヴァイは見抜く。一つは即座に相手を惹きつける魅力。二つ目は、魔界の知名度。

そして、本来なら魔界に住む悪魔たちは自分の肉親以外なら基本的に自分が忠誠を誓っている悪魔の事しか知らない。ゆえに、もし対戦相手が普通の立候補者なら問題は無かった。しかし敵は魔界でも知る人ぞ知る〈七罪幹部〉の一人ジェルミン。知名度ということなら大きな差があるといえるだろう。そして、魅力という点においても〈色欲〉の称号を持つジェルミンの方がセシリアよりも分があると言えるだろう。

「さて、情報は分かった所で作戦を立てましょう。さぁ、何か考えがある人はいますか？」

　その言葉について誰も反応を帰さない。

「もし、無いようでしたら私に一つ考えがあります」

「あるの？　この危機的状況を打破する方法？」

「えぇ。一つだけあります。グラさん。ズバリ浮動票を手に入れます」

「浮動票？」

　浮動票とは誰にも属さない票。今回でいえば誰の僕にもなっていない者が持つ票のことである。

「けど、そんな人たくさんいません……よね」

　セシリアがそう言うのも無理は無い。魔界は基本、弱い者は強い者の僕になりその糧となる代わりに安全を保証してもらう、というシステムで成り立っている。誰かの僕にならなくて言い程の強さを兼ね備えた人物はそれこそ、今は魔王選挙に立候補している。

　立候補者達に自分の握手会に誘ったとしても、ジェルミンの元に来るであろう悪魔の数を考えれば到底太刀打ちできる数では無い。

　しかし、ヴァイはニヤリと薄笑いを浮べセシリアの言葉を真っ向から否定する。

「それが、いるんですよ。まだ、誰も僕にしていない人物が」

　そこまで良いグラもピンときたのだろう。ボソリとある単語を言う。

「……まつろわぬ民……」

「正解です」

　グラは、うーんと苦虫をかみしめたような、何かを悩んでいるような顔をする。

「ヴァイ、それは危険」

「それは、百も承知です。しかし、虎穴に入らずんば虎児を得ずとも言います」

「でも……」

「あ、あの～……すいません。その、まつろわぬ民ってなんですか？」

　セシリアが、二人の討論に割って入るようにして言う。

「そういえば、セシリア嬢にはまだ言っておりませんでしたね。まつろわぬ民というのは魔界に住みながらにしてタルタロスの誰とも主従の契約を結んでいない者達のことでございます」

　まつろわぬ民達とは、魔界を前魔王ビブリオ･サタンが統一する前、魔界がいまだ多くの小国を作り戦争をしていた時代のは既に存在していた悪魔達である。

　彼らは、どの組織にも属さず鍛冶や工芸などの一芸を極めそれをどの組織にも売りつける事でどの組織にも属さずに安全を手に入れたいわば型破りな職人悪魔達の事である。

「彼らはの基本理念は、下につけども従わず。故に、彼らはタルタロスウの悪魔ではありますが決して権力には屈さず自らが課した方でのみ動きます」

「なんだか……気難しそうな人達ですね」

「えぇ。事実気難しいですよ。我々が魔界を統一する時、幾度となく私や、魔王様が交渉しましたが決して我々の仲間になることはありませんでしたからね」

「……そんな人たちが……私に強力してくれますでしょか？　自身無くなってきました」

「でも……やらないと、お嬢様は勝てない」

「そう……なんですよね……分かりました！　私やります！　もう、負けるのも嫌なので！」

「よくぞ言いました。それでこそ、セシリア嬢。次代の魔王です。では、早速行きましょう。と、その前にグラさん。また、貴方の僕を使ってもかまいませんか？」

「良いけど……何をする？」

「これを配ります」

　ヴァイはそう言い、転移の魔術が発動する。そして、一瞬にして、ヴァイの手には大量の紙の束が握られていつ。よく見ると、それはセシリアの握手会を示すビラだった。

「焼け石に水程度かもしれませんが、少しは効果があるかもしれません。あっできえば郊外えお中心に宣伝をお願いします」

「分かった」

　そう言い、グラはビラを手に取る。

「さて、それでは早速向かいましょう！」

♢♢♢

　あの後すぐに身支度や諸々んぽ準備を済ませたセシリア達は馬車に乗る。セシリア、グラ、ヴァイは今魔界の南に向かっている。当りはのどかな森やあ草原といった景色が広がっている。

ちなみにガガラはというと、空を飛べるという事でグラの僕と同じく宣伝活動にいそしんでいる。

「あの、これからどこに行くんですか？」

「南にまつろわぬ民で構成された大きな集落があります。そこの、長に会いに行きます」

　セシリア達がいま向かっている集落の長は何でも数百年は生きているまつろわぬ民達のリーダー的存在らしく彼が一声かければ多くのまつろわぬ民達が強力してくるれる程の影響力を持っている。

「そんな人がというと……やっぱり気難しい人なんですよね。いいんですかね、そんないきなり言って」

「アポについては大丈夫です、前々からとっていましたので」

「いつのまに！」

「そして性格に関しては……まぁ、否定はしませんね」

それを聞きセシリアは深いため息をつく。

「安心して欲しい。いざという時は私が」

　そう言い、懐からナイフをキラリと輝かせる。

「そんなことはさせません」

　そう言い、ヴァイはセシリアの頭に軽くチョップをかます。

「と、どうやら見えてきましたよ。あれこそが、まつろわぬ民達が住む集落。〈ハンドタウン〉です」

　セシリアは、ヴァイの言葉を聞き窓から景色を見る。

「あれが……」

　その街を一言で表すなら街そのものが巨大な工場。いままで見えていた草原や森とは打って変わり街は大きな鉄の壁で囲まれておりその鉄の扉からを超えるほどの高さを持った煙突が五本、それと同じ背丈の巨大な歯車が三本見えゆっくり回っている。

　セシリアも魔王選挙が始まり色々な場所を見て回ってきたが今目の前に広がる景色はその中でも群を抜いて異様といえるだろう。

　セシリア達は〈ハンドタウン〉に入るために門を通ろうとする。そこで、一度門番に止められるがヴァイが懐から一枚の紙を見せると門から下ろされセシリアリア達のみ入ることを許された。そこから一人一人簡易的なテントに通され厳重なボディーチックを受ける。

　セシリアは、初めてのボディーチェックに緊張したのかテントから外に出るとフーと息を吐く。しばらくしてヴァイと合流する。

「どうやら、入る事はできたようですね」

「はい、けど緊張しました～」

「この都市自体がタルタロスとの関係を断っていますからね。故に他の都市と違い事件が起きてもタルタロスが介入することはでません。ですから危険な人物を入れないようにし、事件などが起きないようにスルのです。まぁ、そのぶん我々まつろわぬ民以外の悪魔はどんなに僕をもっている方でも自由に出入りが可能ではないという不自由は発生していますが」

「なるほど……そういえば、グラさんが来ませんね」

「あー、グラさんは……恐らくですが」

　ヴァイは、苦笑いを浮べる。すると、フラフラと千鳥足のグラがセシリアに現われる。その顔色はお世辞にも良いとは言えず、よく見ると髪はボサボサ、服も所々皺ができている。

「グ、グラさん！　どうしたんですか！」

　セシリアはグラに近づく。その瞬間グラは、崩れ落ちるように倒れた為セシリアはグラの肩を掴み支える。グラは蚊の鳴くような声で言う。

「ぜ、全身を、まさぐられて……武器……全部とられた。ち、力が出ない」

　それを聞き、セシリアも苦笑いを浮べる。グラは裏社会にその名をとどろかせる暗殺者だ。そんな人物が事件は御法度なこの都市に入るには手持ちの武器を全て没収ぐらいさせられるだろう。

「まったく、まだその体質治っていなかったんですか」

　そう言い、ヴァイは懐から一本のナイフを取り出しグラに渡す。

「こんなこともあろうかと、刃引きをしたおもちゃのナイフを持ってきて正解でした。ほら、グラさん。これで元気を出してください。そして、護衛としてセシリア嬢を守ってください」

　グラはヴァイからそのおもちゃのナイフを受け取った瞬間。先ほどの弱々しい態度と打って変わりいつもの凛々しい姿に変わる。

「分かっている」

　その変わるようにセシリアは目を丸くする。

「彼女も少々変わっておりましてね。あーやって武器を全て取られると待ってく役に立たなくなるんですよ」

「なんで、そんな事になったんですか？」

「生き抜くために極めた技術の弊害といった所ですかね。まぁ、グラさんだけではないでうが」

「だけでは……ヴァイさんもあるんですか？　あーいう欠点」

「さぁ……どうですかね」

　ヴァイは、セシリアの言葉を軽く受け流す。

　三人は早速、まつろわぬ民たちの長に会う……のではなく〈ハンドタウン〉を散策する事になった。理由は単純に長に会うまで時間があったかららというのもあるがもう一つ。少しでも長のことや、まつろわぬ民達の事を知り対面したとき少しでも交渉を有利に進める為である。

　という事で三人は〈ハンドタウン〉を見て回る。〈ハンドタウン〉の多くが何かの工房だった。そしてその前に露店が建ち並び工房で作った者が並んでいる。そして、そ露店で店番をする者も工房で何か作業をしている職人達も皆、サタンでは見ない種族ばかりだった。

「これは」

　セシリアはある露店で足を止める。そこで売られていたのは最初の選挙のおり、セイレーヌの闇市で売られていたセイレーヌのガラス細工である。しかも、闇市で売られていた物とは違い本物デあることは素人のセシリアから見ても分かるほどの出来映えである。

「けど……どうしてこれが……これはセイレーヌの特産品で他じゃめったに手に入らないんじゃ‥……もしかして盗品」

と、そこでヴァイがセシリアにかるくチョップを食らわす。

「めったなことを言うもんじゃありませんよセシリア嬢。ここにセイレーヌのガラス細工がおいてあるのはここがセイレーヌ以外で唯一セイレーヌのガラス細工を作れ場所だからです」

　セイレーヌのガラス細工の特徴は言わずもがなその美しいガラスにある。そして、そのガラスはセイレーヌの近くに存在する海の砂浜でしか取れない。だがそこで問題が起きた。元々セイレーヌは海の幸を輸入することで生計が成り立っていた都市。故に一つガラスを作り加工する場所と技術がなかった。そこで、セイレーヌはガラスの原材料となる物を〈ハンドタウン〉に輸出。そして、出来たガラス細工をまた買うことでセイレーヌのガラス細工を売っているのである。

「なるほど……だから闇市でのないのにこの値段で売れているんですね」

　セシリアにとっても思い出のある品のためつい目を輝かし見入ってしまう。と、、そこでふとセシリアは顔を上げある方向を見る。そこは、人通りの多い大通りのほうだった。

「どうしました？　セシリア嬢？」

「あっ！　いえ……その何か……嫌な気配を感じたと言いますか……気のせいだと思うんですけど」

それを聞きヴァイは目を細める。

「ほぉ、それは……調べて見ましょう。セシリア嬢。場所は分かりますか？」

「た、多分こっちです」

ヴァイとグラはセシリアの感覚を頼りに移動する。大通りを抜け路地裏に入りそして、ついた場所は大きな工房の裏だった。そこには、色々な廃材が置かれている。

「随分、遠くまで来た。本当に会ってる？」

「うーん……会っているとは思うんですけど。なんと言いますか、移動してて……」

「お前ら！　いつまでついてくるんだよ！」

　当然、そんな声をセシリア達は耳にする。そして、その声と足音がどんどんセシリア達に近づいてきた。

「どうやら、セシリア嬢の予感は当たっていましたね」

　セシリア達の目の前では、二人の大きな男が一人の少女を囲み強引に折檻していた。

「それでどうしますかセシリア嬢？」

「何言ってるんですか、そんなの助けるに決まってます！」

「だ、そうです。グラさん」

「了解」

　グラはそう言うと、いつものようにナイフを抜くと勢いよく地面を蹴る。男達もいきなり猛スピードで近づいてくるグラに気づく。

「な、なんだお前！」

　グラは、地面を強く踏み込み跳躍し男の一人の後ろに回り込む。それにより、二人の男達の中に入り込んだ。二人の男はその自分達の常識を大きく逸脱したグラの動きに反応が出来ない。

　その隙にグラは一番後ろにいる男の顎を下から上に蹴り上げる。

「グァ！」

　仲間が一撃でやられたことに恐怖を覚えた男は、先ほどまで折檻していた少女の腕を強く掴むとすぐにそこを離れようと走り出す。そして、自分の進行方向を塞ぐように立っているセシリアに向けて短刀を抜刀する。

「じゃーまぁーだぁー！」

　セシリアは、一瞬恐怖するがすぐに目の前の男を睨み、素人丸出しの不格好な構えをする。その、瞬間セシリアの体に数枚の真っ黒な長方形の紙が周りに出現する。それに伴いセシリアの意識どこか遠くに引っ張られそうになった瞬間

「いけません！」

　ヴァイがセシリアの肩を掴みグイッと後ろに無理やり下げる。それにより、セシリアの意識は一気に引き窓される。

　ヴァイは、それをセシリアの表情で確認すると自分に向かってくる男の動きに合わせて勢いよく右拳を突き出す。それと同時に身体強化の魔術を使い自分の筋力を上げる。

　そして、その拳は見事男の顔面にクリーンヒット。

「ブゲボバ！」

　鼻血を垂らしながら後方に勢いよく吹っ飛ばされる。それにより、男が掴んでいた少女も後ろに倒れ尻餅をつく。

「ふぅー。あまり、慣れないことはしないに限りますね。手首が痛いです」

　グラは、右手をぶらぶらしながら言う。

「大丈夫ですか？　お怪我は？」

　ヴァイはそう言い尻餅をついた少女に左手差し出す。

「あっ、おう。こんぐらい平気だ」

　少女はそう言い、ヴァイの左手を掴むと起き上がる。遠くからでは見えなかった少女の姿が今なら良く見えた。少し赤みかかった肌に少しつり目な黄色い瞳。その髪は腰まで長く白い。そして、その額には日本の角は生えている。

「赤い肌と白い髪。そして、黄色い瞳。貴方、オーガですか。それも、その姿はここの職人ですか」

「お、良く分かったな。俺が職人だって」

「その服装を見れば誰でも分かりますよ」

　オーガの少女の服装は上は黒いタンクトップに下は獣の毛皮で上下のつなぎ。腰には、そのつなぎの上半身が巻かれている。そして、手には本来の少女の手を二回りほど大きくさせる厚手の手袋がされている。背中には白銀のハンマーをしょっている。

「あ、まぁそうか。って、まだお礼も言って無かったな。ありがとなえっと……」

「ヴァイと申します。それと、お礼ならあちらに。セシリア嬢がいなければ、私達が貴方の存在に気づく事も無かったのですから」

　そう言い、ヴァイは近づいてくるセシリアに手を向けながら説明する。

「おっ、そうか！　ありがとな。俺は、ガーナっていうんだ！　ここで、鍛冶職人をしてるんだ」

「えっと、私はセシリアです、セシリア・サタン」

「セシリア……サタン？……どっかで聞いた事があるような……」

「あ、それは」

　セシリアは自分が、死んだ魔王の娘であると明かそうとするがそれよりも先に

「まいっか。忘れるってことはどうせ対したことじゃないんだろうし」

とあっけらかんのい言う。そんな予想を裏切る行動にセシリアは少しフリーズする。勿論だが魔王ビブリオ･サタンが死んだことも、目の前にその娘がいることも魔王選挙に出馬している者以外からすれば対した事では無い。

『仕方ありません。ここは、世俗とはほぼ切り離された街です。魔王が死んだ事、というか魔王という存在がいる事する知らない可能性があります』

　セシリアの脳内にヴァイの声が響く。ヴァイの他人の脳内を読むまたは、自分の考えを他人に押しつけるヴァイの魔力〈〉その応用でセシリアに話しかけているのだ。その、証拠にヴァイの額には魔力を使うときに現われる漆器の角が髪に隠れているが確かに出現している。

『！……それって良いんですか？　今から、交渉に向かうここの長も知らなければそれこそ、交渉どころじゃないんじゃ』

　セシリアはいきなり自分の頭に他人の声が響きという違和感にビックリするがすぐに順応する。

『さすがにそれは無いと思いますが。まぁ、今は相手が知らないならそれが良いかも知れませ。変に噂が広がって第一選挙のようなことがおこればそれこそ私達の目的は達成出来なくなります』

『分かりました』

　そう、第二選挙はその特殊性ゆえなかったがセシリアはいまだ危険な身である事は変わりない。事実、第一選挙でセシリアを襲った三流の襲撃者を差し向けた人物は未だ捕まっておらず。それは、戦闘面で一流であるグラの僕に手傷を負わせた者も同様だ。

　勿論、ここはセイレーンよりも警備が厳重な〈ハンドタウン〉だ。しかし、怪しい人物が完全に入れない訳では無い。現に先ほどのような不埒な輩はこの街にも存在している。

「お前らさっきから何やってるんだ」

「い、いえ」

「な、何でも無いです」

　二人は、ごまかし笑いを浮べながらそう言う。はたから見れば、いきなり二人の悪魔が見つめ合い時々顔を顰めたりしているのだ。さぞ、シュールな場面だっただろう。

「えっと、気を取り直して。そちらが、グラさん。私達の仲間です」

「よろしく」

　グラは、先ほどたたきのめした男二人の襟首を掴みながらズルズルと引きずりながらセシリア達に近づく。

「それでこれ、どうすれば良い？」

　グラは、男二人を見ながらガーナに聞く」

「ん、あー。そいつな。俺の職場に連れて行くよ。こいつらの事は私の責任だからな。あんたらも来きてくれよ。お礼もしたいしさ」

「そうしたいのは、山々なのですが、私たちはこれよりここの長に逢いに行かなければ成らないのです」

　ヴァイは、ガーナの申しれを丁重に断る。ガーナは一瞬きょとんとするがすぐに何かに気づき言う。

「あー、ジジィのことか。それならいないぜ。さっき、相棒のドラゴンに乗って山の中にお入ったから多分明日まで戻らないんじゃないのかなー」

　それを聞き、ヴァイは目を丸くし驚く。

「そ、そんな！　手紙では確かに今日伺うとかいてあったはず」

「なぁ、それいつの話だよ」

「今日の数時間前の話です。昨日のうちに手紙を書き送りましたので。そしたら、今日の朝確かに返事の手紙がきたのですが」

　ヴァイは、今回の選挙内容を知るとすぐに今回の事は決め着々と準備をしていたのだ。勿論、セシリアの部屋での作戦会議で何か良い案があれば取り入れる、もしくは同時進行で進めるつもりだったがそれでも長との交渉は決っていた。しかし、そのヴァイの作戦は今、綺麗に霧散した。

　ガーナはケラケラ笑いながら言う。

「ジジィは気まぐれだからなー。数時間前の約束なんてとうの昔に忘れてるって」

「私の知っている長はもう少し厳格な方だったはずですが」

「ジジィも歳をとったからなー。歳取って丸くなったんじゃねーの。それで、どうする？」

「はぁー。どうしますか？　セシリア嬢」

「えっ！　じゃぁ、行きます」

「だそうです。では、お言葉に甘えさせていただきます」

という事で、一行はガーナに案内される形でここを離れガーナの職場に行く。

　向かう道中。セシリアは自分の前を歩き、ガーナと話しながら歩くヴァイをジト目で睨む。

「？」

そんな、セシリアの鼓膜が突然響く。

「ふにゃ！　って、何するんですか！　グラさん！」

「元気がなかったから」

　グラは真顔でそう言う。

「えっ！　元気はありますよ」

「そう、じゃぁ何で難しい顔をしてる？」

「あっ、いえ。その……今日というかこの選挙が始まってからヴァイさんがやたら私に聞いてくると思って」

　それを聞きグラは少し考えるそぶりを見せると

「多分それは、ヴァイがお嬢様を魔王にするっていう約束を守るために方法を変えたからだと思う」

「変えた？」

「そう。お嬢様があの時魔力を使い過ぎて倒れてしまったのは自分のセシリアお嬢様の導き方がいけなかったって多分、お嬢様が思っているよりも強く思ってる」

「だから、私の対応を変えた」

「そう。守られる存在から。自分で自分を守る存在にお嬢様を導きたいんだと思う」

　それを聞き、セシリアの顔が難しく変わる。

「なんか……複雑です」

　セシリアがそうポツリと呟く。すると、前方から声が聞こえる。

「おーい！　お前ら遅いぞー！　ついたぞー！　ここが私の帰る場所〈銀の大鎚〉」

　ガーナが腕をブンブンと振りながら言う。その隣には鈍重な鈍色に輝く扉が立っていおり扉の真ん中は身の丈を超えた大槌を振り下ろす男が描かれていた。そして、そんな扉が備えつけられた工場も立派なＤ型の建物だった。

ガーナは扉に手をかける。すると、扉に施された魔術が起動。鈍重な扉が重たい音を立てて開く。

「おーい！　帰ったぞー！」

　ガーナがそう言い手を振る。工場の中は熱気に包まれておりいくつもの機械や作業台が所狭しと並んでいる。作業をしている悪魔達はギロリとガーナの方を向く。

　工場で作業をしている悪魔達は皆、筋骨隆々。その瞳は鋭い。そんな者達が一斉にセシリア達を見るのだその圧はそこらのチンピラ悪魔よりよっぽど凄みがあるだろう。

　数秒間、工場に静寂と緊張が広がる。そして

「「「お疲れ様です！　工場長――！！」」」

　工場の悪魔達が、一斉に頭を下げる。

「こ、工場長……」

　セシリアは、目を丸くしポツリと呟く。しかし、ガーナは別段そんな事気にするまでも無く平然と工場の中を歩く。

「いやぁー、暑苦しいとこで悪いなー。俺の部屋は涼しいからよ。ちょっと、我慢してくれよ。おい、サイ。こいつらの持ってるあれ、二番倉庫にいれとけ」

ガーナがそう言うと、二メートルは身長のある一つ目の悪魔が近づいてくる。〈サタン〉でも中々見ることのないサイプロプスという種族の悪魔である。名前は、サイと言うらしい。

　サイは、グラにその巨大な手を差し出す。

「お持ちします」

「よろしく」

　グラは今まで持っていた男を渡す、サイは男を二人肩に乗せるとその場を離れる。

「じゃぁ行くか」

　そう言い、セシリア達は工場の最奥に位置する階段を登る。そこにはいくつかの扉があった。ガーナは、いくつかある扉の中からは一番近くにある高級感の漂う木製の扉をを開く。

「ほい、まぁ入ってくれよ。今冷たいものでも出すからよ」

　その部屋は、下のい広がる作業スペースと打って変わりとても高級感の漂う部屋だった。地面にはワインカラーの絨毯が敷かれており一番奥にはクラシック調の机。それから順に机をはさみソファーが置かれている。

　セシリア達は、ソファーに座る。手に飲み物とグラスを持ったガーナが遅れて向かいのソファーに座る。

「飲むか？　良いシャンパンが手に入ったんだ。ビールもあるぞ」

　ガーナはそう言いセシリアにグラスを渡す。

「あっ、えっと……私お酒飲めなくて」

「え、そうなのかって普通、私ぐらいの歳の奴は飲めないんだったな。ヴァイと、グラは？」

　悪魔の中でもオーガという悪魔は酒豪で知られる種族。そう考えれば、セシリアとそう歳の変わらないガーナが飲めるのも納得がいく。

「では、一杯いただきましょう」

「貰う」

「お、いいなお前ら」

　ガーナは、そう言いグラスに酒を注ぐとヴァイとグラに差し出すと、自分はそのまま酒の入った瓶をそのまま口をつけて飲み干す。

　ヴァイとグラもグラスに注がれた酒を飲む。キリッとしたキレとほのかな果実の甘さが口の中に広がる。

　ヴァイは、グラスの酒を飲み干すとガーナに話を振る。

「しかし、ガーナさんがここの代表だとは驚きました」

「いやー、言うほどのことじゃないかなーって思って。ここの代表になったのも最近だし……それに、あんな奴らにつけ込まれるようじゃまだまだ、私はここの代表って言えないよ」

「ふむ、つかぬ事を言いますが彼らは何者なんですか？」

「ん……あーなんて言うのかな……引き抜きだよ」

　その言葉を聞きヴァイは合点がいったような顔をする。しかし、まだ良く分かっていないセシリアは首を捻る。

「引き抜き？」

　セシリアの疑問にガーナは説明する。

「あんたも、ここには色んな技術を持った職人の都市でどやって金がここに入ってくるかわ知ってるだろう」

「はい」

　セシリアは、露店でヴァイが教えてくれた事を思い出しコクリと頷く。

「けど、結局それじゃせっかく儲けてもその半分は私達の懐に入っちまう。だから、連中は職人に接触してここから出させるのさ。そんで、自分の手元で従業員として働かせるのさ。結局、儲けの半分を取られるのは外部である私達に仕事を頼むからたくなる。なら、頼む奴を自分の陣営に引き込もうってわけさ。まぁ、勿論俺も本人が出たいって言うなら止めやしないさ。こんなへんぴな所から出たいって心境も分からなくはないし。外で自分の腕を試すのだってわるいことじゃねー！　けど……あいつらのやり方は許せなかったんだ」

　そう言い、ガーナはあの男達との因縁を語る。何でも、最近になってここの代表になったということ瞬くまの他の者達に知れわたった。そしてそれを知った者の中にはガーナがまだ若いという事もありガーナや〈銀の大槌〉を軽んじる者達もいた。ガーナに折檻していた男達もそんな者達の一人だったという。

ただ、それだけではなく代表のガーナが若いという事もあり簡単、そして自分達に都合の良い条件でガーナの〈銀の大槌〉の職人を引き抜こうとしたらしい。

「しかも、引き抜こうとしたのはまだまだ未熟でそういうことになれてない若い奴らばかりだ！　あいつらは、自分達の利益しか見てねー！　私達や、私達の作った者を買ってくれる人たちの事を何も考えてねー！　あーもう！　思い出しただけで腹立つー！」

　そう言い、ガーナは手に持っていた瓶の中の酒を一気に飲むと机にたたきつける。

「うわっ！」

「あーゴメン。てな訳で……俺、頭に血が上って……一回あいつらをボコボコにして……」

「それで、次は金をせびられたり釣り合ってない条件で商談を持ちかけられたりしたと」

　ヴァイは、ツラツラと今〈銀の大槌〉で起こっている事を言い当てる。

「まぁ、だいたいそんなところ」

「昔から変わりませんね。この都市を取り巻く現状というものは」

「あ、あの私」

　セシリアが何かを言いかけた時だったストンとセシリアの腕をヴァイが掴む。それにより、言葉を紡ぐのを強制的に止める。

　しかし、そんな事を知らないガーナは明るく言い放つ。

「まぁ、気にするなや。これは、私達の……いや私の問題なんだからさ。それより、なんかお礼しなきゃだったな。せっかくだし、ウチで作ったもの中で気に入ったものをやるよ」

♢♢♢

その夜。セシリア達はガーナに言われ〈銀の大槌〉に備えつけられた客室に泊まることになった。

　ヴァイは、机で書き物をする。内容は、今回の選挙で勝つ為のシナリオである。

「ふむ。まだ、不確定要素が多すぎますね。知名度、カリスマ性どれをとってもまだまだジェルミン様のほうが上手……やはり、戦と選挙は違いますね」

　ヴァイはポツリと愚痴をこぼす。

　と、その時自分に貸し与えられている部屋をノックする音が聞こえる。

「はい、どなたですか？」

　ヴァイが、そう言い扉を開けるとそこには寝間着に着替えたセシリアがいた。

「おや？　どうしたんですか？　セシリア嬢」

「あ、いえ……その聞きたい事がありまして」

　セシリアは、しどろもどろに聞く。

「とりあえず部屋に入りましょうか」

　ヴァイは、セシリアにそう言い部屋に招き入れると、ベッドに座らせる。

「それで、セシリア嬢？　お話とは？」

「あ、えっと」

　セシリアは、ヴァイの言葉に慌て上手く言葉を返せない。

(わ、私、どどどうしてこんな夜遅くに男の部屋に入っているのでしょうかー)

セシリアは、与えられた客室で明日に備え早く寝ようとベッドに入り込んだのは良いがヴァイの最後の行動。自分の発言を止めるという行動にセシリアはどうしても、違和感を持って仕方が無かった。

　故に、セシリアは衝動的にヴァイの部屋に来た……のは良いが冷静になると夜遅くに男の部屋にアポも無く来る淫らな女なのでは無いのかと思い、そう思うと途端に恥ずかしくなりこうやって固まってしまったのである。

「セシリア嬢、セシリア嬢……仕方ないですね」

　ヴァイはセシリアの額に手をかざす。そして、自らの魔力を解放させる。その瞬間、ヴァイの額に漆黒の角が伸びる。

「ふむ、なるほど。何故、セシリア嬢の言葉を私が遮ったか、それが気になって眠れずここまで来たと」

「ひゃ！　かっての私の頭を除かないでください！」

　そう言い、セシリアは頭を抱える。

「おっと、失礼。このままでは拉致があかないと思いまして。少々強引に聞き出してしまいました。それで、セシリア嬢の言葉を遮るという出過ぎたマネをした事による謝罪を要求しにきたと。確かに、出過ぎたマネだったかも知れません」

　ヴァイは頭を下げようとするがそれをヴァイは止める。

「ちょ、ちょっと待ってください！　別に私ヴァイさんを怒っているわけじゃ無いんです！　ヴァイさんの行動には何か意味があるって私信じてますから！」

　セシリアは、ヴァイの手を掴みぐいっと顔を近づける。

「ッ！　セシリア嬢。少し落ち着いてください」

「あっ！　すいません」

　セシリアはおずおずと引き下がるウ。

「流石に私の行動全てに理由を求められても困ります。ただ、確かにあのときセシリア嬢の言葉を遮った事には意味はあります。セシリア嬢、貴方はガーナさんの事情を知ってどう思いました？」

「えっ……えっと、大変そうで力になれたらな……と」

　それを聞きヴァイはフッと微笑を浮べる。

「やはり、セシリア嬢は優しいですね。しかし、その考えを好意と受け取らない者もいます」

「えっ⁉」

「それを、自分達が舐めていると捉える者もいます。ガーナさんのようなタイプは特に」

「そんな事はありません」

　セシリアは行きよい良くベッドから立ち上がり体全てを使って否定する。ヴァイは、なだめる。

「えぇ。分かっていますよ。セシリア嬢がそうでは無い事は。ただ、それを素直に受けとめられないという事です。特にガーナさんのように自分の未熟さを理解し自分の未熟さが今の現状の原因だと思っている人にはね。そんな、精神状態では好意の言葉も当てつけのように聞こえてしまうものです」

　ガーナが未熟さを理解している事は、セシリア達の対応からも分かることだろう。自分を助けた見ず知らずの恩人に酒を振る舞い、自分の職場の部屋を貸し与え、自分の商品をただでやるというのはどこか過剰だ。

　ヴァイはその過剰な対応がガーナの未熟な自分の失態を自分自身で取り戻すように躍起になっているように見えそこからガーナの考えを精神状態を予想しただけである。

「でも……」

　セシリアは、ヴァイの言葉を理解する、しかし、それでも納得は出来ないのだろう。セシリアの性格上、助けを求めていないから不幸の奴を見て見ぬふりをしても良いと割り切れる訳では無い。

　そんなことはヴァイも百も承知だ。故に、その気持ちを違う方向に向けさせる言葉を放つ。

「セシリア嬢。ただ手を差し伸べるだけが助けるではないのです。ただ、求めている物を与えるのが優しさではないのです。時に一緒になって同じ事を考える事もまた、助けることなのですよ。それは、セシリア嬢も知っていることのはずです」

　そう言われセシリアの頭に流れるのはいきなり重たい責任を背負わされ押し潰れそうになったヴァイに会った直後の自分の姿。

　そして、そんな自分を助けてくれたヴァイの姿。

「そうですね！　ありがとうございます！　いつも、ヴァイさんには頼ってばかりですね」

「頼っていただかないと困ります。私は、貴方の軍師であり僕。知恵を貸し、力を貸し、貴方の盾になるのが仕事なのですか。どんどん、頼っていただいてけっこうなのですよ」

「分かりました」

そう言いセシリアはベッドから立ち上がるとヴァイの部屋を後にする。

「少し、ガーナさんの所に行ってきます！」

「明日は長との交渉なので寝坊には気をつけてくださいね」

ヴァイはそう言い自分の部屋をでていくセシリアを見守る。

「さて」

ヴァイは机に再度向かうとまたもやドアがノックする。ヴァイは小首をかしげる。先ほどセシリアは出たばかり。

「セシリア嬢。忘れ物でもしましたか？」

　ヴァイは、扉を開けようとするが今回の来客はそこまで行儀良くは無かった。ヴァイが扉を開けるよりも前に扉を勢いよく開ける。

「ヴァイいる？」

　その来客はまさかのグラだった。

「グラさん。今日は、来客が多い夜ですね」

「お嬢様が来てた？」

「えぇ、私がセシリア嬢の行動を制止させた理由を聞きに。そちらは？　こんな夜遅くに私の部屋に来てどうしたんですか？」

「ビラ配りをしてきた僕から報告が来た。あらかた、ビラは配り終えた。次は何をすれば良いかとのこと」

「流石ですね。それでは、次は遠方から今回の選挙に来たいと思う人たちに移動手段のチケットを配ってください。せっかく来たい思っても足が無ければしかたがありませんので。チケットは私の僕がゲットしているはずです」

　そう言い、懐からチケットを取り出す。

「それって賄賂」

「別に、セシリア嬢の握手会に来てくれ人限定ではありません。私は、当日に行なわれる魔王選挙を近くで見たいと思う人全員にと言ったのです」

　勿論、ヴァイの言っていることは詭弁である。しかし、賄賂と言われれば完全に肯定も出来ない。賄賂とは自分の有利に事が運ぶ為に不特定多数の者達に贈呈することだ。しかし、ヴァイがやろうとすることは必ずしもセシリアにプラス働くとは限らない。相手のジェルミンの握手会の参加する者もいれば当日に開催される残り二つの選挙を見る者もいるだろう。

つまり、ヴァイのやっていることはグレーではあるが決してルールから外れてはいないのだ。どころか、一歩間違えれば敵に塩を送る行為に等しいと言えるだろう。

「わかった。部下に説明してやらせておく。けど、どうしてこんなにチケットが集まった？」

「なに、少し交渉をしただけですよ。少々弱みにつけこませてはあ貰いましたが」

　そう言い、ニヤリとヴァイは笑う。

「ペテン師」

「これも、勝つためです」

「分かった。ねぇ、お嬢様の魔力って解放されたと思う」

　グラは、部屋から出る前に再度ヴァイに向き直る。

　ヴァイはグラの質問にすぐには答えない。

「半分といったところでしょう。ただ近いうちに必ず完全に覚醒するには必定でしょう。なぜなら、これからもセシリア嬢は選挙に勝ち続け僕を獲得していくのですから」

　悪魔は生まれた瞬間に特殊な力〈魔力〉をやどす。しかし〈魔力〉は、持っているだけでは意味が無く自らの〈魔力〉が発現するのに必要な僕の数を集めて初めて発現する。

　セシリアが、最初の頃やヴァイやグラの僕と契約しても〈魔力〉が使えなかったのは僕の数が単純に足りなかったからだろう。

しかし、第二選挙ではタルタロス幹部と同程度の僕を獲得した事、そしてヴァイが重傷を追ったという現実に対する絶望。この二つの事がセシリアの内に眠る〈魔力〉が解放された。

「でも、お嬢様はまだ〈魔力〉の扱いが未熟。このまま〈魔力〉が覚醒してもまたあの時の二の舞になる」

　第二選挙でセシリアが引き起こした大破壊。あれは、セシリア本来の魔力では無く初めて発現して〈魔力〉をセシリアが上手く扱えなかった事による暴走に近い。グラは、このまま〈魔力〉が完全に発現してもそれを扱う技術が未熟では第二選挙の二の舞。否、それ以上の被害が出す事を懸念しているのだ。

「仕方ありません。だからといって、私達にセシリア嬢の成長を止める術も権限もないのです。それに、未熟なら上達させれば良いだけです。それが、我々の仕事だと思いませんか？」

「……そうだね」

　グラは、一瞬表情を曇らせるが、それをヴァイは見逃してしまう。次の瞬間、グラはこちらに何か光物が近づいてくる事に気づく。

「ッ！　ヴァイ危ない！」

グラは、その瞬間地面をけりヴァイを押し倒す。その為必然的におヴァイの上にグラが覆う体制になる。

「グラさん、これは⁉」

　突然の事に慌てるヴァイ。その瞬間、窓が割れ一本の矢が部屋に入ってくる。その矢には一枚の札がくくりつけられている。その札には魔術が刻印されており激しく光るとその瞬間札から螺旋状に炎が現われヴァイと、グラを巻き込み当りを燃やし尽くす。

♢♢♢

「ガーナさんお話しませんか！」

　ガーナが、日課の事務仕事をしていると扉が勢いよく開かれる。

「おわ！　どうしだよ！　こんな夜遅くに！　セシリア」

　セシリアのいきなりの来訪にガーナは驚く。

「とりあえず、部屋入れよ」

　ガーナはいまだ困惑しながらも部屋にセシリアを招き入れる。セシリアをベッドに座らせ自分もその隣の座る。

「そんで俺と話しがしたいってなんだよ？　悪いけど俺、恋バナとかできねーぜ」

「いえ、そうじゃないんです。ただ、何か悩んでいる事があるなら何かしたくて。私一人じゃ実質的に何か出来るかは分かりませんけど、一緒に悩む事ぐらいは出来ると思うので」

「気持ちはありがたいけどさ。アンタじゃ俺の悩みは分からねーよ」

　ガーナはフッと寂しく笑う。そんなガーナの手をセシリアはぎゅっと優しく握る。

「分かります！　いきなり自分に重大な責任が伴う地位に就いて、色んな人の期待に答えたい気持ちとか、でも自分なんかが本当に出来るのかっていう不安とか！　全部分かります！　私も同じなので」

「同じ？」

　ガーナは、小首をかしげる。そんな、ガーナにセシリアは自分の事を説明する。

「私はセシリア・サタン。この魔界を統一したビブリオ・サタンの実の娘です。そして、今は魔王選挙に出馬している者です」

　そこから、セシリアはここまでの道筋をざっくり説明する。自分はずっと引きこもりだった事。そんな、ある日父親が死にその直近の部下であるヴァイとグラに魔王になって欲しいといわれ、過度な期待をされた事。それを、我が身かわいさに拒絶してしまったことまで。

　その、全てがガーナ自身に当てはまることわけではなかったがそれでも、どこか境遇の似てるセシリアの話のガーナは聞かずにはいられなかった。

「そうか……お前も苦労してるんだな。って、お姫様にお前は無いか」

「いえ、気にしないでください。今はお姫様なんかじゃ無いですし」

「けど、以外だな。アンタがそこまで波瀾万丈なことしてるなんてよ。はっきりいって猛者じゃねーか」

「猛者なんて。私はいつもヴァイさん達に助けらればかりですし」

「いいな、アタシもそんな奴がいたら良いんだけど」

「いるじゃないですか」

「？　どこにだよ」

「ここにです。ここで働いてる、職人さん達です」

　そんなセシリアの言葉にガーナは一瞬目を丸くするが、すぐに首と手首をブンブンと振りセシリアの言葉を否定する。

「無理無理！　あいつらになんて頼れねーよ。俺は、名ばかりでも一応あいつらの上司だ！　それに、今までだって俺を助けてはくれなかったし。きっと、未熟な俺を誰も認めてないんだ」

「認められて未熟じゃないから誰も助けてくれないじゃないんですか」

　その自分の予想をしていなかったセシリアの言葉にガーナはきょとんとする。

「認められてる……俺が」

「そうですよ。きっとそうです！　だって、そうじゃなきゃガーナさんが帰ってきたときあんなに挨拶をしてくれる人はいませんよ」

「俺が、認められてる……ハハハ、そんなこと一度も考えたことが無かったや。けど……そうだったら良いな」

　その時ガーナの部屋に一本の矢が飛んでくる。

「ッ！」

「なっ！」

　幸いにも矢はセシリアにもガーナにの当たらなかったがその矢にくくりつけられた札から螺旋状に炎が出現し当りを焼き尽くす。

「ちっ！」

　ガーナは、すぐ近くに置いてある自分の大槌を手に取る。

「セシリア！　どいて」

　ガーナはセシリアの前に出ると大槌に魔力を流す。

「くらえー！」

大槌を勢いよく地面にたたきつける。部屋の床に、クレータが出来き同時に周りに揺らめく炎が全て純度の高い魔鋼に変わる。

「ふぅー、なんとか成った」

「凄い、これがガーナさんの〈魔力〉」

「おう、これが俺の魔力〈〉自分の魔力を流した物を魔鋼に変える能力。まぁ、といっても天然の魔鋼には全然劣るんだけどな」

　と、その時今度は三つの矢が飛んでくる。その矢も全て札がくくりつけられておりすぐに炎が出現する。

　矢の量が単純に増えたぶん火の周りが早い。

「くそっ！」

　ガーナは、再度炎を鉄に変えるがそれよりも早く炎は他の物に燃え写りガーナとセシリアを追い込んでいく。

　セシリアは、こんな危機的な状況でもなにも出来ない自分に歯がゆい思いをする。そして、その精神の不安定差がセリアの内に眠る〈魔力〉を覚醒させる……ことは無かった。なぜならガーナの自室の窓を破壊し

「セシリア嬢！　ガーナさん！　こちらに！」

というヴァイの声が聞こえたからだ。

「ヴァイさん！」

その思いもよいらない登場にセシリアは驚愕の声をだす。

「どうして、ここに！」

「説明は後です」

　ヴァイはそういうと、セシリアとガーナを抱え込む。

「あの、ヴァイさん！」

「少し手荒な事をしますよ」

　そう言うと、セシリアとガーナを窓から突き落とす。

「えっ⁉　えーーー！！」

　セシリアは恐怖からくる声を叫ぶ。セシリアは本能的に目を閉じ来るであろう痛み耐える為に歯を食いしばる。しかし、来たのは自分の体を包みこむ感触だった。

　セシリアはゆっくりと目を開けると、見ると自分を覗き込むように見る者達がいた。セシリアはその顔に見覚えがあった。ガーナの〈銀の大槌〉で働くまつろわぬ民達の職人達である。

「嬢ちゃん、怪我はねーか」

髭を携えた職人の一人がセシリアに向かって聞く。

「あ、はい」

セシリアは徐にそう答えると髭を蓄えた職人はニカリと笑う。

「そうか、ならちとどいてくれ。まだ来るからな」

　そう言い、セシリアの腕を掴むとひょいと持ち上げと自分をくるんでいる物から出す。

「おーい！　兄ちゃん！　もう良いぞ！」

　職人がそう言うとガーナの自室から何の躊躇も無くヴァイが飛び出す。ヴァイは、数秒して職人達がピンと張った布に落ちる。

　そこで、セシリアは自分がどうやって助かったかを理解する。その後、ヴァイの部屋からグラが脱出し綺麗に地面に着地する。

「お怪我はありませんか？」

「はい、なんとか」

「それは、

ヴァイはセシリアの元に駆けつける。そして、怪我をしていないことを聞くとホッと胸をなで下ろす。

　程なくして、〈銀の大鎚〉に沢山の野次馬と消化隊が現われる。

「クソッ！　どうしてこんなことに！　ちゃんと火は消したはずなのに！」

「くそ、事故なんて」

　職人達が輪になり自分達のミスを悔やむ中にヴァイが言う。

「いえいえ、これは事故ではありませんよ。ねぇ、セシリア嬢」

「は、はい。見ました。矢がいきなり振ってきてその矢から炎がでるところ」

「そりゃ、マジかよ」

「くそっ、どこの奴らだ！」

「そう来ると、思いましてこちらにその矢が」

　そう言い、ヴァイは懐から矢を取り出す。

「おわ！　ってなんでお前がもってるんだよ！」

「炎が出て燃えつきる前に取ってきました。一流の鍛冶職人である貴方達なら何か分かるのでは無いですか？」

　そう言い、ヴァイは〈銀の大槌〉の職人達の前にそれを突き出す。

「こりゃー多分ウチで作ったものだ」

「あー間違いねー。確か武器を下ろすなんとかっていう商会の納品リストに確か鏃が入ってたはずだ」

「ふむ商会ですか。ガーナさん。貴方がもめた商会の名前は覚えていますか？　それと、ここに軟禁している貴方を折檻してきた男二人が今ここにいるかの確認を」

　その、ヴァイの言葉の真意はここにいる者達全員が今回の放火は全て〈銀の大槌〉の職人を引き抜く事が出来なかったガーナと揉めていた商会が事故に見せかけていやったことだという事を理解した。

「みんなゴメン。全部、俺のせいだ。私が、ふがいないばかりにこんな事に」

　ガーナは涙を浮べながらそう言う。一瞬、静寂に包まれたあと〈銀の大鎚〉の職人の一人サイが言う。

「何言ってるんですか？　工場長のせいじゃ無いですよ」

　その言葉を皮切りに他の職人達も口々に言う。

「あー！　工場長のせいじゃねーよ！」

「どころか、工場長はいつも俺らの事を守ってくれた！」

「お前ら、俺を攻めないのかよ。俺が、もっとあいつらと穏便にしてたらこんなことには成らなかったのに」

　そんなガーナの言葉に〈銀の大槌〉達はゲラゲラ笑う。

「穏便に済ませるって何言ってるんですか！　悪いのはあいつらのほうじゃねーか！」

「あーそれをバシッと悪いっていったんだ。それでこそ、俺たちの工場長！　まつろわぬ民ってもんだ！」

　それを聞き、ガーナを我慢していた涙をポロポロと流す。そんな、ガーナにセシリアは優しく言う。

「やっぱり、ガーナさんは認められているんじゃないですか」

「あーそうみてーだ」

　ガーナは、涙を拭うとニカリと笑う。

「よし、お前ら！　俺たちにこんなことをした奴らに目に物みせてやろうーぜ！」

「「「「「おぉーーーー！！」」」」

　ガーナの言葉に〈銀の大鎚〉の職人達は雄叫びを上げる。

「さて、セシリア嬢。彼らは今回の首謀者を見つけるようですが私達はどうしましょうか？」

「決ってます。私達も協力します！」

　セシリアは、真っ直ぐ凜々しい顔でヴァイに言う。

「分かりました」

「ん、待て待て！　お前らにこれ以上、頼る訳にはよぉ」

「いかないなんて、言わないで下さい。私達もうそんなに浅い関係じゃ無いと思います。それに、私だって許せないんです。ガーナさんの大事な所を燃やそうとした人たちを」

　その瞳は真剣園もだった。その表情にガーナは折れるしかなかった。

「分かった！　頼むぜ！」

　そう言い、セシリアにガーナは拳を突きつける。

「はい！」

　ガーナの拳にセシリアは拳を突きつける。

「では、話も纏まったところで皆さんを三班に分けます。まず、一班は首謀者達がこの都市から逃げないように監視を。他の方々は私について来て下さい。グラさん、こちらに」

　ヴァイは、グラの頭に手をかざす。次の瞬間、グラの頭にいくつかの場所が思い浮かぶ。

「これは……」

「私達の部屋を狙撃した者の狙撃ポイントのリストです。恐らくそこのどこかにいると思います。捕まえることはできますか？」

「分かった……けど、これ」

　そう言い、グラはポケットから刀身が溶けたナイフを取り出す。グラが持っているナイフはヴァイが上げた刃引きしたいわばおもちゃのナイフだ。そんな、ナイフが超一流のグラの〈魔力〉に耐えれる訳がない。

「なんだ、嬢ちゃん自分の得物が無くなって困ってるのか。だったら、これ使えよ」

　そう言い〈銀の大鎚〉の職人の一人が一本のナイフを取り出す。

「これ良いの？」

「いいんだよ。納品すやつだがそれはまた作れば良い。そのかわり、俺たちをこんな目に遭わせた奴の落とし前は頼んだぜ」

「分かった」

「では、準備も整ったところで参りましょう」

　ヴァイの言葉を合図にそれぞれが、それぞれの所に向かう。

　ヴァイとセシリア、ガーナは暗い夜道を走る。

「お、おい！　あいつらの根城はそっちじゃねーぞ」

　ガーナの言葉にヴァイは足を止めること無く言う。

「いえ、そちらにはいないでしょう」

「なんで、分かるんだ？」

「そちらは、風下だからです。火を使う計画を立てている以上。自分は燃えない位置にいるのは鉄則」

「じゃー、どこにいるんだよ」

「さぁ、ただし見分けるのは簡単です」

「マジか！」

「こんな火事が起きているにも関わらず、見物をするでもなく逃げるのでもなく風下とは逆に位置する建物で悠々とすごしている者です」

　そう言いヴァイはその場に止まる。ヴァイの目の前にはここら辺ではかなりグレードの高い宿屋だった。

「ここに、そんな奴がいるのか？」

「えぇ。恐らく」

　そう言い、ヴァイを筆頭にセシリア達はその宿屋に向かう。

「いらっしゃい」

「店主。ここに、三日間いないで部屋を借りている人はいますか？　できれば、あちらの景色が見える部屋といった人なら尚良いのですが」

「そりゃ、いるにはいるがー」  
　店主は怪訝そうな顔をする。  
「できれば、教えて欲しいのですが」  
「兄ちゃんがどうしてそんな事を聞くのか俺は別に関係ないが。悪いことは言わねー。やめときな」  
「なるほど、つまりいるのですね。この立物だと二階。部屋の番号は教えていただかなくとも結構です。どうやら、部屋の前には守り手がいると見ました」  
「なっ？！」  
　ヴィイの言ったことは全て合っている。ここ最近、いきなり大金を積んでこの宿の部屋を借りている者が一人いる。  
　しかも、奇妙なことに今日借りたのに明日には出て行き、部屋の前には自分の私兵に見張りをしている。  
「さっ、行きましょう」  
　ヴァイの言葉に皆は二階の階段を上がりながら言う。  
「そういえば皆さん、腕には自信がありますか？」  
「たりめーだろ！」  
「おう！　ここには自警団も警邏隊も無いからな自衛する。それが俺ら、まつろわぬ民のやり方だ」  
「それは、良かった。なにぶん、私はひ弱でしてね」  
　そう言っていると、階段に登りきる。目の前には綺麗に掃除された廊下が広がる。  
　そのちょうど真ん中に部屋の扉の前に二人の悪魔が立っている。  
　部屋を警備している二人の悪魔がヴァイ達に気づく。  
「な、なんだ！　お前ら！」  
　二人の悪魔達が戦闘態勢に入る。  
「みなさん。あそこにいるのが、貴方達の工場を燃やした犯人の手先です」  
「あれが」  
「俺たちの工場を燃やした奴ら」  
　ガーナ達まつろわぬ民達の顔に怒りの表情が滲み出る。  
「では、あの扉の二人はお任せします」  
「おう！」  
「まかせとけ！」  
　そう言い、まつろわぬ民達は勢いよく飛び出すと警備をしていた悪魔二人を襲う。  
「な、なんだ！」  
「この！」  
　まつろわぬ民達は確かに自らで言うだけありかなり強い。そして、あっという間に二人を地面に伏せさした。  
　と、そこで勢いよく扉が開く。  
「おいこら！　騒がしぞ！　せっかくの、花火に彩られた夜景が台無しじゃないか！」  
ギロリと、まつろわぬ民達が部屋から出てきた男を睨む。  
　男も、まつろわぬ民達の一人ガーナと目が合いすぐに表情を怒りから恐怖へと変わる。そして、すぐに扉を閉めようとするが閉まる瞬間扉の間にヴァイが足を滑り込ませそれを阻止。  
　それでも、犯人は扉を閉めようと引っ張る。それに対抗するように逆にまつろわぬ民達が自分達のほつに引っ張る。結果、扉と壁を接合する金具が破壊される。  
　男は、急いで部屋の奥にヴァイ達はゆっくりと部屋に入る。  
「ま、待て！　な、なんなんだ！　お前らは！　お前は、俺を誰だと思ってる！」  
「あー、知ってるぜ！　お前が、俺の大事な部下の引き抜きが失敗した腹いせに〈銀の大槌〉に火をつける最低野郎ってことわなー！　グザエリ商会の会長！　グザエリさんよぉー！」  
　ガーナは、まさに鬼の形相で男を詰め寄りながら言う。男は、壁まで追い詰められた最後にはズルズルと腰を下ろす。  
「ま、待ってくれ！　し、証拠！　証拠がない！  
俺が、お前ら工場を燃やしたって言う証拠が！  
事実俺はずっとここにいたんだ！　俺に、あんたらの工場を燃やすことなんて」  
　そこで勢いよく、今回の犯人グザエリの止まっている部屋の窓が勢いよく割れ一人の人物が現れる。  
　グラである。手には、ボーガンを持った男の首根っこを捕まえている。  
「遅かったですね」  
「おや、グラさん。そちらのかたは？」  
「火をつけた奴。全部自分で吐いた」  
　それを聞き、みなグザエリの方を向く。グザエリはいよいよ後がなくなり顔中に脂汗かく。  
「い、いや。あの、それで」  
　ガーナは、ポキポキと拳を鳴らす。そして、その拳を硬く固める。  
「これで、言い逃れはできませんね」  
　ヴァイはポツリとそう言う。ガーナは、グザエリの襟首を掴むと無理やり立たせる。そして、その固めた拳を勢いよく、グザエリの顔面にめり込ませる。  
「ぐばぁ！」  
　グザエリは、そう言うと殴られた衝撃で窓が割れ二階から落っこちる。  
「だ、大丈夫でしょうか？」  
「まぁ、大丈夫でしょう」  
　セシリアの何気ない質問にヴァイは平然と答える。  
　ガーナは、ふぅーと息を吐くとスッキリしたような表情でセシリア達の方に向かう。  
 〈銀の大槌〉の職人らはガーナのその行動にヒューと歓声を上げる。  
「なんか、すまなかったな。こんな変なゴタゴタに巻き込んじまって。セシリア、ヴァイ」  
「いえ。そんな、勝手に首を突っ込んだのは私達ですので」  
「いや、それでもありがとう」  
　そう言い、ガーナはセシリアの手を取りそういう。  
　そんな、セシリアとガーナの間にヴァイが割って入る。  
「そういえば、まだ私たちはお礼を貰ってませんでしたね」  
「えっ！　ヴァイさん！」  
　ヴァイのいきなりの発言にセシリアは驚き言う。  
「あ、そういえばそうだったな。けど、工場はもう」  
　そうヴァイ達に渡すお礼の品、どころか商品を作る工場が既に焼けている。流石に全勝ではないだろうが、それでもこれから大変なのは間違いないだろう。  
　そんな状況でガーナに謝礼をせびるなどセシリアからしたらヴァイらしく無かった。  
「いえいえ謝礼は別にものでなくていいのです。実は……」  
　そういい、ガーナの耳元にヴァイ言う。ガーナは一瞬目を丸くするがすぐに  
「分かった！　そんなことでいいならお安い誤用だぜ！」  
　と、言う。そこでドタドタと足音がこちらに向かってくる。その足音は今ヴァイ達がいるところで止まる。その足音の主はこの宿屋の亭主だった。亭主は、この部屋の惨状を見るとすぐにヴァイ達に怒鳴りかかる。  
「お前ら！　何してやがる！」  
　その言葉でヴァイ達は自分の身の回りを見る。廊下には戦闘でボロボロになった壁、部屋は窓ガラスが二枚割れている。  
　確かに、これは怒鳴られても仕方のない惨状と言えるだろう。  
「「「「ごめんない」」」」」  
　ここにいる者の殆どがすぐに頭を下げるのだった。  
  
　　　　　　　　　　♢♢♢  
  
「ふぅー」  
　セシリアは、緊張から来る熱さをさまそうとふぅーと息を吐く。  
　ここは、〈ハンドタウン〉中央に存在する屋敷。そこには、古来からまつろわぬ民達をまとめ上げたダイズーンの一族が住んでいる。  
　そして、その屋敷の謁見の間に今セシリア達はいる。  
　謁見の間は、部屋の真ん中に向かい合うようにソファーがありその中に机が置かれている。そして、壁にずらりとまつろわぬ民達が作ったであろう武器が所狭しと並んでいる。  
「き、来ませんね」  
「もうすぐです。少し、落ち着いてはいかがですか？」  
　流石に、こう言う場に慣れているヴァイとグラはリラックスし優雅に紅茶を飲んでいる。  
　セシリアも、ヴァイの真似をし紅茶を飲むが緊張のあまり全く味がしない。  
　と、そこで重々しく扉が開く。その瞬間、ヴァイ、グラ、セシリアはその場に立つ。  
　そして、この部屋に現れたは大柄な男性だった。種族は、ガーナと同じくオーガだろう。身長は、二メートルはあろうとかという長身。その顔には、深い皺が刻まれ髪は白く染まっているが目は鋭くどこか歴戦の猛者を思わせる。  
「これは、これはお久しぶりですねまつろわぬ民の長。グーラ殿」  
「わざわざ、かしこらんでも良い。別に、初めてでもないだろう」  
　そう言い、グーラはドカッとソファーに座るとそこに置いてあった紅茶のポットをカップに注ぐことはなくそのままグビグビと飲む。  
「それで、俺に用ってのは何だ？　俺も暇じゃないんだ。手短に頼むぞ」  
「そうですね。グーラ殿。我が魔王が死に魔王選挙が行われていることはご存知でしょうか？」  
「あぁー、知っているとも」  
　グーラは、一瞬暗い顔をする。場が一瞬暗くなる。が、すぐにその空気はは変わる。  
「ならば、話は早いですね。セシリア嬢。ここからは」  
「はい」  
　そう言い、セシリアは緊張した面持ちでコクリと頷く。  
「お前は？」  
「わ、私はセシリア・サタン。前魔王、ビブリオ・サタンの娘です。それで、お願いします！　私に協力して下さい！」  
　そう言い、セシリアは額に机を当てながら言う。  
「……なるほど。だいたい、分かった」  
　グーラは、セシリアから今の状況を聞き理解する。  
「確かに、ビブリオには色々と世話になった。その恩返しにその娘に手を貸すのもわるくはない」  
「そ、それじゃぁ」  
「だが、ダメだ。我々、まつろわぬ民は今まであらゆる権力に屈してこなかった。それが、我々の誇りなのだ。そんな、我々がポット出の娘一人が謁見してハイそうです。なんて、言えるわけがない事は分かっているだろうな」  
「それは、分かっています」  
「それに、実際問題。セシリアちゃんに手を貸した事が分かれば我々の今までの平穏は崩れるさる」  
　まつろわぬ民達が今まで自治を認められたのは、まつろわぬ民達が作った製品の恩恵が得られなくなる可能性があることも一つあるが、もう一つある。  
　それは、太古の昔から何処にも所属しないというスタンスにあった。敵でも味方でも無い常に中立。それは、時に裏ぎるかもしれない見方よりも安心できる存在だ。  
　そんな、まつろわぬ民が一個人の存在に迎合したのなればたちまち他の悪魔に知れ渡り、他の者達特に魔王選挙で上位にいる悪魔達からの非難は免れないだろう。  
　それは、つまりこの〈ハンドタウン〉の平穏を崩すことに他ならない  
「セシリアちゃんは、そこをどう考えているのかのぉ」  
　セシリアは、深く息を吸い吐く。そして、ポツリと言う。  
「……もし、もし私が魔王になってここの自治を認め平穏を守るといったらどうですか？」  
「ッ？！」  
　その、およそ自分の半分も生きていない小娘が発するといっていない言葉の数々にグーラは多少驚く。  
「私の求める魔界は魔王のいない魔界です。それは、誰もが自らの道を進める魔界。生きていく上で主人と僕の契約を契らざるを得ない事が無い魔界。誰もが自由に過ごせる魔界です。つまり、まつろわぬ民達が今のタルタロスに支配される事が異常じゃない魔界。私がそれを作ります」  
　セシリアの求めるマニフェストは、グーラの考えの斜め上を言っていた。  
　グーラはニヤリと凶暴に笑う。  
「血は争えないのぉー。お主の父、ビブリオも似たような事をワシに言った。今のバラバラの魔界を統一する。その時、自分は魔界の王になる。その暁には、ここの自治権を認める。だから、力を貸せとな」  
　グーラは、少し懐かしむように言う。  
「その時もワシは今のように胸が高鳴ったよ。だがなワシはつっぱねた。何故か分かるか？　根拠が無かったからだ。当時、ビブリオは手酷い失敗をしてのぉー。そんな奴をワシは信じられ無かった。そして、ワシは同じ事を言う。根拠が無い。故にワシら、まつろわぬ民達はセシリアちゃんと　に協力できない」  
　セシリアは、グゥの根も出なかった。事実、セシリアを信じ切れる要素は何もない。確かに、順位も上がったがそれでも下から数える方が明らかに早い。そんな、セシリアが今の魔界を根本的にひっくり返すようなマニフェストを掲げようがそんなものは夢でしか無い。  
　セシリアは、ゆっくり顔を下ろす。その時、謁見の間扉が勢いよく開かれる。  
「根拠ならあるぜ！　ジジィー！」  
　その声は、最近良く聞いた声だった。顔を上げると、そこにはガーナがいた。  
「が、ガーナ」  
「ガーナちゃん！」  
　セシリアは驚き声を上げるがしかし、それよりも早くグーラがガーナの声を上げる。しかも、明らかにセシリアよりも驚いた様子である。  
「おう、セシリア！　っと、おい！　ジジィ！  
何俺の友達イジメてんだよ！」  
「と、友達！」  
「おう！　昨日、話しただろう。俺に色々してくれた恩人で友達が出来たって！　それがセシリア達だよ！」  
「え～」  
グーラは、あまりの事に驚きの声を上げるしか出来ない。  
「じゃ、じゃぁ昨日ガーナちゃんを助けてくれたのってセシリアちゃん！」  
「そうだよ！」  
グーラは、ガーナにここまで言われても未だ信じられない。それも、そうだろう。あまりにも出来過ぎている。  
　と、そこでグーラは気づく。ヴァイが口元に若干の微笑を浮かべている事に。グーラはやられたと思った。だが、湧き上がってくる気持ちは怒りよりも清々しさだった。  
「セシリアちゃん。ガーナちゃんから聞いたよ。昨日、ガーナちゃんの悩みを色々解決してくれたんだってねぇ。改めて、祖父として礼を言う。ありがとう」  
「あ、はい……えっ、祖父……」  
　そこでセシリアはバッとガーナをみる。ガーナはキョトンとした風に言う。  
「あれっ？　言ってなかったけ？　俺、ガーナ・ダイズーン。ジジィは俺のジジィ何だよ」  
「えっ、えーー！！！」  
　セシリアの驚きの声が謁見の間に響く。  
「ふむ、まぁ真実もわかった所で。どうです。グーラ殿。これでもまだ、セシリア嬢を信じる根拠が無いとおっしゃいますか？」  
「はぁー……分かった、信じよう。今回の選挙、我々まつろわぬ民達も出来る限り強力しよう」  
　その言葉を聞いた瞬間、セシリアの前身に鳥肌が立つ。ガーナがビッと親指を立てニカリと笑う。  
ヴァイとグラもコクリと頷く。  
「ありがとうございます！」  
　セシリアは再度頭を下げるた。  
  
　　　　　　　　　　♢♢♢  
  
帰りの馬車の中。帰り道の景色を見ていたセシリアは目の前のヴァイに言う。  
「あの、ヴァイさんはガーナさんがお孫さんって分かってたんですか？」  
　その言葉にヴァイは目を落としていた書類から顔を上げる。  
「えぇ、まぁ。最初にグーラ殿を呼ぶ時あまりにも馴れ馴れしくかったので。もしやと思いまして。それに、オーガという種族はあの〈ハンドタウン〉では長の一族ぐらいですからね。まぁ、将を射んと欲すればまず馬を射よという先人の教えを実行したまでですよ」  
「結局、私は何も出来なかったんですね」  
「そう、謙遜する事でも無いですよ。ガーナさんの信頼を勝ち取ったのは紛れもないセシリア嬢のお陰です。それは、そのペンダントからも分かる事です」  
　そう言い、セシリアの首に下げている物をさす。それは、セシリアが〈ハンドタウン〉に出る時ガーナに貰ったものだ。  
「……そうですね！」  
「えぇー。それに、今回の選挙最後の最後に物を言うのはセシリア嬢、貴方の魅力です。それをお忘れなく」  
「はい！」  
　  
　　　　　　　　　　♢♢♢  
  
　どんな、悪魔も眠る程世がふけたころ。部屋には一人の悪魔と〈魔啼鴉〉がいる。  
　〈魔啼鴉〉からは男とも女とも取れる美しい声が聞こえる。  
「えぇ。ですので、お願いします」  
『本当にいいの？　貴方のあの娘に対する忠誠心ってその程度だったの？』  
「出来れば、勝ちたいですよ。しかし、もしもの時は……お願いします」  
　そこで、通話が切れる。  
「今回の選挙はセシリア嬢の負けですね」  
  
  
　　　　　　　　　　♢♢♢  
  
時間は早朝。ここは、魔界の都市〈サタン〉その中央に存在する魔王城。そこに通ずる一本の大通り。そこに、道を挟んで二人の悪魔が向かい合っている。  
　一方は、余裕たっぷりな表情を浮かべもう一方は緊張としたような表情を浮かべている。当たり前だが余裕な表情を浮かべいるのかジェルミン、緊張した表情を浮かべるのがセシリアである。  
「どうやら、逃げずにきたようね。そこだけは、褒めてあげる」  
「最初から逃げるつもりなんてありません」  
　ジェルミンの軽い挑発にセシリアは負けじと言い返す。  
「あらそう。まぁ、せいぜい頑張ってちょうだいね」  
　そう言い、ジェルミンは自分の握手会のテントに戻る。  
「さて、私たちも準備を進めましょう」  
　ヴァイの言葉にセシリア達も戻る。  
　数分して、選挙執行員の悪魔がアナウンスを始める。  
『さて！！　時間に鳴りましたので！　セシリア様とジェルミン様の選挙を始めます！　制限時間は五時間！　その他の細かいルールは既にお伝えした通りでございます！　それでは、始め！』  
　その瞬間、ブーッと会社のサイレンが響き渡る。  
「さて、いよいよ始ました。とりあえず下地は引きましたが結局は当日のこの時間でどれだけ人を集められるかにかかっています！」  
「は、はい！」  
　と、そこで一人の男の悪魔がセシリアとヴァイの元に現れる。  
　今回の選挙はその悪魔の〈魅力〉を競う。その為、選挙区域なとば決めておらずセシリアとジェルミンの間は誰でも通ることが出来る。  
「あ、あの！　そこの悪魔さん」  
　セシリアは声を上げる。しかし、それよりも大きなキレのある声でジェルミンが声をかける。  
「ちょっと！　そこの貴方！」  
　道を通っていた悪魔は当然ジェルミンの方に向かう。  
「あ、あの何ですか？　って、貴方は！」  
　男の悪魔の顔をジェルミンはジーッと見る。そして、  
「アンタ、疲れてるんじゃない？　ちょっと手をだしな」  
　ジェルミンは、そう言い少し強引に手を取る。その瞬間男の顔が目視でわかるほど良くなっていた。  
　ジェルミンの魔力を少量流したのだろう。それにより男の悪魔の大量を回復させたのだ。  
「あの、貴方ジェルミン様ですよね。その、ありがとうございます」  
「あら、様なんてそんな仰々しい感じじゃなくて良いわよ。私、今は幹部でもないんだから。アンタと同じただの一悪魔としてお話しましょう。今度は友達も連れてきて。そしたら」  
　そこまで言いジェルミンはグイッと耳元で囁く。  
「今度は、もっと凄いサービスしてあげる」  
「は、はい！　分かりました！」  
　そう言い、男は大急ぎでそこを離れる。恐らく友や知人を連れてくるのだろう。  
　その主案を見ながらヴァイは若干険しい顔をしながら言う。  
「やりますねぇ。流石、〈色欲〉の称号を持つハイキュバス。人をたらし込むのはお手の物。しかも、この選挙の本質いえ、この場合の必勝法をよく理解している」  
　ハイキュバスとは、悪魔の種族であり男を誑かすサキュバスと女をたぶらかすインキュバス。この二つの特性を持った極めて稀な種族である。だが、全ての性別の悪魔をたらし込む事ができるというのはこの選挙では大きなアドバンテージだろう。  
「必勝法ってあるんですか？」  
　セシリアはヴァイに顔を向けて聞く。  
「セシリア嬢、顔は道に。ここを通る者一人たりとも逃さないように見て下さい。説明はします」  
　今回の選挙。その必勝法とはどれだけのリピーターを作れるかである。ヴァイがこの選挙の序盤で言った通りいくら宣伝に力を入れようが結局はこの当日にこの目の前の道を通る悪魔をどれだけ惹きつけられるかが肝である。  
　と言っても、幾ら大通りでも一日の中の五時間。その道を通る人間の数なんてはたかが知れている。故に、より多くの悪魔を集めるには自分の所にきた悪魔に他の悪魔を呼び込んで貰うしか無いのだ。一度来た悪魔が更に数人の悪魔を集め、その悪魔一人一人がまた数人の悪魔を呼び込む。  
　しかし、この必勝法は弱者が強者に勝つ必勝法では無い。  
「ただし、これは最初の悪魔を必ず自分のところに呼び込むことの出来る圧倒的な強者の必勝法です。なので、私はあえてセシリア嬢に教えてませんでした。この策は今回は通用しないと思ったので。勝手な判断をして申し訳ありません」  
「い、いえ。別に怒ったりはしません。ヴァイさんの考えは打倒だと思うので。それでも、負けるつもりはありませんけど」  
　その凛々しい横顔を見てヴァイは少し口元をあげる。  
「安心して下さい。セシリア嬢。不利には不利の戦い方がございます」  
　しかし、その後も着々とジェルミンとの差はつけられる。というのも  
「きゃー！　ジェルミン様ぁー！！」  
「お会いして嬉しいでぇーす！」  
　ジェルミンとは主従の契約は結んでいないが、いちジェルミンファンが押し寄せてきたからだ。  
「分かっていましたが、女性悪魔No. 1は伊達ではありませんね。あの、勢力は我々ではどうしようもございません。セシリア嬢。狙いを男の通行人に限定して声をかけて下さい。グラさん。セシリア嬢の警備は良いので僕を使い、少しでもこちらの通りに人が通るように細工をお願いします。くれぐれも暴力的な事では無い方で」  
「わ、分かりました！」  
「了解」  
　しかし、そこまでしても二人の差は縮まらない。というのもジェルミンファンで出来た列に好奇心をくすぐられ通行人達までもが何かは分からずに並び出したかりだ。  
　その状況に二人は苦い顔をする。と、そこに一人の悪魔を筆頭にぞろぞろとセシリアにら集まってくる。  
「随分、苦戦してるようですね」  
「貴方は」  
　その悪魔は、最初の魔王選挙で惜しくもセシリア達に敗北したベリトラだった。  
「ベリトラ様……どうして」  
「私を打ち負かした相手が無様に負けるの見たくないというのが半分。それと、最も魔王に近い存在であるジェルミン様の戦力を大きく削ぐ事で出来れば我が主の力になると思い来たのが半分だ。まぁ、後ろの者達は皆後者だがな」  
　そう言い、現れたの魔王選挙参加者。もしくは、魔王選挙に負け元の自分の上司である〈七罪幹部〉に回帰した者達だった。と言っても、当たり前だがジェルミンに回帰したものはいないが。それでも、そこそこの人数だった。  
　ベリトラはセシリアの手を重ねると言う。  
「頼みますよ。貴方が負けては、私のたつせがない。それに、貴方は私の夢を背負っていることもゆめゆめお忘れなく」  
「は、はい！」  
　次にベリトラはヴァイにも声をかける。  
「何かまだ策はあるのだろう」  
　その言葉にヴァイはニヤリと答える。  
「当たり前です」  
　その後も、チラホラと通行人を集めるが中々差は縮められない。そして、ジェルミンの列は道を塞さぐレベルまて膨れあがる。  
「そろそろですね。セシリア嬢ここからは、少々動き変えます」  
「動きですか？」  
「というか、動きます。ルールー上、ここら一帯で握手をすれば別にテントの中で握手はしなくても良いのです。という事で、あの列に並んでいる人に声をかけて列をジェルミン様ではなく私たちの者にします」  
「そ、そんな事できるんですか！」  
「えぇ。あちらをよく見てください。外側にいる方々。特に男性の方々。表情が前の人と比べて明らかに暗いのが分かるはずです」  
「あ、確かに」  
「あーいうかたがたは、皆が並んでいるからなんとなく並んでいるかたがた。もしくは、知人に誘われて来たのは良いものの特にジェルミン様に興味のないかたがたです。ただし、ここまで並んだから引き換えすにら引き返せないかたがた。そう言う人相手ならこちらに興味を持たせる事も可能だと思いませんか？」  
「た、確かに。わ、分かりました。やってみます！」  
　そう言い、セシリアはテントを出てジェルミンの列に並ぶ。  
　セシリアは、ふぅーと息を吐くと自分の思う思いっきりの笑顔を作り中年の男に声をかける。  
「あ、あのすいません。よろしければ握手して貰って良いですか？」  
　中年の悪魔は一瞬怪訝そうにセシリアを見るがすぐに目を丸くする。  
「あ！　もしかして君……じゃなくてあなた様はセシリア様」  
「は、はい。セシリア・サタンです」  
「あぁー、やっぱり。いやー会えて嬉しいです。あの、ビブリオ・サタン様のご息女に会えるなんて。第二選挙の最後！　アレは凄かった。頑張って下さい！」  
「はい、ありがとうございます」  
　セシリアは、そう言い出された手を重ねる。その後も男の悪魔を中心に声をかけるとスムーズに握手をしてくれた。  
　だが、それも必然と言えるだろう。元々伝説的な魔王の娘という事で知名度はジェルミンと遜色ないのだ。ただ今までは、僕の数がゼロで大した実績も無かったがために誰も見向きもされなかっただけ。裏を返せば、実績を持ち魔王になるにはまだまだ遠くとも、他の魔王選挙立候補者と遜色の無い僕があれば簡単にセシリアに靡くのだ。  
　特に男の悪魔は強さに惹かれる。第二選挙で、セシリアがやったあの地形を変える大破壊は男の悪魔を惹きつけるに十分な〈魅力〉と言えるだろう。  
「少し、数が減っているような……」  
　自分の周りを並んでいる悪魔の数が徐々に減っていることにジェルミンは気づく。しかし、それでも動くことは出来ない。何故なら、目の前にいち早く捌くべき人数の悪魔がいるからだ。  
　それから、数時間。転機が起こる。  
「おーい！　セシリアー！！」  
　遠くからそんな声が聞こえる。見ると、そこには沢山のここいらでは見えない種族の悪魔達がセシリアの方を歩いくる。まつろわぬ民達、ガーナである。  
「ガーナさん！」  
　セシリアは嬉しさのあまり手を振る。  
「来てくれたんですね！」  
「たりめーだろー。友達のために何かするのは、当たり前だー！。まつろわぬ民達ほぼ全員ここに参上だー！　あ、後なんか郊外からきた悪魔もお前に会いにきたんだと」  
　確かに、まつろわぬ民に混じって他の都市や村の悪魔達もいる。恐らく、セシリアとヴァイの僕がチラシとここまでくる為のチケットを配り来た悪魔達だろう。  
　その数は容易にジェルミンの列を上回る。  
「ち、ちょっと待ったーー！！！　な、何で！　まつろわぬ民達がいるのよ！！」  
　その光景にさしものジェルミンも驚くことを我慢できず人前で声を荒げる。  
「あんた達はいつも中立の存在でしょー！　どうして、ここに来てるのよ！　おかしいでしょー！」  
　その言葉に場の空気が凍る。中には、もしや、賄賂でつけたのではと囁く物もいる。  
　しかし、そんなことはヴァイの一言で変わる。  
「何もおかしくはありませんよ。彼らは、自治権を認められた〈ハンドタウン〉のまつろわぬ民達ですが同時にこの魔界に住む悪魔。魔王選挙の選挙権は全ての者に与えらています。つまり、何も問題ないのです」  
「いや、それでも」  
　ジェルミンは尚食い下がろうとする。と、そこでガーナが口を開く。  
「おい！　オカマ！」  
「なっ！　誰がオカマよ！　私はれっきとした両生よ！」  
「知るかよ！　どっちにしろ俺たちは俺達の意志でダチの力になりたくてここにきてんだ！　それをとやかく言う筋合いわねー！」  
　ガーナの言葉にジェルミンは口全体を吊り上げ悔しがると、今度は逆にハァーと息を吐く。  
　すると、次の瞬間からはいつもの傲慢な態度に変わる。  
「ふん！　いいわ！　認めてあげるわよ！　ただし、それでも勝つのわこの私。それは、揺るがない事実よ」  
　そう言い、ジェルミンは再度目の前の悪魔の対応をし握手を交わす。  
「何だよ、アイツ」  
　ガーナはジェルミンに向かって舌を出す。  
　それからは、接戦が続いた。ジェルミンは来た人物全てに必ずリピーターをつけるやり方で着々と増やしていく。  
　逆にセシリアはリピーターを求める事はしない。その分、少しでも来てくれた者全てに選挙が始まる前に時間をかけ多くの悪魔に名前を打ったのがここで意味を成してきたのだ。  
(これなら、勝てる。勝てなくても、同点にさえ持ち込めれば……まぁ、何もなければの話ですが。しかし、そんな事は恐らく無いのでしょうが)  
　セシリアと握手をする為に多くの悪魔が押し寄せるながフードを被った悪魔が現れる。  
　その悪魔は、若干人の波を分けるように進行する。それから、数分後セシリアの所につく。  
　すると、至って自然な動作で懐からナイフを取り出す。しかし、誰もそれには気づかない。そのまま、フードを被った悪魔はそのナイフをセシリアに突き刺す！……直前でそのナイフは食い止められた。  
「ミスディレクション。ある一つの事に注意を向けさせ、見せたく無い物を見せないようにする手品などで使われるテクニック。しかし、その技術はこの魔界では全く違う職業の技術として使われる。それは、暗殺」  
　ポタポタと、ヴァイの手から血液が流れる。そこで初めて周りの者達は自分のすぐ近くであり得ない事が起きていることを知る。  
「な、何だ、これは！」  
「キャー！　血が！」  
しかし、そんな事はヴァイとフードの悪魔は気にしない。  
「優れた暗殺者はその空気に違和感なく溶け込み身の回りにいる人物の意識を自分以外の全ての物に向けさせる事が出来る。それにより起きる現象はいつ、誰が殺したかは不明。ただターゲットが死んだと言う事実のみが残る。」  
　フードの悪魔は離れようとする。ヴァイはすぐ手のひらに持っているナイフを突き刺しナイフの柄をぎゅっと握る。  
「そして、そんな超技術を可能にするのは一人のみ。そろそろ、顔を見せたらどうですか？　グラさんッ！」  
　そう言い、ヴァイはナイフが突き刺さっていない腕を振り上げる。その瞬間、フードの悪魔のフードが剥がれ現れたのは美しい銀色の髪と、精巧な人形を思わず顔立ちだった。ただし、表情は今は人形を通り越して氷のように冷たい。  
「グラ……さん」  
　セシリアは、驚きのあまり目を丸くし口をぱくぱくと動かす。  
　それを横目で見たヴァイは一言言う。  
「ここでは、なんです。場所を変えましょう」  
　その瞬間、ヴァイとグラはその場から消える。  
  
　　　　　　　　　　♢♢♢  
  
　一瞬当たりが光に包まれてたかと思うと次の瞬間、ヴァイとグラは近くの森に転移していた。  
　転移した、直後グラはヴァイに鋭い蹴りを放ち拘束を逃れる。  
　ヴァイは無様にも地面にゴロゴロと転がる。  
「やりますね。流石グラさん。転移直後にどうしても体を襲う平衡感覚の喪失。そこを間髪入れずに蹴りを放つとは」  
「賞賛は良い。それより、どうして私が今日だと分かったの？」  
ヴァイは、蹴られた腹を押さえながらヨロヨロと立ち上がりながら言う。  
「最初に疑問を持ち始めたのは第一選挙。確信を持ったのは今日この瞬間です」  
「疑問？」  
「えぇ。超一流の貴方の僕は皆一流。そんな、彼ら彼女らが我々を危険に晒すでしょうか？　晒したとしてその相手に手傷をおわされみすみす逃すでしょうか？　いえ、そんな事は絶対にありません」  
　それは、買い被りすぎとも言える言動だった。しかし、誰よりも近くでグラの仕事ぶりを見てきたヴァイの経験が分かる。こんな事は、あり得ないっと。  
「他にも〈銀の大槌〉の放火。あれも、よくよく考えれば不自然ですしね。敵対している商会が今まで悪質な嫌がらせ程度だったのに我々が来たとたんに放火といういきなり直接的な手を打ってきた。それも、今考えれば裏の事情に精通している貴方が後押しをしたと考えれば納得がいきます」  
　恐らく、グラは今の〈銀の大槌〉の現状を聞くとすぐにグザエリ商会にアポを取ったのだろう。そして、言葉巧みに誘導しあの強行をさせたのだろう。  
「流石だね、ヴァイ。全て正解。ただ、それには大きな矛盾がある。私は、そのピンチを全て助けてきた。それでも、どうして私を疑った？」  
「それこそ、今更ですね。貴方の暗殺方法はいつだってターゲットの内側に入り込み警戒心を解くことから始めるじゃないですか」  
　ヴァイは、寂しく笑う。それは、つまり自分達は最初からターゲットとしか見られていない事の証明なのだから。  
「そう、そこまで分かってるならもう仕方ないね」  
　グラは、ここからすぐに離れてさきほどいた場所に戻ろうとする。  
　ヴァイはそれを見越して言葉をかける。  
「ここから、離脱するのは構いませんがその間にセシリア様は逃げ切れますよ。ここからはかなり距離があるので。すぐに戻りたいならここにある術式を使うしかありません」  
　そう言い、ヴァイは地面に手を突っ込む。そこにあるのは術式が刻まれたタイルだった。術式に魔力を流せば元の場所に戻れるのだろう。  
　ヴァイは、それを懐にしまう。殺して奪えという事を示唆しているのだろう。  
　本来ならグラはヴァイのそれに乗る必要は無い。優れた暗殺者は二手、三手と策を張り巡らす事だ。勿論グラも、もし自分に何かあった時のためにあの場には他にも暗殺者を潜めている。しかし、そんな策をヴァイが見破れ無いわけがないことをグラは分かっている。  
　故に、グラはヴァイのその見え見えの挑発に乗る。乗った上で捻り潰す。  
「分かった。そのパネルは殺して奪う」  
　グラはそう言い、ナイフを構える。  
「させませんよ」  
　ヴァイは、自分の腰に収めている二本の短剣を引き抜く。  
  
　　　　　　　　　　♢♢♢  
  
　グラが自分を殺しにきた事を知り、そしてヴァイがそれを止め何処かに消えた。その怒涛のような展開にセシリアは呆然とその場にペタリと座り込むしか出来なかった。  
　他の者達も戸惑いを隠せず選挙自体も完全にストップする。  
　そんな、セシリアに三人の影が飛んでくる。グラが仕込んでいた僕達である。セシリアはそれを視認するも全く動けないでいる。  
　僕達の狂刃がセシリアの首を狙う。だが、その僕はすぐに四方八方に飛ばされる。  
「何やってんのよ。アンタ！　殺されそうになったのよ！　逃げるか泣き喚くかしなさいよ！」  
　セシリアは、顔を上げるとそこには選挙相手のジェルミンがいた。  
「ジェルミン……様。どうして」  
「アンタの僕のヴァイに頼まれたのよ。多分こんなことになるからセシリアを助けて上げてってね。報酬は今回の選挙で勝利をいただくこと」  
　それを聞き、セシリアはポツリと呟く。

「どうしてそんな事を」

　すぐにセシリアの言葉に正論を突きつける。

「そんなの決ってるじゃない！　アンタが弱いから！　弱い奴は、強い奴に守ってもらう！　そんな事も分からない訳！」

　その瞬間、軽度な爆発連続で起こる。そのつど周りの者は悲鳴をあげる。近くの建物がジェルミンとセシリアを押し潰さんと倒れる。しかし、ジェルミンは動かず建物に手を挙げる。その手には防御魔術の術式が展開される。建物はジェルミンに直撃するが、セシリアとジェルミンには傷一つつかない。

「ほら、分かったらさっさっと逃げた逃げた」

　非力なセシリアではこの状況では全く役に立たない。そんな事はセシリア自信が痛いほど分かってる。それでも尚セシリアは引き下がらない。

「そんな事分かってます！　それでも、引き下がりたくないんです！　私は！！　誰も死んで……ないんですッ……！」

　それは、セシリアの心からの叫び。ジェルミンはその烈火に燃える瞳を除く。

「……甘いわね。アンタ、誰も死んで欲しくないなんて、そんな事が曲がり通るほど世界は甘くわないのよ。世界はアンタが思っているほど、美しくもなければ優しくも無い。今回の裏切りもそうよ。アンタはあの殺し屋にずっと騙されてたのよ！」

「それでも、助けたいんですッ！　世界は美しくも優しくもないかもしれません！　それでも、好きになる価値はあります」

「……アンタ」

　ジェルミンは、フラッシュバックを起こす。

　ジェルミンは、サキュバスとインキュバスの特性を引き継ぎ男と女両方の特徴を持ったハイキュバスだ。それは、一見異性を魅了する淫魔からは妬ましく思うほど魅力的に第三者からは見えるかも知れないが事実はそうではない。

　両方の特徴を備えているという事は男でもら女でも無いという事だ。それは、どちらのグループにも属せない事を指す。自分と極端に違う存在を排除しようとするのは魔界でも珍しい事ではない。ジェルミンも例に漏れず他の他の淫魔から忌み嫌われた。常に、誰も近づかない洞窟に閉じ込めれ食糧も特に分けてもらえずただただ膨大な時間を孤独と闘うためだけに浪費する。

　それは、ジェルミンの心に闇を落とすには十分だった。

　そんな、ジェルミンを救い出してくれたのは当時魔界を統一しようと仲間を集めていたビブリオ・サタンだった。

　ビブリオ・サタンの言葉に最初こそ反発していたジェルミンにビブリオ・サタンは同じことを言った。

『世界は美しも優しくも無い。だがな、ジェルミンそれでも愛する価値はある』

　セシリアの言葉にジェルミンは、ニヤリと笑う。

「良いわよ。助けて上げる」

「えっ……？！」

「何驚いてんのよ。この私が助けて上げるっていうんだから喜びなさいよ！　もっと！」

「あ、はい」

　ジェルミンに詰め寄られセシリアは体をのけぞらせながら言う。

「じゃ行くわよ」

　そう言い、ジェルミンは小脇にセシリアを抱える。

「えっ、あのジェルミンさん」

「喋らない。舌噛むわよ！」

　ジェルミンの額に二つの角が生える。ジェルミンは、地面に力強く抱え込み勢いよく空中に跳ぶ。

　　　　　　　　　　♢♢♢

　グラとヴァイは、鍔迫り合いを繰り広げる。グラの動きにヴァイがついていけるのは、服に施した身体強化の魔術のお陰というのもあるが最も大きいのは経験だ。

　と言っても、戦闘の経験では無い。今までグラと一緒に戦い、その動きを見てきた。いわば、共闘からくる経験。その経験をヴァイは全て使いグラの動きを先読みし対応しているのだ。

「はぁ、はぁ。やりますね。どうでしょう？　グラさん。ここらへんで終わりにしませんか？　これ以上続けても無益なだけだと思いませんか？」

「思わない。お嬢様は殺す。それが、魔界の為」

「魔界の為……なぜそう思うのですか？　貴方も知っているでしょう。魔王様を殺した人物はタルタロスに所属してこの魔界選挙に出馬している誰かです。そんな者がもし新たな魔王になれば魔界がどうなるか、分からない貴方では無いはずです」

　ヴァイの言葉はしごく真っ当だ。しかし、それにグラは否を突きつける。

「確かにそうかも知れない。けど、それは魔王様を殺した存在が悪人だった場合」

「なんですって？」

「魔王様は、確かに偉大だった。そして、強かった。けど、強い存在はいつだって平和な世界では有害でしか無くなる。ヴァイ、いつも自分の頭の上に爆弾が乗っていたら撤去するでしょ」

「つまり、魔王様は爆弾だったと」

「そう。あんな自分の気持ち一つで世界をひっくり返すような力を持った存在が自分の主人で戯れに自分の命を奪う。そんな存在いなくなったほうが良いに決まってる」

「だから、殺した……暴論ですね」

「違う。これは、皆んなの意思。そして魔王様の意思。魔王様は、平和を守る為に私に殺しを命じた。そして、みんなそれを求めた。なら、平和の為に殺されるなら本望のはず」

　それを聞きヴァイの怒りは頂点に達する。奥歯を強く噛み顔を怒りに歪める。

「ふざけるなァ！」

　ヴァイは地面を強く踏み込むと一直線にグラ向かい力の限り手に持っている短剣を振り下ろす。

「ならなんです！　平和を脅かす可能性があるから。そんな理由で！　貴方はセシリア嬢を殺すというのですかッ！　まだ何もしていない、やり遂げていないセシリア嬢を！　貴方は！」

「そう。あの、力は危険。一瞬で地形を変えてしまう程の力。しかも、それは発展途上で本人はまるで扱えていない。そんな平和を脅かす存在は消えるべきッ！」

　そう言いグラは鋭い蹴りをヴァイの腹部に放つ。ヴァイは数メートル後方に飛ばされる。ヴァイはすぐに体制を立て直すと右手に持っている短剣を逆手に持ちヴァイに放つ。

　しかし、そんな一直線の攻撃はグラのナイフによって弾き飛ばされる。だが、それこそブラフ。飛んだ短剣を弾き飛ばす事で一瞬グラの意識をヴァイから完全に逸らす。その一瞬の隙にヴァイは全身全霊をかける。

　肉体が壊れるギリギリまで力を貯める。そして、その力を一気に解放し地面を強く蹴り上げ前に進む。肉が断絶する音と骨が砕ける音がヴァイの肉体に響く。今にも意識が途絶えそうになる。しかし、奥歯を噛み締めそれを必死に堪える。そして、今度は腕に力を貯め一気にそれを解放する。

「ハァーーー！！」

　足と同じく腕も強烈な痛みと肉と骨が砕ける嫌な音が肉体に響く。それでもヴァイはその振り下ろした刃を止めない。止めずにグラに振り下ろす。

　グラは、向かってくる短剣の軌道上にナイフをクロスさせガードする。しかし、グラはその瞬間これでは防ぎきれず自分が次の瞬間ミンチになる事を予感させる。故にグラは一言呟く。

「〈〉」

　その瞬間、ヴァイの視界から一瞬にしてグラが消える。

「しまっ」

「遅い！」

　グラはナイフを横なぎに振る。ヴァイの首後ろから鮮血が噴き出す。グラの体は途端に力が抜けその場に倒れる。

　ヴァイはチラリと視界を移動させる。グラの額には真っ黒な二本の角が生えている。それは、つまりヴァイが魔力を使ったといつ事だ。

　〈叛逆の世界〉それがグラの固有魔力をであり能力はあらゆる事象、位置、物の働きを全て反転させる能力。その力を使いヴァイとグラの場所を入れ替えたのだ。

　グラはヴァニイに近づきとどめを刺そうとナイフを振り下ろす。と、そこで急にグラはヴァイから離れる。次の瞬間、ヴァイとグラの間に黒い影が飛来し土煙を辺りに撒き散らし着地する。

　土煙が少し晴れると中からヴァイの頭上から手刀が振り下ろされる。ヴァイのすぐにその場から離れる。

　土煙が晴れるとそこには、ヴァイを抱えるセシリアとジェルミンがいた。

「おっひさー。グラ」

「ジェルミン」

　ジェルミンを見た、グラの表情がより冷たくなる。

「じゃ、打ち合わせ通り行くわよ」

「分かりました！」

　ジェルミンの言葉にセシリアは言葉を返す。そのれを聞き、ジェルミンはグラに向かっていく。

「ど、どうして……ここに」

「決まってるじゃないですか！　私は、ヴァイさんもグラさんもどっちも死んで欲しくないんです！　だから、私は二人を助ける為にここにきたんです！」

「セシリア嬢……ただし実際問題にどうするんですか？　私とグラさんの戦闘にジェルミン様を入れるのはいいですがこのままではどちらにしろどちらかが死にますよ」

「分かってます。なので、お願いがあるんです。ヴァイさんの力で私の力を引き出させて下さい！

ヴァイさんならそれが出来るんですよね」

「それは……そうですが」

　ヴァイの魔力〈悪魔の囁き〉は他者の脳に直接作用することができる。その力を利用すれば、セシリアの未だ発展途上の〈魔力〉をより精査し研磨する事はできる。

　事実、前魔王ビブリオ・サタンの強力な〈魔力〉はヴァイの力で制御していた事もあった。

「覚悟はあるのですか？　私が補助をすれば貴女の〈魔力〉安定する事は出来ます。しかし……それには貴女の体に大きな負荷がかかります」

　そもそも、他人に自分の脳を弄られるという行為そのものが体に大きな影響を与える。

「それでもお願いします。何も傷つかずに手に入れられる物は無いことぐらいはこの選挙で学びましたから」

　そう言いセシリアはニコリと笑う。その笑みには少女特有の可愛らしさはなくただ凛々しさだけが感じた。

「……分かりました。では」

　そういい、セシリアの顔にヴァイは近づける。「え、えっ！」

あまりのことに、セシリアは慌てて瞳を瞑る。数秒して、セシリアの額に何か硬いものが当たる感触に襲われる。

「えっ？」

　徐に目を開けるとセシリアの目の前にはヴァイの顔面が至近距離にあった。そこでセシリアは自分は今ヴァイに額をつけていることを知る。

「ヴァ、ヴァイさん」

「集中して下さい」

　ヴァイの言葉にコクリと頷く。刹那、セシリアとヴァイは闇色の光に包まれる。

　　　　　　　　　　♢♢♢

　ジェルミンはグラの攻撃をうけ地面に伏す。元々、魔界で全ての生物研究と医療の発展に携わってきたジェルミンと日夜その手を血で汚し続けてきたグラとは圧倒的に戦闘経験が違う。それは、僕の数が多い悪魔ほど強いという常識を覆すほどに。

「はぁはぁ、やるわね」

「ジェルミン。貴女じゃ私には勝てない。貴女の〈魔力〉はそもそも戦闘向きでは無い。大人しく、引き下がって欲しい」

　ジェルミンの〈魔力〉の名は〈〉。その力は、自分が愛している者に自分の抱く好意の感情を力に変え与える能力。

　その、能力の応用でジェルミンは敵に大量の力を与え続け相手をパンクするという戦闘方を取るり。しかしそれには対象に触れるのが条件だが。そんな事をグラが容易に許す事は無い。

「それは、出来ない相談ね」

「何故？　貴女とお嬢様にそこまでの接点は無いはず。そもそも選挙相手であるお嬢様が死ねば貴方は必然的にこの選挙に勝てる。いい事づくめのはず」

「ふん、人間はそこまで簡単に物事を割り切れる訳じゃ無いのよ。特に、良い女ってのわね。気まぐれなのよ。アンタみたいに、仕事脳じゃ無いのよ」

「その理屈はよく分からない。ただ、貴方が私の敵であることに変わりは無いことだけは分かった」

「全く、これだからお堅い頭の女は嫌いなのよね」

　そう言い、ヴァイは懐から一つ取り出す。それは、蠍の刻印が施された口紅だった。

　グラは、その口紅から感じる微かな魔力に警戒する。

「それは……」

「あら気づいた？　これは、私が愛した人。ビブリオ・サタン様からの贈り物。その名も〈〉よ」

　ビブリオ・サタンは生前、世界のあらゆるルールーをねじ曲げる〈魔力〉を持っていた。

　ビブリオ・サタンはその規格外の魔力と自分の直属の部下である〈七罪幹部〉の魔力を合わせる事で七つの協力なアイテムを作った。そこそが〈魔王の贈り物〉である。

「私の〈魔王の贈り物〉の能力はね、つけると他者に向けられる私に対する怨嗟の感情を

全て私の力に還元するその名も〈〉」

「ただし、五分しか持たない」

「あら、よく知ってるわね」

　そう言い、その口紅を唇に塗る。その瞬間、ジェルミン髪は逆立ち全身に協力な魔力を纏う。

「そうよ。五分しか持たないわ。だから五分、アンタが逃げ続ければアンタの勝ちよ！　だから！」

　その瞬間全力でジェルミンは地をかける。

「全力で逃げてみなさい！」

　その瞬間、グラの目の前まで距離を詰めたジェルミンが鋭い抜き手を放つ。グラはナイフでその腕を切り落とそうとするが刃は通ることは無い。ジェルミンは、次にグラの顔面を掴み思いっきり地面に叩きつけようとするがグラは〈叛逆の世界〉を使い自分の目の前にある葉っぱと自分の位置を入れ替える。

　一度、体制を立て直そうとする距離を取ろうとするグラ。しかし、そう思った次の瞬間には目の前にジェルミンが現れる。ジェルミンは拳を握り凄まじいラッシュをかける。グラはそれを紙一重で交わす。

「無駄よッ！アンタが私を憎めば憎むほど、私に敵意向ければ向けるほど私は強くなるッ！」

　ジェルミンが、蹴り回し蹴りを放つ。その蹴りはグラにクリーンヒットし吹き飛ばされる。

　ジェルミンは、ゆっくりとグラの下に歩く。と、突然ジェルミンの頭に指令が飛ぶ。その内容を知りジェルミンはニヤリと笑う。

　グラは、木に背中を預けてグッタリとうなだられている。その姿を見下ろしながらジェルミンは語りかける。

「もう、終わりかしらね。アンタの考えは分からなくも無いけど。そでもやって良い事と悪い事があるのよ。というか！　私が愛した人を奪ったアンタを私は絶対に許さない！」

　そう言い、ジェルミンは止めとばかりに拳を握ると勢いよくその拳を突き出す。激しい轟音が辺りに響く。

「安心なさい。殺してはないわ。アンタを殺さないようにセシリアに言われてるから……あら？」

　ジェルミンはそこで気づく。グラを殴った手応えがないことに。

「う、嘘！　どうして！　どこにもいないのよ！」

「それは、貴方が私にダメージを殆どが与えていなかったから」

　その声はジェルミンの頭上から聞こえてきた。ジェルミンはすぐに上を向くがもう遅い。木の上から落下しそのままジェルミンの体をグラはまるで紙でも切るように斜めに切り裂く。ジェルミンの周り赤く染める。

「……どうして」

「知ってるはず。私の〈魔力〉はあらゆる物を反転させる。それを使い、貴方に与えるダメージを快楽に反転した。ついでに、私が貴女に抱く感情も反転した。だから、今は貴女のことが愛おしてくてたまらない」

　それを聞き、ジェルミンは驚きを通して笑みをこぼす。最初の痛みを快楽に変える原理はまだ分かる。

　〈湾曲する怨嗟〉の対処方法として憎しみという感情を愛おしさに反転させるというのも有効な手ではある。だが、そんな事をして人を殺せるだろうか？　否、出来ない。愛おしく思う人間をこうも簡単に殺せるなんて事は不可能なはずなのだ。そう、普通なら

「アンタにとって感情すらも殺す道具って訳ね。アンタは根本では何も思ってない」

　切り裂かれた痛みに耐え荒い息を繰り返しながらジェルミンは言う。

「私の心の奥底にあるのは、平和を守りたいという気持ちだけ。その為なら私はなんだってできる」

「……あっそう」

　そう言い、ジェルミンはその場に倒れ意識を途切らせる。しかし、その表情は何処から満足が言っているようだった。

　グラは、そんなジェルミンにとどめを刺そうとナイフを向ける。

「そこまでです。貴女のターゲットはここにいます」

　その言葉を聞きすぐに声のする方を向く。そこにはターゲットであるセシリアがいた。ただし、その姿はグラの知っている姿とは多少異なっていた。

　その額には二本の黒い角が生え金色の髪には黒いメッシュが入っている。

「その姿は……魔力が完全に解放された姿」

「そうです。ヴァイさんのお陰で。あの、グラさん。もうやめませんか？　こんな事。ヴァイさんから全て教えてもらいました。私のお父さんを殺したのがグラさんなのも。その動機も」

「そう。それなら、どうする？　私を殺す？」

そう言い、グラはナイフを構える。

「いいえ。殺しません。そんな事を知っても私はグラさんのことが大好きですから」

「そう。それなら、大好きな私の為に死んで」

そう言いグラは地面を強く蹴ると、そのナイフでセシリアの心臓に突き刺そうとする。しかし、その刃の軌道は途中でピタリと止まる。

「ッ？！」

　魔術で止められた訳ではない。その奇妙な事象にグラは戸惑いを隠せないでいる。

　と、そこでセシリアはグラの腕を掴むと足を引っ掛けその場に押し倒す。

「グラさん！　もうこんな事やめましょう！　こんな事して何になるんですか？！」

「平和になる」

「なりませんよ。少なくとも、誰かを殺している時点で平和じゃありません！　グラさんが傷ついている時点で平和じゃるありませんよ！」

「私は、傷ついてなんか」

「傷ついてますよ！　少なくとも、傷ついていない人はそんな悲しい目をしません！　傷ついて無い人は、私なんかにカッコいいって言われて嬉しそうになんかしません！」

「ッ！　うるさい！」

　そういい、グラは〈叛逆の世界〉を使い自分とセシリアの位置を変える。それによりセシリアのり上にグラが跨る体勢となる。グラはナイフを突き刺そうとするがやはりピタリとナイフは空中で静止する。

「どうして」

「無駄です。私の〈魔力〉でここら一体での殺傷好意を禁止にしました。もう、グラさんは私を殺せません」

　セシリアの〈魔力〉は〈〉。半径一キロ内の空間内にあらゆるルールをつけることができる。

　今回、セシリアはその能力で殺傷能力の禁止と嘘の禁止というルールーを課した。

「グラさん。今、私にナイフが突き刺さらずホッとしましたね」

　図星を疲れてグラは表情を崩す。

「本当は暗殺なんて辞めたいんですよね？」

「……辞めたい……けど出来ない。私は、暗殺が全てだから……平和の為に暗殺をする事が全てだから……辞められないッ！」

「ふざけないでください！」

　そう言いセシリアは勢いよく自分の額をグラの額にぶつける。それによりグラはセシリアの上から落とされる。セシリアはグラの体を抑える。

「勝手に自分の価値を決めないで下さい！　少なくとも、私は！　グラさんの暗殺をする姿にカッコいいと思った訳じゃ無いんですよ！　私は……いつだって最初に前に出て敵を倒すグラさんの姿に心を動かされたんです」

「私は……そんなカッコいい物じゃ」

「カッコいいですよ！　だからッ！　カッコよくて憧れだから私はこれ以上グラさんが傷ついて欲しくないんです」

　グラの頬にセシリアの涙が落ちる。

　グラは、そのセシリアの泣き顔を見て自然と込み上げてくる。

「……お嬢様……私いいのかな……平和を守らなくても良いのかな……」

　グラの頬にも一筋の涙が溢れる。それは、今まで溜め込んでいた物を全てを吐き出させようするように止めなく流れる。

「グラさんが傷つかないと守れない平和なんて、それこそ間違ってます」

「やっぱり……お嬢様は凄いな……」

　そう言い涙を流しながらグラは力なく笑った。

　　　　　　　　　♢♢♢

程なくして、グラは魔界警察に連行していった。

「いきましたか」

　グラの背中をいつまでも見守るセシリアの後ろからヴァイが声をかける。両足がボロボロの為普通あるけず、即興で作った木の松葉杖を使い現れる。

「ヴァイさん。はい。あの……私……やっぱり納得行きません！」

「分かってます。グラさんが今回起こした事は勿論グラさんの本心も多少ありますが……まだ誰かが糸を引いてるはずです。それを見つけることが出来ればグラさんを助ける事ができるかも知れません」

「なら……私は強くなりますッ！　グラさんをたぶらかした人を捕まえる事が出来るほど！　グラさんが帰ってきても何も言わせない程強く！」

「それでこそセシリア嬢です」

　と、そんな二人に声をかける人物が現れる。

「ちょっと、なーにいい雰囲気にらなってる訳？　言っとくけど魔王選挙は終わってないないのよ」

　二人が声のする方を向くとそこには、ボロボロな姿のジェルミンがいた。

「ジェルミン様、ご無事でしたか」

「無事に見える？　全身血だらけ、体は汚れ放題のこの姿でッ！　まぁいいわ。それより、ヴァイさっさと私たちを元の場所に戻りしなさいよ。まだ、魔王選挙は終わってないのよ」

　別に今更戻らなくても結果は見えている。多少に中身は違うがそれでも約束通りジェルミンはセシリアの身の安全を守ったのは事実。ならば、代償として今回の勝利をセシリアのたちは約束通り明け渡さなくてはいけない。

　ヴァイは、セシリアの方を向く。セシリアはコクリと頷く。どうやら既に覚悟は決まっているらしい。ヴァイは少しため息をつくと

「……分かりました」

と言う。

　眩しい光に目が襲われ数秒後、だんだんと視界が鮮明になる。

「ここが」

ポツリとセシリアがこぼした瞬間、どこからともなく声が聞こえる。

「おい！　ここにいたぞ！」

　その声はたちまち大きくなり、ここら一帯のの住人を集まり口々にセシリアとヴァイに賞賛の声を言う。

「あの、これは」

セシリアの言葉にジェルミンは首元を触る。それに気づいたのはヴァイだった。

　ヴァイは、セシリアの首元の襟を見る。そこには、小さな魔術機械がついついた。

　恐らく、セシリアをヴァイのところに連れて行く途中につけていたのだろう。そして、セシリアとグラの行動をその魔術機械に移すここにいる皆に映像として流したのだ。

「なぜ、このようなことを？」

　ヴァイはジェルミンに近づき聞く。

「別に、大した事じゃないわよ。ただ、私もアンタと同じでセシリアにかけてみたいと思っただけ」

　そう言うと、ジェルミンは拡声の魔術を使い選挙管理委員の者に声をかける。

『ちょっと選挙管理委員！　選挙の結果発表よ！

予定の時間は過ぎてるでしょ！』

　そのジェルミンの言葉にあたふたしながら選挙管理委員の悪魔は言う。

「は、はぁー。で、でも……あー言う事が起きたのでこの選挙は無効で後日仕切り直しの方が……」

『はぁー馬鹿ねアンタ。この選挙の内容は魅力を競う者のの筈よ。この現状をみたら誰がどう見たってセシリアの勝ちでしょうか』

「そ、それはジェルミン様自ら負けを認めると？」

『そう受け取って貰っても構わないわ』

「わ、分かりました」

　そう言うと選挙管理委員の悪魔は高らかに言う。

「えぇー！　注目っ！　第三選挙。勝者！　セシリア様です！」

　その選挙管理委員の悪魔の声に一瞬場は静寂に包まれたがすぐに歓喜の声が上がる。だが、その予想外の事にセシリアは動揺を隠せないでいた。

「あの、本当に良いんですか？　約束なら、私は貴女に」

「いいのよ。そもそも、私はなから魔王になるつもりなんて無かったし」

「えっ」

「私はただ最低でもビブリオ・サタンぐらい良い悪魔が魔王になってくれればいいのよ。それで、いなければいないで私がなってやろうって魂胆だったし。だから、私的にはどう転んでも美味しいのよ。この、状況は。まぁ、せいぜいこれからも頑張りなさいよ」

　そう言うとジェルミンは群衆をかき分けてその場をさる。

　セシリアはそんなジェルミンの後ろ姿に無言で頭を下げた。

「ジェルミンさん、凄い悪魔……ですね」

「えぇ。可憐と情熱を備えた凄まじい悪魔ですよ。負けられませんね」

「はい」

　セシリアの僕の数　協力者・一

エピローグ。

　二週間後。

　最初に魔王選挙が始まった　　スタジアム今、次々と悪魔の名前が響き渡る。

　そう今日は第一選挙に勝ち残った十人の悪魔が呼ばれている。

　その登場口でセシリアは何度も深呼吸をする。

「まだ、緊張しているんですか？」

「やっぱり、まだ慣れませんから」

　そう、気恥ずかしそうにセシリアは笑う。

「けど、慣れてもらわないと困る。私が私らしく生きる為にも」

　と、奥から一人の悪魔が現れる。その悪魔は二週間前、セシリアを殺そうとした誰よりも平和を守ろうとした悪魔グラだ。

　彼女は、あの後念入りに調べられた結果何者かにより認識が歪められた事が分かった。勿論、それで完全に無罪とはいかないが今までのグラのやってきた功績。そして、グラが捕まっていこうメキメキと魔王としての頭角を表したセシリアの影響力によりグラは監視付きでの外出まで認めらるようなった。

「そうですね。じゃぁ、行ってきます」

　セシリアはそう言うと歩き出す。その出立ちに緊張といったものは見受けられない。

『そして、最後は──……』

　セシリアの後ろ姿を見ながらグラがポツリと言う。

「けど、まだ何も終わってない」

「そうですね」

　セシリアを殺そうとしたのはグラだが。魔王ビブリオ・サタンを殺したのはグラでは無い。グラも自分が殺したと思っていたが調べるとそれが不可能な事が分かった。

　つまり、未だにこの魔王選挙を引き起こすきっかけを作った真の魔王殺しはこの中にいるのだ。

「でも、どうにかなる気がします。今のセシリア嬢をいや、今の我が主人を見てると」

『最初は、どん底。しかし！　持って生まれた、カリスマ性、強運、戦闘力で這い上がってきた正に生きる伝説ーー！！！　総僕数、十一万七千五百三十六人！！　セシリア・サタン様ァーーー！！』

　その言葉と共にセシリアがヒードニズム闘技場に現れる。その瞬間、割れんばかりの歓声と拍手が巻き起こる。

　それを聞きセシリアは絶句する。いつだって自分の勝利の為に頭を巡らせて来たヴァイが勝利を自ら捨て自分の命を守ろうとする。そこまで切羽詰まっているという事だ。しかし、それでも……。

「ジェルミン様。グラさんとヴァイさんが戦ったとして勝てますか？　どっちも生き残る可能性はありますか？」

「無いわね。それは絶対に無い。必ずどちらかが死ぬ。ついでに言うと高確率で死ぬのはヴァイね」

「そうです……ね……あの！　ジェルミンさん！　お願いがあります！　私をヴァイさんのところに連れて行って下さい！」

　その斜め上の回答にジェルミンは一瞬だけ驚くような表情を見せるとすぐにはぁーという明らかのい嫌な表情を作る。

「アンタ何言ってるか分かってるの！　良い！　ここわね逃げるのが正解なのよ！　どうしてか分かる！　それはアンタが

弱いから！　弱い奴は、強い奴に守ってもらう！　そんな事も分からない訳！」  
　その瞬間、軽度な爆発連続で起こる。そのつど周りの者は悲鳴をあげる。近くの建物がジェルミンとセシリアを押し潰さんと倒れる。しかし、ジェルミンは動かず建物に手を挙げる。その手には防御魔術の術式が展開される。建物はジェルミンに直撃するが、セシリアとジェルミンには傷一つつかない。  
「ほら、分かったらさっさっと逃げた逃げた」  
　非力なセシリアではこの状況では全く役に立たない。そんな事はセシリア自信が痛いほど分かってる。それでも尚セシリアは引き下がらない。  
「そんな事分かってます！　それでも、引き下がりたくないんです！　私は！！　誰も死んで……ないんですッ……！」  
　それは、セシリアの心からの叫び。ジェルミンはその烈火に燃える瞳を除く。  
「……甘いわね。アンタ、誰も死んで欲しくないなんて、そんな事が曲がり通るほど世界は甘くわないのよ。世界はアンタが思っているほど、美しくもなければ優しくも無い。今回の裏切りもそうよ。アンタはあの殺し屋にずっと騙されてたのよ！」  
「それでも、助けたいんですッ！　世界は美しくも優しくもないかもしれません！　それでも、好きになる価値はあります」  
「……アンタ」  
　ジェルミンは、フラッシュバックを起こす。  
　ジェルミンは、サキュバスとインキュバスの特性を引き継ぎ男と女両方の特徴を持ったハイキュバスだ。それは、一見異性を魅了する淫魔からは妬ましく思うほど魅力的に第三者からは見えるかも知れないが事実はそうではない。  
　両方の特徴を備えているという事は男でもら女でも無いという事だ。それは、どちらのグループにも属せない事を指す。自分と極端に違う存在を排除しようとするのは魔界でも珍しい事ではない。ジェルミンも例に漏れず他の他の淫魔から忌み嫌われた。常に、誰も近づかない洞窟に閉じ込めれ食糧も特に分けてもらえずただただ膨大な時間を孤独と闘うためだけに浪費する。  
　それは、ジェルミンの心に闇を堕とすには十分だった。  
　そんな、ジェルミンを救い出してくれたのは当時魔界を統一しようと仲間を集めていたビブリオ・サタンだった。  
　ビブリオ・サタンの言葉に最初こそ反発していたジェルミンにビブリオ・サタンは同じことを言った。  
『世界は美しも優しくも無い。だがな、ジェルミンそれでも愛する価値はある』  
　セシリアの言葉にジェルミンは、ニヤリと笑う。  
「良いわよ。助けて上げる」  
「えっ……？！」  
「何驚いてんのよ。この私が助けて上げるっていうんだから喜びなさいよ！　もっと！」  
「あ、はい」  
　ジェルミンに詰め寄られセシリアは体をのけぞらせながら言う。  
「じゃ行くわよ」  
　そう言い、ジェルミンは小脇にセシリアを抱える。  
「えっ、あのジェルミンさん」  
「喋らない。舌噛むわよ！」  
　ジェルミンの額に二つの角が生える。ジェルミンは、地面に力強く抱え込み勢いよく空中に跳ぶ。  
  
　　　　　　　　　　♢♢♢  
  
　グラとヴァイは、鍔迫り合いを繰り広げる。グラの動きにヴァイがついていけるのは、服に施した身体強化の魔術のお陰というのもあるが最も大きいのは経験だ。  
　と言っても、戦闘の経験では無い。今までグラと一緒に戦い、その動きを見てきた。いわば、共闘からくる経験。その経験をヴァイは全て使いグラの動きを先読みし対応しているのだ。  
「はぁ、はぁ。やりますね。どうでしょう？　グラさん。ここらへんで終わりにしませんか？　これ以上続けても無益なだけだと思いませんか？」  
「思わない。お嬢様は殺す。それが、魔界の為」  
「魔界の為……なぜそう思うのですか？　貴方も知っているでしょう。魔王様を殺した人物はタルタロスに所属してこの魔界選挙に出馬している誰かです。そんな者がもし新たな魔王になれば魔界がどうなるか、分からない貴方では無いはずです」  
　ヴァイの言葉はしごく真っ当だ。しかし、それにグラは否を突きつける。  
「確かにそうかも知れない。けど、それは魔王様を殺した存在が悪人だった場合」  
「なんですって？」  
「魔王様は、確かに偉大だった。そして、強かった。けど、強い存在はいつだって平和な世界では有害でしか無くなる。ヴァイ、いつも自分の頭の上に爆弾が乗っていたら撤去するでしょ」  
「つまり、魔王様は爆弾だったと」  
「そう。あんな自分の気持ち一つで世界をひっくり返すような力を持った存在が自分の主人で戯れに自分の命を奪う。そんな存在いなくなったほうご言いに決まってる」  
「だから、殺した……暴論ですね」  
「違う。これは、皆んなの意思。そして魔王様の意思。魔王様は、平和を守る為に私に殺しを命じた。そして、みんなそれを求めた。なら、平和の為に殺されるなら本望のはず」  
　それを聞きヴァイの怒りは頂点に達する。奥歯を強く噛み顔を怒りに歪める。  
「ふざけるなァ！」  
　ヴァイは地面を強く踏み込むと一直線にグラ向かい力の限り手に持っている短剣を振り下ろす。  
「ならなんです！　平和を脅かす可能性があるから。そんな理由で！　貴方はセシリア嬢を殺すというのですかッ！　まだ何もしていない、やり遂げていないセシリア嬢を！　貴方は！」  
「そう。あの、力は危険。一瞬で地形を変えてしまう程の力。しかも、それは発展途上で本人はまるで扱えていない。そんな平和を脅かす存在は消えるべきッ！」  
　そう言いグラは鋭い蹴りをヴァイの腹部に放つ。ヴァイは数メートル後方に飛ばされる。ヴァイはすぐに体制を立て直すと右手に持っている短剣を逆手に持ちヴァイに放つ。  
　しかし、そんな一直線の攻撃はグラのナイフによって弾き飛ばされる。だが、それこそブラフ。飛んだ短剣を弾き飛ばす事で一瞬グラの意識をヴァイから完全に逸らす。その一瞬の隙にヴァイは全身全霊をかける。  
　肉体が壊れるギリギリまで力を貯める。そして、その力を一気に解放し地面を強く蹴り上げ前に進む。肉が断絶する音と骨が砕ける音がヴァイの肉体に響く。今にも意識が途絶えそうになる。しかし、奥歯を噛み締めそれを必死に堪える。そして、今度は腕に力を貯め一気にそれを解放する。  
「ハァーーー！！」  
　足と同じく腕も強烈な痛みと肉と骨が砕ける嫌な音が肉体に響く。それでもヴァイはその振りほろした刃を止めない。止めずにグラに振り下ろす。  
　グラは、向かってくる短剣の軌道上にナイフをクロスさせガードする。しかし、グラはその瞬間これでは防ぎきれず自分が次の瞬間ミンチになる事を予感させる。故にグラは一言呟く。  
「〈叛逆の世界〉」  
　その瞬間、ヴァイの視界から一瞬にしてグラが消える。  
「しまっ」  
「遅い！」  
　グラはナイフを横なぎに振る。ヴァイの首後ろから鮮血が噴き出す。グラの体は途端に力が抜けその場に倒れる。  
　ヴァイはチラリと視界を移動させる。グラの額には真っ黒な二本の角が生えている。それは、つまりヴァイが魔力を使ったといつ事だ。  
　〈叛逆の世界〉それがグラの固有魔力をであり能力はあらゆる事象、位置、物の働きを全て反転させる能力。その力を使いヴァイとグラの場所を入れ替えたのだ。  
　グラはヴァニイに近づきとどめを刺そうとナイフを振り下ろす。と、そこで急にグラはヴァイから離れる。次の瞬間、ヴァイとグラの間に黒い影が飛来し土煙を辺りに撒き散らし着地する。  
　土煙が少し晴れると中からヴァイの頭上から手刀が振り下ろされる。ヴァイのすぐにその場から離れる。  
　土煙が晴れるとそこには、ヴァイを抱えるセシリアとジェルミンがいた。  
「おっひさー。グラ」  
「ジェルミン」  
　ジェルミンを見た、グラの表情がより冷たくなる。  
「じゃ、打ち合わせ通り行くわよ」  
「分かりました！」  
　ジェルミンの言葉にセシリアは言葉を返す。そのれを聞き、ジェルミンはグラに向かっていく。  
「ど、どうして……ここに」  
「決まってるじゃないですか！　私は、ヴァイさんもグラさんもどっちも死んで欲しくないんです！　だから、私は二人を助ける為にここにきたんです！」  
「セシリア嬢……ただし実際問題にどうするんですか？　私とグラさんの戦闘にジェルミン様を入れるのはいいですがこのままではどちらにしろどちらかが死にますよ」  
「分かってます。なので、お願いがあるんです。ヴァイさんの力で私の力を引き出させて下さい！  
ヴァイさんならそれが出来るんですよね」  
「それは……そうですが」  
　ヴァイの魔力〈悪魔の囁き〉は他者の脳に直接作用することができる。その力を利用すれば、セシリアの未だ発展途上の〈魔力〉をより精査し研磨する事はできる。  
　事実、前魔王ビブリオ・サタンの強力な〈魔力〉はヴァイの力で制御していた事もあった。  
「覚悟はあるのですか？　私が補助をすれば貴女の〈魔力〉安定する事は出来ます。しかし……それには貴女の体に大きな負荷がかかります」  
　そもそも、他人に自分の脳を弄られるという行為そのものが体に大きな影響を与える。  
「それでもお願いします。何も傷つかずに手に入れられる物は無いことぐらいはこの選挙で学びましたから」  
　そう言いセシリアはニコリと笑う。その笑みには少女特有の可愛らしさはなくただ凛々しさだけが感じた。  
「……分かりました。では」  
　そういい、セシリアの顔にヴァイは近づける。「え、えっ！」  
あまりのことに、セシリアは慌てて瞳を瞑る。数秒して、セシリアの額に何か硬いものが当たる感触に襲われる。  
「えっ？」  
　徐に目を開けるとセシリアの目の前にはヴァイの顔面が至近距離にあった。そこでセシリアは自分は今ヴァイに額をつけていることを知る。  
「ヴァ、ヴァイさん」  
「集中して下さい」  
　ヴァイの言葉にコクリと頷く。刹那、セシリアとヴァイは闇色の光に包まれる。  
  
　　　　　　　　　　♢♢♢  
  
　ジェルミンはグラの攻撃をうけ地面に伏す。元々、魔界で全ての生物研究と医療の発展に携わってきたジェルミンと日夜その手を血で汚し続けてきたグラとは圧倒的に戦闘経験が違う。それは、僕の数が多い悪魔ほど強いという常識を覆すほどに。  
「はぁはぁ、やるわね」  
「ジェルミン。貴女じゃ私には勝てない。貴女の〈魔力〉はそもそも戦闘向きでは無い。大人しく、引き下がって欲しい」  
　ジェルミンの〈魔力〉の名は〈愛の力〉。その力は、自分が愛している者に自分の抱く好意の感情を力に変え与える能力。  
　その、能力の応用でジェルミンは敵に大量の力を与え続け相手をパンクするという戦闘方を取るり。しかしそれには対象に触れるのが条件だが。そんな事をグラが容易に許す事は無い。  
「それは、出来ない相談ね」  
「何故？　貴女とお嬢様にそこまでの接点は無いはず。そもそも選挙相手であるお嬢様が死ねば貴方は必然的にこの選挙に勝てる。いい事づくめのはず」  
「ふん、人間はそこまで簡単に物事を割り切れる訳じゃ無いのよ。特に、良い女ってのわね。気まぐれなのよ。アンタみたいに、仕事脳じゃ無いのよ」  
「その理屈はよく分からない。ただ、貴方が私の敵であることに変わりは無いことだけは分かった」  
「全く、これだからお堅い頭の女は嫌いなのよね」  
　そう言い、ヴァイは懐から一つ取り出す。それは、蠍の刻印が施された口紅だった。  
　グラは、その口紅から感じる微かな魔力に警戒する。  
「それは……」  
「あら気づいた？　これは、私が愛した人。ビブリオ・サタン様からの贈り物。その名も〈魔王の贈り物〉よ」  
　ビブリオ・サタンは生前、世界のあらゆるルールーをねじ曲げる〈魔力〉を持っていた。  
　ビブリオ・サタンはその規格外の魔力と自分の直属の部下である〈七罪幹部〉の魔力を合わせる事で七つの協力なアイテムを作った。そこそが〈魔王の贈り物〉である。  
「私の〈魔王の贈り物〉の能力はね、つけると他者に向けられる私に対する怨嗟の感情を全て私の力に変えることが出来るの。その名も〈湾曲する怨嗟〉」  
「ただし、五分しか持たない」  
「あら、よく知ってるわね」  
　そう言い、その口紅を唇に塗る。その瞬間、ジェルミン髪は逆立ち全身に協力な魔力を纏う。  
「そうよ。五分しか持たないわ。だから五分、アンタが逃げ続ければアンタの勝ちよ！　だから！」  
　その瞬間全力でジェルミンは地をかける。  
「全力で逃げてみなさい！」  
　その瞬間、グラの目の前まで距離を詰めたジェルミンが鋭い抜き手を放つ。グラはナイフでその腕を切り落とそうとするが刃は通ることは無い。ジェルミンは、次にグラの顔面を掴み思いっきり地面に叩きつけようとするがグラは〈叛逆の世界〉を使い自分の目の前にある葉っぱと自分の位置を入れ替える。  
　一度、体制を立て直そうとする距離を取ろうとするグラ。しかし、そう思った次の瞬間には目の前にジェルミンが現れる。ジェルミンは拳を握り凄まじいラッシュをかける。グラはそれを紙一重で交わす。  
「無駄よッ！アンタが私を憎めば憎むほど、私に敵意向ければ向けるほど私は強くなるッ！」  
　ジェルミンが、蹴り回し蹴りを放つ。その蹴りはグラにクリーンヒットし吹き飛ばされる。  
　ジェルミンは、ゆっくりとグラの下に歩く。と、突然ジェルミンの頭に指令が飛ぶ。その内容を知りジェルミンはニヤリと笑う。  
　グラは、木に背中を預けてグッタリとうなだられている。その姿を見下ろしながらジェルミンは語りかける。  
「もう、終わりかしらね。アンタの考えは分からなくも無いけど。そでもやって良い事と悪い事があるのよ。というか！　私が愛した人を奪ったアンタを私は絶対に許さない！」  
　そう言い、ジェルミンは止めとばかりに拳を握ると勢いよくその拳を突き出す。激しい轟音が辺りに響く。  
「安心なさい。殺してはないわ。アンタを殺さないようにセシリアに言われてるから……あら？」  
　ジェルミンはそこで気づく。グラを殴った手応えがないことに。  
「う、嘘！　どうして！　どこにもいないのよ！」  
「それは、貴方が私にダメージを殆どが与えていなかったから」  
　その声はジェルミンの頭上から聞こえてきた。ジェルミンはすぐに上を向くがもう遅い。木の上から落下しそのままジェルミンの体をグラはまるで紙でも切るように斜めに切り裂く。ジェルミンの周り赤く染める。  
「……どうして」  
「知ってるはず。私の〈魔力〉はあらゆる物を反転させる。それを使い、貴方に与えるダメージを快楽に反転した。ついでに、私が貴女に抱く感情も反転した。だから、今は貴女のことが愛おしてくてたまらない」  
　それを聞き、ジェルミンは驚きを通して笑みをこぼす。最初の痛みを快楽に変える原理はまだ分かる。  
　〈湾曲する怨嗟〉の対処方法として憎しみという感情を愛おしさに反転させるというのも有効な手ではある。だが、そんな事をして人を殺せるだろうか？　否、出来ない。愛おしく思う人間をこうも簡単に殺せるなんて事は不可能なはずなのだ。そう、普通なら  
「アンタにとって感情すらも殺す道具って訳ね。アンタは根本では何も思ってない」  
　切り裂かれた痛みに耐え荒い息を繰り返しながらジェルミンは言う。  
「私の心の奥底にあるのは、平和を守りたいという気持ちだけ。その為なら私はなんだってできる」  
「……あっそう」  
　そう言い、ジェルミンはその場に倒れ意識を途切らせる。しかし、その表情は何処から満足が言っているようだった。  
　グラは、そんなジェルミンにとどめを刺そうとナイフを向ける。  
「そこまでです。貴女のターゲットはここにいます」  
　その言葉を聞きすぐに声のする方を向く。そこにはターゲットであるセシリアがいた。ただし、その姿はグラの知っている姿とは多少異なっていた。  
　その額には二本の黒い角が生え金色の髪には黒いメッシュが入っている。  
「その姿は……魔力が完全に解放された姿」  
「そうです。ヴァイさんのお陰で。あの、グラさん。もうやめませんか？　こんな事。ヴァイさんから全て教えてもらいました。私のお父さんを殺したのがグラさんなのも。その動機も」  
「そう。それなら、どうする？　私を殺す？」  
そう言い、グラはナイフを構える。  
「いいえ。殺しません。そんな事を知っても私はグラさんのことが大好きですから」  
「そう。それなら、大好きな私の為に死んで」  
そう言いグラは地面を強く蹴ると、そのナイフでセシリアの心臓に突き刺そうとする。しかし、その刃の軌道は途中でピタリと止まる。  
「ッ？！」  
　魔術で止められた訳ではない。その奇妙な事象にグラは戸惑いを隠せないでいる。  
　と、そこでセシリアはグラの腕を掴むと足を引っ掛けその場に押し倒す。  
「グラさん！　もうこんな事やめましょう！　こんな事して何になるんですか？！」  
「平和になる」  
「なりませんよ。少なくとも、誰かを殺している時点で平和じゃありません！　グラさんが傷ついている時点で平和じゃるありませんよ！」  
「私は、傷ついてなんか」  
「傷ついてますよ！　少なくとも、傷ついていない人はそんな悲しい目をしません！　傷ついて無い人は、私なんかにカッコいいって言われて嬉しそうになんかしません！」  
「ッ！　うるさい！」  
　そういい、グラは〈叛逆の世界〉を使い自分とセシリアの位置を変える。それによりセシリアのり上にグラが跨る体勢となる。グラはナイフを突き刺そうとするがやはりピタリとナイフは空中で静止する。  
「どうして」  
「無駄です。私の〈魔力〉でここら一体での殺傷好意を禁止にしました。もう、グラさんは私を殺せません」  
　セシリアの〈魔力〉は〈不平等な法〉。半径一キロ内の空間内にあらゆるルールをつけることができる。  
　今回、セシリアはその能力で殺傷能力の禁止と嘘の禁止というルールーを課した。  
「グラさん。今、私にナイフが突き刺さらずホッとしましたね」  
　図星を疲れてグラは表情を崩す。  
「本当は暗殺なんて辞めたいんですよね？」  
「……辞めたい……けど出来ない。私は、暗殺が全てだから……平和の為に暗殺をする事が全てだから……辞められないッ！」  
「ふざけないでください！」  
　そう言いセシリアは勢いよく自分の額をグラの額にぶつける。それによりグラはセシリアの上から落とされる。セシリアはグラの体を抑える。  
「勝手に自分の価値を決めないで下さい！　少なくとも、私は！　グラさんの暗殺をする姿にカッコいいと思った訳じゃ無いんですよ！　私は……いつだって最初に前に出て敵を倒すグラさんの姿に心を動かされたんです」  
「私は……そんなカッコいい物じゃ」  
「カッコいいですよ！　だからッ！　カッコよくて憧れだから私はこれ以上グラさんが傷ついて欲しくないんです」  
　グラの頬にセシリアの涙が落ちる。  
　グラは、そのセシリアの泣き顔を見て自然と込み上げてくる。  
「……お嬢様……私いいのかな……平和を守らなくても良いのかな……」  
　グラの頬にも一筋の涙が溢れる。それは、今まで溜め込んでいた物を全てを吐き出させようするように止めなく流れる。  
「グラさんが傷つかないと守れない平和なんて、それこそ間違ってます」  
「やっぱり……お嬢様は凄いな……」  
　そう言い涙を流しながらグラは力なく笑った。  
  
　　　　　　　　　♢♢♢  
  
程なくして、グラは魔界警察に連行していった。  
「いきましたか」  
　グラの背中をいつまでも見守るセシリアの後ろからヴァイが声をかける。両足がボロボロの為普通あるけず、即興で作った木ほ松葉杖を使い現れる。  
「ヴァイさん。はい。あの……私……やっぱり納得行きません！」  
「分かってます。グラさんが今回起こした事は勿論グラさんの本心も多少ありますが……まだ誰かが糸を引いてるはずです。それを見つけることが出来ればグラさんを助ける事ができるかも知れません」  
「なら……私は強くなりますッ！　グラさんをたぶらかした人を捕まえる事が出来るほど！　グラさんが帰ってきても何も言わせない程強く！」  
「それでこそセシリア嬢です」  
　と、そんな二人に声をかける人物が現れる。  
「ちょっと、なーにいい雰囲気にらなってる訳？　言っとくけど魔王選挙は終わってないないのよ」  
　二人が声のする方を向くとそこには、ボロボロな姿のジェルミンがいた。  
「ジェルミン様、ご無事でしたか」  
「無事に見える？　全身血だらけ、体は汚れ放題のこの姿でッ！　まぁいいわ。それより、ヴァイさっさと私たちを元の場所に戻りしなさいよ。まだ、魔王選挙は終わってないのよ」  
　別に今更戻らなくても結果は見えている。多少に中身は違うがそれでも約束通りジェルミンはセシリアの身の安全を守ったのは事実。ならば、代償として今回の勝利をセシリアのたちは約束通り明け渡さなくてはいけない。  
　ヴァイは、セシリアの方を向く。セシリアはコクリと頷く。どうやら既に覚悟は決まっているらしい。ヴァイは少しため息をつくと  
「……分かりました」  
と言う。  
　眩しい光に目が襲われ数秒後、だんだんと視界が鮮明になる。  
「ここが」  
ポツリとセシリアがこぼした瞬間、どこからともなく声が聞こえる。  
「おい！　ここにいたぞ！」  
　その声はたちまち大きくなり、ここら一帯のの住人を集まり口々にセシリアとヴァイに賞賛の声を言う。  
「あの、これは」  
セシリアの言葉にジェルミンは首元を触る。それに気づいたのはヴァイだった。  
　ヴァイは、セシリアの首元の襟を見る。そこには、小さな魔術機械がついついた。  
　恐らく、セシリアをヴァイのところに連れて行く途中につけていたのだろう。そして、セシリアとグラの行動をその魔術機械に移すここにいる皆に映像として流したのだ。  
「なぜ、このようなことを？」  
　ヴァイはジェルミンに近づき聞く。  
「別に、大した事じゃないわよ。ただ、私もアンタと同じでセシリアにかけてみたいと思っただけ」  
　そう言うと、ジェルミンは拡声の魔術を使い選挙管理委員の者に声をかける。  
『ちょっと選挙管理委員！　選挙の結果発表よ！  
予定の時間は過ぎてるでしょ！』  
　そのジェルミンの言葉にあたふたしながら選挙管理委員の悪魔は言う。  
「は、はぁー。で、でも……あー言う事が起きたのでこの選挙は無効で後日仕切り直しの方が……」  
『はぁー馬鹿ねアンタ。この選挙の内容は魅力を競う者のの筈よ。この現状をみたら誰がどう見たってセシリアの勝ちでしょうか』  
「そ、それはジェルミン様自ら負けを認めると？」  
『そう受け取って貰っても構わないわ』  
「わ、分かりました」  
　そう言うと選挙管理委員の悪魔は高らかに言う。  
「えぇー！　注目っ！　第三選挙。勝者！　セシリア様です！」  
　その選挙管理委員の悪魔の声に一瞬場は静寂に包まれたがすぐに歓喜の声が上がる。だが、その予想外の事にセシリアは動揺を隠せないでいた。  
「あの、本当に良いんですか？　約束なら、私は貴女に」  
「いいのよ。そもそも、私はなから魔王になるつもりなんて無かったし」  
「えっ」  
「私はただ最低でもビブリオ・サタンぐらい良い悪魔が魔王になってくれればいいのよ。それで、いなければいないで私がなってやろうって魂胆だったし。だから、私的にはどう転んでも美味しいのよ。この、状況は。まぁ、せいぜいこれからも頑張りなさいよ」  
　そう言うとジェルミンは群衆をかき分けてその場をさる。  
　セシリアはそんなジェルミンの後ろ姿に無言で頭を下げた。  
「ジェルミンさん、凄い悪魔……ですね」  
「えぇ。可憐と情熱を備えた凄まじい悪魔ですよ。負けられませんね」  
「はい」  
　セシリアの僕の数　協力者・一  
  
エピローグ。  
　二週間後。  
　最初に魔王選挙が始まった　　スタジアム今、次々と悪魔の名前が響き渡る。  
　そう今日は第一選挙に勝ち残った十人の悪魔が呼ばれている。  
　その登場口でセシリアは何度も深呼吸をする。  
「まだ、緊張しているんですか？」  
「やっぱり、まだ慣れませんから」  
　そう、気恥ずかしそうにセシリアは笑う。  
「けど、慣れてもらわないと困る。私が私らしく生きる為にも」  
　と、奥から一人の悪魔が現れる。その悪魔は二週間前、セシリアを殺そうとした誰よりも平和を守ろうとした悪魔グラだ。  
　彼女は、あの後念入りに調べられた結果何者かにより認識が歪められた事が分かった。勿論、それで完全に無罪とはいかないが今までのグラのやってきた功績。そして、グラが捕まっていこうメキメキと魔王としての頭角を表したセシリアの影響力によりグラは監視付きでの外出まで認めらるようなった。  
「そうですね。じゃぁ、行ってきます」  
　セシリアはそう言うと歩き出す。その出立ちに緊張といったものは見受けられない。  
『そして、最後は──……』  
　セシリアの後ろ姿を見ながらグラがポツリと言う。  
「けど、まだ何も終わってない」  
「そうですね」  
　セシリアを殺そうとしたのはグラだが。魔王ビブリオ・サタンを殺したのはグラでは無い。グラも自分が殺したと思っていたが調べるとそれが不可能な事が分かった。  
　つまり、未だにこの魔王選挙を引き起こすきっかけを作った真の魔王殺しはこの中にいるのだ。  
「でも、どうにかなる気がします。今のセシリア嬢をいや、今の我が主人を見てると」  
『最初は、どん底。しかし！　持って生まれた、カリスマ性、強運、戦闘力で這い上がってきた正に生きる伝説ーー！！！　総僕数、十一万七千五百三十六人！！　セシリア・サタン様ァーーー！！』  
　その言葉と共にセシリアがヒードニズム闘技場に現れる。その瞬間、割れんばかりの歓声と拍手が巻き起こる。

セシリア僕の数・十一万七千五百三十六人　強力者・二人